昭和60年5月1日号（毎月2回1、15日発行）第28巻・第9号　通巻630号　昭和54年6月2日第三種郵便物認可

今日のソ連邦

1985
9
5.1.



科学万博のソ連館をご紹介します！

第9号　1985年5月1日発行

本誌の記事と写真はノーボスチ通信の提供によるものです。

今日のソ連邦



★数字は関連記事のページ

編集　在日ソ連大使館広報部　電話03(447)3536(代表)
〒141 東京都品川区東五反田3―9―13
振替口座　東京9―122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

発行所　(株)新時代社　電話03(293)4881
〒101 東京都千代田区神田神保町1―44
振替口座　東京0―13581（加入者名＝新時代社）

本誌の定期購読をご希望の方は、1部半年1800円、1年3000円、2年5000円の誌代（送料込み）を添えて、上記のいずれかにお申し込み下さい。多部数の場合の誌代は、お問い合わせを。

科学万博のソ連館をご紹介します！（1）



3月15日に行われたソ連館の開館式であいさつするN・フィリポフ・ソ連政府代表。その後ろ右からB・ココレフ・ソ連館館長、L・チジョフ駐日ソ連公使。

科学万博——つくば'85が開会してから何週間かが過ぎた。準備段階でのあわただしい空気もすっかり落ちつき、各パビリオンの展示も本格的に完成し、博覧会としての毎日のリズミカルな活動が始まった。そこで、ソ連館の展示テーマや主な展示内容を関係者に話してもらうことにした。

全体テーマ「地球と宇宙に平和を！」

ソ連館館長　B・V・ココレフ

50分もかければソ連館を全部見れるようになっていますが、もちろん見物する人の方で、もっと簡単に見てしまうこともできるし、自分に最も興味のある展示物を丁寧に見ることもできます。

まず第一に、ソ連館の展示の規模を知るためにぜひとも欠かせない数字を二、三ご紹介しましょう。ソ連館の総面積は二九六六平方m、その内訳は、展示コーナーが二三九三平方m、ロシア料理のレストランが四二一平方m、民芸品売り場が一五二平方mです。

ソ連館の展示物は一五〇〇点に近く、ショーケースに展示した印刷物を含めると二〇〇〇点に及びます。

準備にあたっては、ソ連の人間、家庭、集団の生活を示すこと、人格の調和のとれた全面的発達のために、またソビエト人の物質的・精神的要求を満足させ、基本的権利と自由を保障するために、社会主義社会が与えている広大な可能性を示すことを展示の目的としました。

われわれはこんどの科学万博の展示構想を練りあげる際に、何よりもまず宇宙の平和的な開発、エネルギー工学が達成した成果、大がかりな住宅建設、これからの世代の教育と訓育、自然環境の保護、文化と芸術など、ソ連が主要な地位を占めている人間活動の分野を科学万博の入場者に示したいと考えました。



ソ連館を訪れて係員の説明を聞くP・アブラシモフ駐日ソ連大使（3月24日）

ソ連館のモットーは「地球と宇宙に平和を！」ですが、私はこのモットーが今回の科学万博のテーマによくマッチしていると思います。

ソ連館の仕事を維持するために一三〇人以上が筑波にやってきました。このうち27人は日本語通訳、40人は館内の展示の説明にたずさわる各分野の専門家です。これらの専門家の教育程度と知識がきわめて水準の高いものであることを、ここで強調したいと思います。ひとつ例を挙げましょう。医学のコーナーを訪れる入場者はソビエトの心臓医学の最新の成果について高度の説明を受けますが、この説明にあたっているのは、心臓医学・先天性心臓・血管系疾患外科診療所長のエレーナ・リタソワ医学博士です。リタソワ女史はノボシビルスク（西シベリア）血液循環病理研究所の指導的小児外科医として、二〇〇〇例以上の心臓手術を執刀した経験があります。ソ連館のほかのセクションにもリタソワ女史に劣らぬ、高い資格をもった専門家や学者が説明にあたっていて、その多くは科学万博のワク内で催される各種のシンポジウムや討論会にも出席することになっています。

ソ連館には6カ所にテレビスクリーンが設けられており、「ソ連の原子力発電」「北極圏の産業開発」「開通したバム幹線鉄道」「カムチャッカの地熱利用」「ソ連の就学前児童教育」「宇宙開発」「モスクワにおけるソ日円卓会議」そのほか多くの映画が上映されます。

ソ連館にはこれ以外にも、特設の映画・コンサートホールが設けられていて、記録映画、ポピュラー・サイエンス映画、観光映画、アニメ映画、CM映画などかなり内容の高い作品ばかり70本が上映され、また万博が始まってから最初の2カ月間はモスクワの一流デザイナーによる春・夏・秋のモードのファッションショーが連日この特別ホールで行われます。このファッションショーに出演するために、モスクワの全ソ・モード会館からモデル一行がはるばる来日しました。

やはりこの特別ホールできわめて多彩なプログラムのコンサートが行われます。4月16日から26日まではドルージバ（友好）歌舞アンサンブル（会場は特別ホールとエキスポプラザ大ステージ）、5月1日から14日まではオムスクのメテリッツァ（吹雪）民族舞踊アンサンブルが出演することになっています。メテリッツァ・アンサンブルは科学万博'85の国際芸術祭に参加出演します。

6月27日にはソビエトの有名なバス歌手、ボリショイ劇場のソリストであるエブゲニー・ネステレンコ（人民芸術家）が公演しますし、その1カ月後にはモスクワ・バレエ学校の生徒たちがエキスポプラザの大ステージとソ連館の特別ホールで公演します。9月4日から10日まではモスクワのボリショイ・サーカスが出演します。これは今回の科学万博の全会期を通じて一番おもしろい催しものになるでしょう。そのほかにも、ウズベク共和国の芸能人一行、クバン・コサック・アンサンブル、ペルミ輪舞団、ニューミュージック・グループ「惑星のリズム」がソ連館特別ホールに出演することが計画されています。



№ 208
Пятница
27 октября 1917 г.

ЦѢНА:

ИЗВѢСТІЯ

Центральнаго Исполнительнаго Комитета
и Петроградскаго Совѣта
Рабочихъ и Солдатскихъ Депутатовъ.

Декретъ о мирѣ,
принятый единогласно на засѣданіи Всероссійскаго Съѣзда Совѣтовъ Рабочихъ, Солдатскихъ и Крестьянскихъ Депутатовъ
26 октября 1917 г.

当時の新聞に発表された「平和に関する布告」（1917年11月8日採択）の写真コピー

第1セクション「平和は地上の生活の基盤」

ソ連科学アカデミー東洋学研究所主任研究員
Y・M・チェレフコ

ソ連館の中央には、一九一七年11月にロシアで社会主義革命が起きた翌日

に採択され、レーニンが著名した「平和に関する布告」の写真版コピーを展示したコーナーがあります。これは、戦争が人類に対する最大の犯罪であることを革命ロシア政府が宣言した歴史的文書です。

平和に関する布告が公布されてからまるまる一時代が過ぎましたが、その歳月も、レーニンの最初の布告の誠実さと、ソビエト国家の対外政策の首尾一貫さを裏づけただけでした。国連ができてからこの国際機構のワク内で、平和の強化と世界戦争の防止を目的とした二三〇件の提案が審議されましたが、そのうち一三〇件（すなわち半分以上）がソ連の提案でした。

平和に関する布告の文書と並んで、ソ連の最近の平和提案の一覧表が展示されています。たとえば、ソ連は核兵器を最初に使用しない義務を一方的に負いました。ソ連以外の核大国がソ連の例に倣えば、これは熱核戦争の防止に大きく貢献するでしょう。

日本を含む極東諸国を対象としてソ連が行った一連の平和提案にこの際言及しておくのが適切でしょう。一例を挙げると、ソ連は極東での信頼措置体系を審議する用意があり、その中には海域に関する信頼措置も含まれています。ソ連は日本と善隣協力条約を調印する用意があり、その案文を日本政府に渡してその検討を求めています。さらにソ連は、その領土内に核兵器をもたないすべての国（日本を含む）に対して核攻撃を行なわないとの保証を与える用意のあることを表明しました。ソ連の指導部は極東地域の平和強化を目的とする建設的な提案を日本政府が行えば、どんな提案でも検討する用意があります。

こうして、隣国の日本国民との平和と友好をソ連が強く望んでいる気持ちは、ソ日両国の交流の事実の中に反映されています。ソ連館では、ソ日両国の政治家、政党活動家、外交官、実業人、学者、文化人、芸術家、スポーツマンが交流を行ってきた歴史を多くのスライドを上映して紹介していますが、本年3月モスクワでゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長と日本の中曽根首相が会見したときの写真はとくに入場者の注意を引くでしょう。

ここまで説明したところでお分かりのように、第1セクションの展示内容はいわば一種独特の音叉のようなもので、ソ連館だけでなく、科学万博全体に、「地球と宇宙に平和を！」という共鳴音を響かせているのです。

第2セクション「住まい、家庭、社会」

工学博士候補・建設技師
T・A・ウサチョフ

入場者の皆さんにまず都市建設の展示コーナーを紹介しましょう。都市建設問題は各種設計図や模型を使って分かりやすく、面白く説明されており、長年建設事業に関わって来た私という人間にとって一番身近な問題だからです。

はてしなきソ連の大地。北方のツンドラ（凍土）から中央アジアの砂漠に至るまでの多様な自然と気候的条件。それだからこそ、新しい都市を建設し、巨大な工業中心地や農工コンプレクス企業を各地に設置するとなるといろいろの問題が起こります。ソ連人口分布マスタープランはこれらの問題を合理的に解決するのに役立っています。これは本当にユニークな資料で、世界の都市建設の実践にも類似の物は見られません。この基本的特徴は展示されているソ連人口分布マスタープラン図によって評価できましょう。

ソ連の社会・経済発展計画の強みは工業・農業企業、科学センター、通信・交通の配置を科学的根拠に立って実現できることです。新興都市の成長を予測し、既存の居住地の発展に影響を与えることもできます。

ソ連欧州部、ウラルやカフカズには膨大な経済力が蓄積されているので、この地域の人口分布の特徴は大都市型の人口集中です。こういう場合には労働・生活・休養を組織する問題は総合的に解決されます。

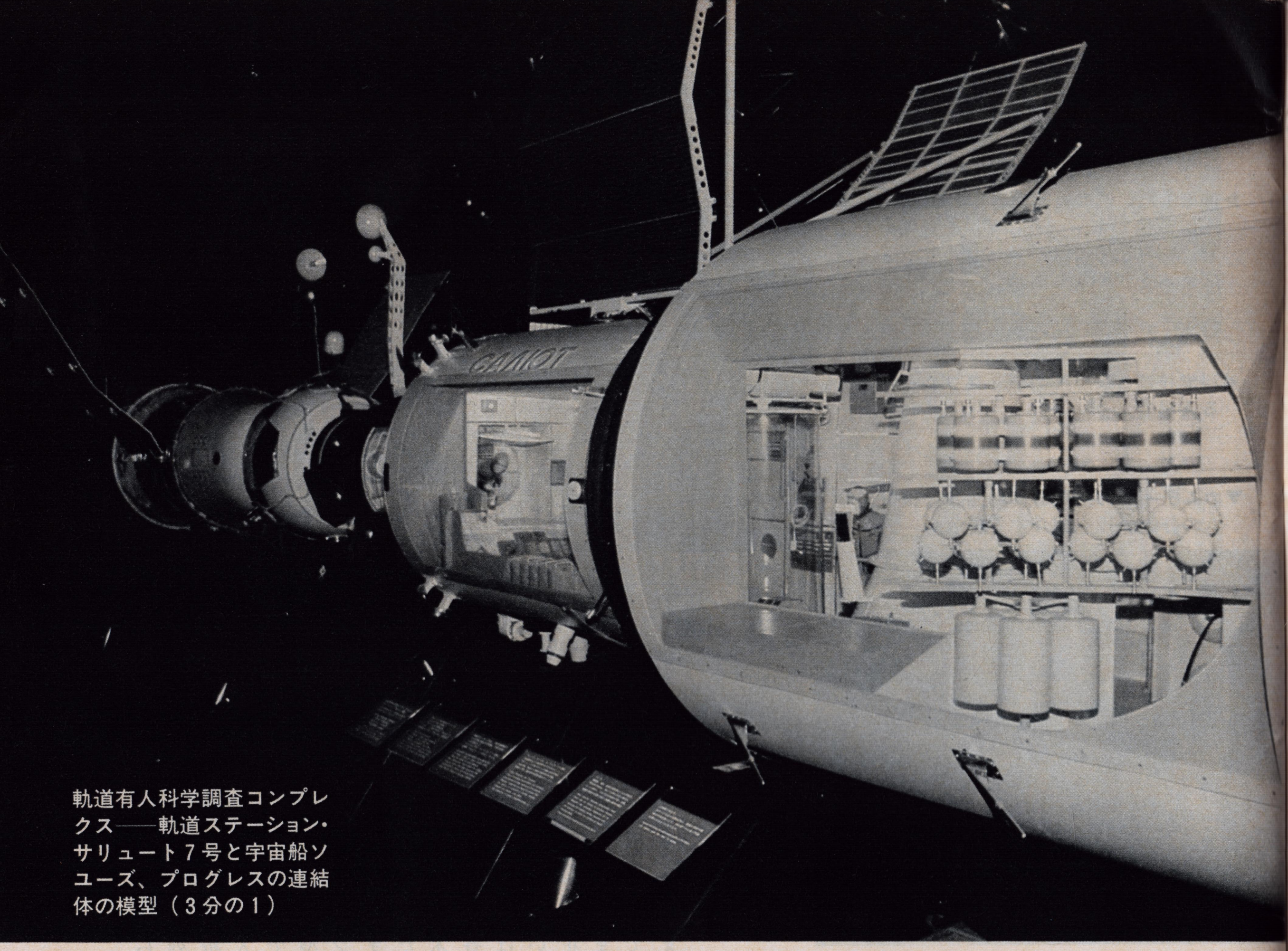
シベリアや極東など地下資源（石炭、各種金属鉱石、ガス、石油）が集中し、豊かな包蔵水力がある地域では事情は別です。これらの資源の開発・利用は人口一〇万までの、いわゆる拠点都市、基地都市の創設だけでなく、新しい移住地体系の形成――将来新興都市になっていく仮のまちの形成にも結びついています。これらの仮のまちでは交替作業集団が働き、生活しています。この人たちのこのまちでの生活は一時的なものですが、生活水準は設備の調った大都市の生活とたいして変わりません。このような移住地体系は東部地域の急速な発展に役立っています。

中央アジアとカザフスタンの人口分布に関しては農村地帯における〝人口爆発〟に関連した問題があります。

人口分布マスタープランは中小都市の産業の加速度的発展を予測していま



農村住宅の模型（50分の1）



軌道有人科学調査コンプレクス――軌道ステーション・サリュート7号と宇宙船ソユーズ、プログレスの連結体の模型（3分の1）

す。中小都市は、農村部の労働力の余力の一部を引きつけ、その地域の農工コンプレクスの構成部分になることができます。

ソ連では人口分布マスタープランを考慮して当面および将来の国民経済発展計画が作成されていますし、計画諸機関はこれに基づいて（特に土木・住宅建設資金の配分では）行動しています。

ソビエト国家がその解決に取り組んでいる最重要の長期的な社会的課題の一つは一世帯一フラット（住宅）の実現です。そのために大規模な工業的基盤――都市および農村の住宅建設コンビナートが五〇〇以上つくられました。最近10年間だけでも約一億一一〇〇万のソ連人、つまり全人口の約40％が住宅条件を改善しました。

住宅建設資金の主な供給者は国家です。住宅建設への投資総額の65％は国家がこの目的のために支出したものです。ここには企業や科学・生産合同、コルホーズ、ソフホーズが補足的に住宅建設のために使った数億ルーブルのお金は入っていません。しかし、建設資金の供給者が誰であろうと、すべてのフラットは都市および農村の勤労者に家賃以外は無料で提供されます。提供されるフラットの大小（面積）は、家族の人数だけで決められます。家賃はソ連では五〇年以上も値上げされておらず、家族の平均収入の3―5％内に抑えられています。言うまでもなく、現行の家賃では住宅の維持補修費をカバーするのは無理なので、国はソ連の人々の生活水準の低下を招かないよう、国民所得の4・5％を住宅の維持補修費として支出しています。

組合員（将来の住人）の資金を導入して家を建てる住宅協同組合方式も発展しています。

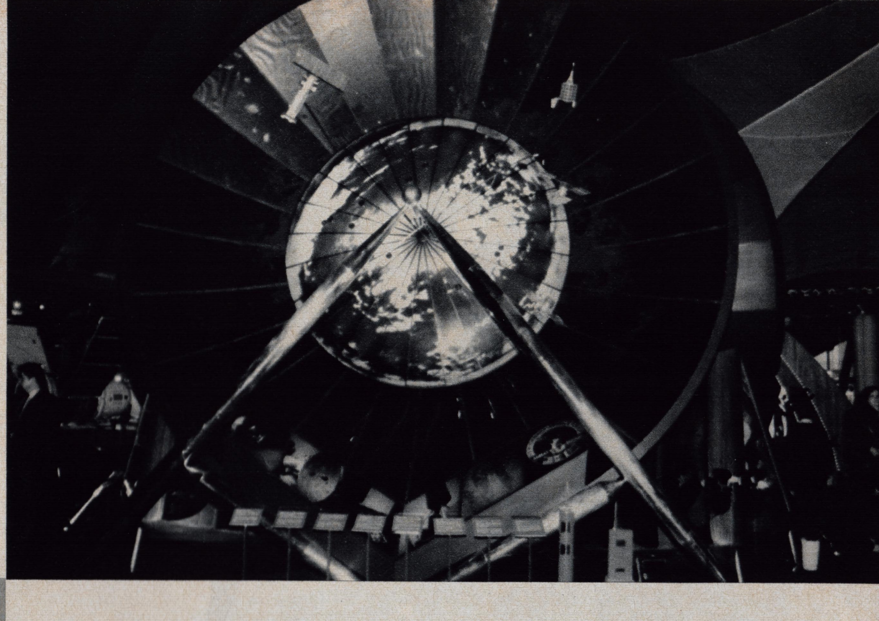
ソ連では多くの学術研究所と設計研究所が住宅需要の研究、都市向け・農村向け住宅の設計に取り組んでいます。これらの作業では種々の地区の気候、地質・土壌、歴史的民族的特徴が厳密に考慮されています。

現在、第2次世界大戦後第4世代の住宅建設プロジェクトが作成中です。このプロジェクトによるフラットはますます快適なものとなり（ソ連館にその模型住宅が展示されている）、建物自体も一つ一つタイプ別設計になっているので建築学的多様性と表現の豊かさが特徴になっています。

ソビエト国家は農村の総合的改造に大きな注意を向けています。改造の基本課題は農村の勤労者に、都市住民と同じような、好ましい労働、生活、レジャーの条件、ショッピング、医療、生活サービスの条件を整備することです。

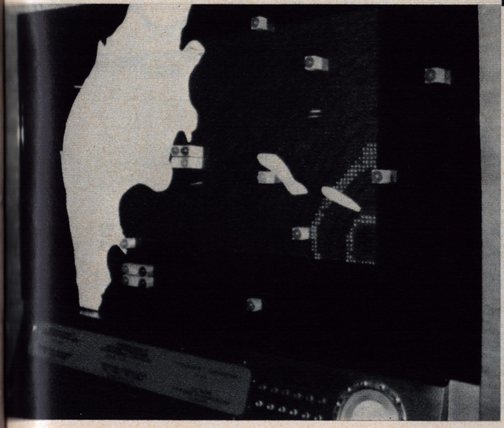
工業生産できる数十タイプの農家の標準設計プランが作成されています。これらの農家は一軒ごとに菜園や、敷地内に家きん・家畜小屋、マイカーやモーターバイク用の車庫を建てるためのスペースがあります。

隣の陳列台には農村の公共センター



▶遭難した船舶や航空機からのSOS信号を通信衛星でキャッチして、遭難場所を正確に割り出すコスパス＝サルサット・システムを説明する展示。

◀科学技術コーナーのディスプレーに見入る入場者



▼カムチャツカ半島の自動津波警報システムの作動原理を紹介する展示

と幼稚園の模型が展示されています。

組み立てがきき、手軽に形が変えられる移動のできる共同住宅施設が陳列されています。総重量は二八〇kg。折り畳まれた状態で輸送されます。22人収容のこの種のハウスは6—8時間で組み立てられます。このハウスの原型はソ連の浮漂氷上科学ステーション〝北極25〟で一九八一年から八四年まで使用され、よい成果をおさめました。

この変形可能な移動住宅は北方の木材伐採者や石油採掘労働者、地質調査員、道路・橋りょう建設者、あるいはまた高山の牧場、農村の遊牧地において利用されるでしょう。ある程度修正を加えれば旅行やレジャーにも使えます。つまり、長期居住用の住宅を建てる必要がない場所ならどこにでも使えるということです。

第3セクション
「地球は全人類の家」
（人間のための科学技術）

ソ連科学アカデミー
幹部会副部長
Y・I・コチェトコフ

ソ連科学アカデミーが科学万博に出展したものの中で一番興味深い展示物は、軌道ステーション「サリュート7号」と宇宙船「ソユーズ」、「プログレス」から成るソ連の有人軌道科学調査コンプレクスの模型です。模型の大きさは実物の$\frac{1}{3}$です。

7番目の「サリュート」が地球の人工衛星の軌道に打ち上げられたのは一九八一年ですが、この7番目が打ち上げられてから現在までに何人もの宇宙飛行士がかわるがわる「サリュート」に乗り組みました。たとえばN・キジム、V・ソロビヨフ、O・アチコフのクルーは、二三七日という宇宙滞在の新記録を樹立しました。サリュート7号はそれまでの「サリュート」に比べて、備え付けの科学機器が多く、居心地もよくなっており、いわば三五〇kmの高度に打ち上げられた宇宙の家です。

ソ連の学者は地上ではできない仕事、たとえば超純粋物質づくりや生物学、医学の実験、天文観測、医療用品工業や電子工業のための溶接作業、将来の大軌道ステーションや軌道工場などをつくるための宇宙作業技術の開発——をやるための常設科学実験室を軌道上につくろうと努めています。

ソ連館には「ソ連の惑星間ステーションによる宇宙の惑星探査」の模型がありますが、この模型も宇宙空間の研究のテーマとつながりがあります。

金星の探査研究は地球をはじめ太陽系の諸惑星の形成過程を知るカギを提供してくれます。金星探査のソ連の自動ステーションは一九六一年から打ち上げられています。ソ連館に展示されている自動ステーション「金星14号」（模型）は、一九八二年に金星に着陸して、着陸場所の金星表面のカラー写真を撮りましたし、金星の大気の組成に関する新しいデータを地球に送ってきました。金星の衛星軌道に打ち上げられた自動惑星間ステーションは、雲層に隠れて地球からは見えない金星表面をレーダー観測しました。こうして金星の地図をつくり、金星の地質史や金星全体の形成過程を今までよりもよく知ることができるようになりました。

「ハレー彗星探査」の模型はソ連館の呼び物の一つになっています。ハレー彗星は75年に1度太陽に接近します。この彗星の探査研究によって太陽系の形成段階の解明が一段と進むでしょう。

ハレー彗星探査のために、ソ連、西欧、日本の三様の計画がつくられました。三つのうち最大のものはソ連の「ベガ」計画です。昨年12月にソ連の二つの自動惑星ステーションが金星に向けてスタートしました。ことしの6



月には金星に到着する予定です。ステーションは金星探査用の降下装置を切り離したあと、金星の引力圏で重力により向きを変えて一路ハレー彗星に向かいます。彗星に出会うのは一九八六年の3月6日と3月12日の予定です。ソ連のステーションは彗星の核からわずか一万kmのところを通過して、核の写真を撮り、核の物理的、化学的組成を調査します。

ソ連は宇宙の平和的研究調査を支持し、宇宙空間の軍事化に反対しています。それがソ連のねばりづよい一貫した態度なのです。

一九八二年以来ソ連ではコスパス（COSPAS）システムが使われています。通信衛星は、特別のブイから送られてくるSOSの信号をとらえるほか、国際標準周波数によるSOSや情報をキャッチします。衛星が受信した情報によってわずか1、2kmの誤差で遭難場所をわり出すことができます。ソ連館のモデルを見れば、このプロジェクトに関する詳しい情報が分かるでしょう。

同じような宇宙システム・サルサット（SARSAT）が米仏両国の共同の努力で開発されました。コスパスとサルサットは互いに補完し合い、情報を交換し合っています。この共同プログラムのわく内でいま3個のソ連の衛星と1個の米国の衛星が作動しており、一九八二年以来コスパス＝サルサットのおかげで助かった人は、約三五〇人にのぼってます。

津波警報システムの開発も、人命救助活動の重要な一環です。ソ連で津波の研究調査が始まったのは一九五〇年代のことです。ソ連極東沿岸の津波の危険の大きな地域は、平均して3年に1回大津波に襲われています。比較的小さい津波なら年に数回もあります。

ソ連の学者は津波の国際共同調査に積極的に参加しており、米国や日本の学者と協力して成果をあげています。この数年来ソ連の学術調査船「ワレンチン・ウルィバエフ号」は、津波研究の共同の調査団を乗せ、2回北海道からグアム島までの水域の津波を調査しました。

ソ連の学者は調査を基にカムチャツカ沿岸地区の津波警報システムをつくりました。このシステムは昨年から活動しています。ソ連館の電子模型は、津波接近40分前に警報を出すシステムの作動原理を説明しています。ごく近い将来クリール諸島地区にも同じような警報システムが設置される予定です。

ソ連の非常にきれいな淡水の80%、世界の淡水資源の20%が集中しているユニークなバイカル湖の模型に、入場者が注目するよう期待しています。「シベリアの真珠」といわれるバイカル湖の動植物二五〇〇種のうち$\frac{2}{3}$は、この土地にしかないものです。模型と科学普及映画は、ソ連政府の積極的なバイカル湖保護措置を物語ってくれます。

（70ページへ続く）

大祖国戦争 40

勝利40周年特集⑦

ベルリン作戦

ソ連邦元帥 ゲオルギー・ジューコフ



国会議事堂を占領！
（1945年５月。ベルリン）

ゲオルギー・ジューコフ（一八九六—一九七四）は卓越した軍司令官である。モスクワ、スターリングラード（現在のボルゴグラード）付近におけるドイツ・ファシスト軍の粉砕、クールスク付近とベロルシアにおける勝利、ベルリン作戦の成功などのソビエト軍の決定的勝利は、すべてジューコフ元帥の名と結びついている。ソビエト軍最高総司令部を代表しその委託を受けて、ファシスト・ドイツの無条件降伏を受理したのもゲオルギー・ジューコフであった。

以下に紹介するのはジューコフ元帥の『回想と思索』（日本語訳の書名『ジューコフ元帥回想録 革命・大戦・平和』）からの抄訳である。

４月１日の夕、最高総司令部でスターリンは、私の見ている前でベルリン占領作戦の準備と遂行に関する第１ベロルシア方面軍に対する指令と、12—15日間でエルベ川に到達するようにという指示に署名した。

戦時中私は多くの重要な大進攻作戦に直接参画することになったが、目前に迫ったベルリン攻略戦はこれに比べる作戦がないほど特別なものであった。わが方面軍の部隊は、オーデル川そのものから始まり強固に防衛されたベルリンで終わる、強力な防御線の、アリのはい込むスキマもない梯形陣地帯を突破しなければならなかった。ベルリンへの進路ではドイツ軍の最大の集団を粉砕し、敵が死守するファシスト・ドイツの首都を占領しなければならなかった。

戦争中、われわれはベルリンのような大都市で、しかも強固な防御施設をもった都市を占領したことは、大体なかった。ベルリンの総面積はほぼ九〇〇平方kmもあり、地下の施設がよく発達していたので、敵の部隊は広範囲にわたる機動戦を行うことができた。

わが軍の偵察機は６回にわたってベルリン、ベルリンへのすべての進撃路、防衛地帯の写真をとった。これらの航空写真や押収文書、捕虜の尋問などか

ら、精密な図形、見取り図、地図が作成され、中隊を含む全部隊と各級指揮官と参謀に残らず配布された。

技術部隊がベルリンとその周辺の正確な模型をつくり、それは攻撃の編成や、ベルリン総攻撃と市中心部での戦闘に関する諸問題の研究に利用された。

4月5日から7日までの間、ベルリンの地図と模型を使ってきわめて積極的かつ創造的に打ち合わせや指揮系統を中心とする図上演習が行われた。8日から14日には、軍、兵団、師団、全兵科の各部隊でさらに綿密な図上演習と訓練が行われた。

作戦の準備に当たっては、われわれはみな敵の意表を衝いて圧倒するためにさらにどんな手を打ったらよいかを考えた。そこから、サーチライトを使う夜襲という着想が生まれた。夜明けまでの2時間の間にわが方から強力な打撃を加えることが決定された。一四〇個のサーチライトで抜き打ち的に敵の陣地と攻撃目標を照らし出すことになった。

作戦準備の際に、攻撃参加者にサーチライトの効果が示され、全員がそろってその使用に賛成した。

この間敵はどうなっていたか。ドイツ軍最高司令部はベルリン攻防戦が東部戦線の天目山になることを織り込みずみであった。ヒトラーは4月14日付けの呼びかけのなかで、ドイツ軍の諸部隊を激励して次のように訴えた。

「われわれはこの攻撃を予期し、強力な戦線を対峙させ、絶大な砲火で敵を迎えている。わが軍の歩兵の損失は、数えきれないほどの兵力の新しい軍団、混成部隊、国民突撃隊部隊によって補充されて、戦線を強化している。ベルリンはドイツの手に残るであろう……」

「来るべきロシア軍の決定的攻撃が始まるまでに、東部戦線部隊の必要な補



▶夜の闇を裂く「カチューシャ」の砲撃



砲煙の中を国会議事堂に突入するソビエト兵



国会議事堂の入口に立つジューコフ元帥

充をしておくため、われわれは全予備軍を解体し、兵員を部隊の補充に投入しなければならなかった」と、ドイツ軍最高司令部の作戦本部長だったヨーデル大将は軍事法廷の尋問に答えている。

ドイツ軍司令部は綿密なベルリン方面防衛計画を作成した。

間断なく続く一連の防御線から成る透き間のない防御施設網がつくられた。中心となる防衛地帯は延々と続く5本ほどの塹壕線をもっていた。敵は湖沼、河川、運河、谷などの自然の防御物を利用した。集落はすべて環状防御陣地に使われていた。

ベルリンへの直接の進路には三重の防衛線がつくられていた。各通り、広場、各小路、家屋、運河、橋はベルリン市防衛線全体の構成要素となっていた。市街戦に備えて編成された国民兵の二〇〇の大隊が特殊訓練を受けていた。

六〇〇門以上の大、中口径高射砲がベルリンの対戦車、対歩兵防衛戦に備えて配置された。そのほか、戦車も、修理中であっても使用できる砲があれば、火砲として利用された。これらの戦車は交差点や鉄橋のそばに埋め込まれた。

ベルリン防衛作業には四〇万人以上が動員された。選り抜きの警察官と親衛隊(エスエス)部隊がベルリン市内に集められた。

攻撃の準備段階でわれわれは、ドイツ軍がベルリンに対するわれわれの攻撃を予期していることは、完全に分かっていた。そこで、方面軍司令部は、どうすれば敵に急襲攻撃が加えられるかを綿密に検討した。

われわれは、航空兵力、戦車、砲兵、予備資材を大量に投入して敵の防衛部隊に襲いかかり、一挙に敵の胆をつぶし、とことん震えあがらせることに決めた。けれども、短時日のうちに戦闘地区にこれだけ多くの兵器器材をひそかに集結するためには、超人的な作業が要求された。

ポーランドを通って砲兵部隊、迫撃砲部隊、戦車部隊を乗せた多くの軍用列車がやってきた。一見それはまったく軍用列車とは見えず、木材や干し草が輸送されているかのようだった。ところが、荷おろし駅に着くと、たちまち偽装は取り払われて、貨車からは戦車、火砲、牽引車が降ろされ、すぐさま掩蔽場所に運ばれた。空になった列車は東へ回送され、それに代わって、兵器器材をのせた新しい軍用列車が次々に到着した。

われわれには、各部隊が弾薬、燃料、食糧の不足を感じるようなことはないだろうという確信があった。

総体的に言って、ベルリン作戦準備のために行われた作業は、その範囲と緊迫さにおいて空前のものであった。前線の比較的狭い陣地に、短期間に狙撃師団68、戦車、自走砲三一五五両、火砲、迫撃砲約四〇〇〇〇門が集められた。これだけの兵器器材、兵力があればわが軍はごく短期間に敵を粉砕できる、とわれわれは確信した。

これら大量の兵器器材、兵員、物資はすべてオーデル川を越えて運ばれてきた。部隊の移送のほかに、これから先の食糧を確保するためにも、沢山の橋や渡河場をつくらねばならなかった。

主攻撃地区では、火砲の配置密度は突破正面1km当たり76mm口径以上の砲二七〇門に達していた。

……4月16日、準備砲撃開始の3分前に、われわれ全員は壕舎から出て、監視所の自分の位置についた。

ここからは、昼間はオーデル川沿岸の全域を見渡せた。いま、ここには朝もやが立ちこめていた。私は時計を見た。ちょうど午前5時だった。

その瞬間、数千の火砲とロケット迫撃砲が火を噴き、全域を明々と照らし出し、それに続いて、射撃音や砲弾、地雷、爆弾の炸裂音がとどろきわたった。爆撃機の絶えまないうなりが空一杯に満ちた。

30分にわたった猛砲撃の後、敵が一発も反撃してこなかったので、これは敵が完全に圧倒され、防衛態勢が崩れた証拠であるとして、総攻撃の開始が決定された。数千発の色とりどりの信号弾の光が空に舞い上がった。それを合図に、二〇〇mごとに配置されたサーチライトが一斉に光を放った。一〇〇〇億ワット以上の光が戦場を照らしだし、敵を眩惑させ、わが軍の戦車や歩兵のために攻撃目標を暗闇から浮き出させた。この情景はきわめて印象的で、私は一生を通じてこんな感じを受けたことがないほどだった……

大砲はいよいよ激しく火を噴き、歩兵と戦車は前へ前へと突進した。明け方までにはわが軍は第一防衛線陣地を制し、ついで第二防衛線の攻撃に移った。

敵はベルリン地区に多数の飛行機を保有していたが、夜間はその空軍を効果的に使用できず、朝になるとわが軍の攻撃部隊がすでに敵軍のすぐ近くにまで達していたため、敵空軍は味方を攻撃する危険をおかさずにわが軍の先頭部隊を爆撃できない有様であった。

ドイツ軍は文字どおり一面の火と金属の海の中に沈んだ。見通しのつかぬほどのほこりと煙の壁が空にかかり、ところによってはサーチライトの強い光さえ通さなかった。

夜になると、数百機のわが爆撃機が、大砲の届かない遠くの目標をたたいた。その他の爆撃機は昼夜の別なく地上部隊と協同して敵を攻撃した。最初の1昼夜におけるわが爆撃機の出撃回数は延べ六五五〇機を上回った。

4月20日、作戦開始5日目、ファシスト・ドイツの首都に対する歴史的な攻撃が開始された。それからさらに5日目の4月25日、わが第1ベロルシア方面軍の先頭部隊は、南からベルリンを迂回してきた第1ウクライナ方面軍部隊と合流した。総数四〇万を越える敵のベルリン集団は二つの孤立した集団に分断された。

戦闘がベルリンの中央部に移って行くにつれて、敵の反撃はきわめて激烈となった。最初から市街に配置されていた敵の部隊は、市街戦の有利な拠点を残らず利用した。高層ビル、大きく頑丈な壁、とくに防空壕、地下鉄で連絡できるトーチカなどが重要な役割を果たした。ドイツ軍は一つの区画から他の区画へと移動し、時にはわが軍の背後に出没することさえあった。

われわれの攻撃は昼も夜も絶え間なく続いた。敵が新しい拠点によって新しい防衛線を構築する余裕をもたないように、あらゆる努力が払われた。大小の地区に分けてあらかじめ出来上がっていたベルリンの防衛陣を打ち破るために、綿密に練られた攻撃計画が必要であった。

ベルリン攻撃に参加した各軍はあらかじめ持ち場が決められていた。大小の各部隊は具体的にどの通り、どの広場、どの目標を攻める、というようになっていた。市街戦の混乱した状況を見越して、綿密に考えぬかれた、一糸乱れぬ攻撃配置がとられていた。敵をこっぱみじんにする砲火の下でベルリン市内の重要目標が次々とわが軍に占領された。

ベルリン中心部の戦闘を主として受け持ったのは、全兵科から成った突撃部隊であった。

ベルリン市の市街戦の中心課題の狙いは、敵の部隊が一カ所に集合するチャンスを与えずに、速やかに各個撃滅することにあった。

この課題を解決するためには、今回の作戦開始までにいくつかの根回しをしておく必要があった。そのためにまず第一にベルリンに近づこうとする敵の大量の兵員と兵器を粉砕した。第二には、速やかにベルリン包囲を完了して、敵の予備兵力利用を封じた。第三に、ベルリン方面に集結した予備軍そのものをもたちまち粉砕した。

そこではじめてわが軍は、おびただしい障害があったにもかかわらず、市街戦を最小限で終わらせることができたし、市内の敵の防衛施設の撃滅もわりあい楽にやってのけることができた。

4月21日から5月5日までに、ベルリン市内に撃ちこまれた砲弾はほぼ一八〇万発に達し、市内の敵防衛施設の上には三万六〇〇〇tの鉄の雨が降ったのである。

カイテル陸軍元帥はのちに取り調べを受けた際次のようにのべている。

「4月22日には、西部戦線から全部隊をもってきてロシア軍の進撃を食い止めない限り、ベルリンが陥落してしまうことが分かってきた。ヒトラー、ゲッペルスが私とヨーデルといっしょに打ち合わせた結果、第12軍に対して米軍の正面には弱い後続部隊を残し、主力をベルリンを包囲しているロシア軍の攻撃に向かわせるよう、命令を出すことに決まった」

だが、どんな手を打ってもヒトラーはもう助からなかった。一九四五年4月30日14時25分、第3突撃軍の部隊によって国会議事堂の建物の主要部分が占領された。

午後3時頃、第3突撃軍のV・クズネツォフ司令官は指揮所にいた私に電話をかけてきて、うれしそうな声で知らせた。

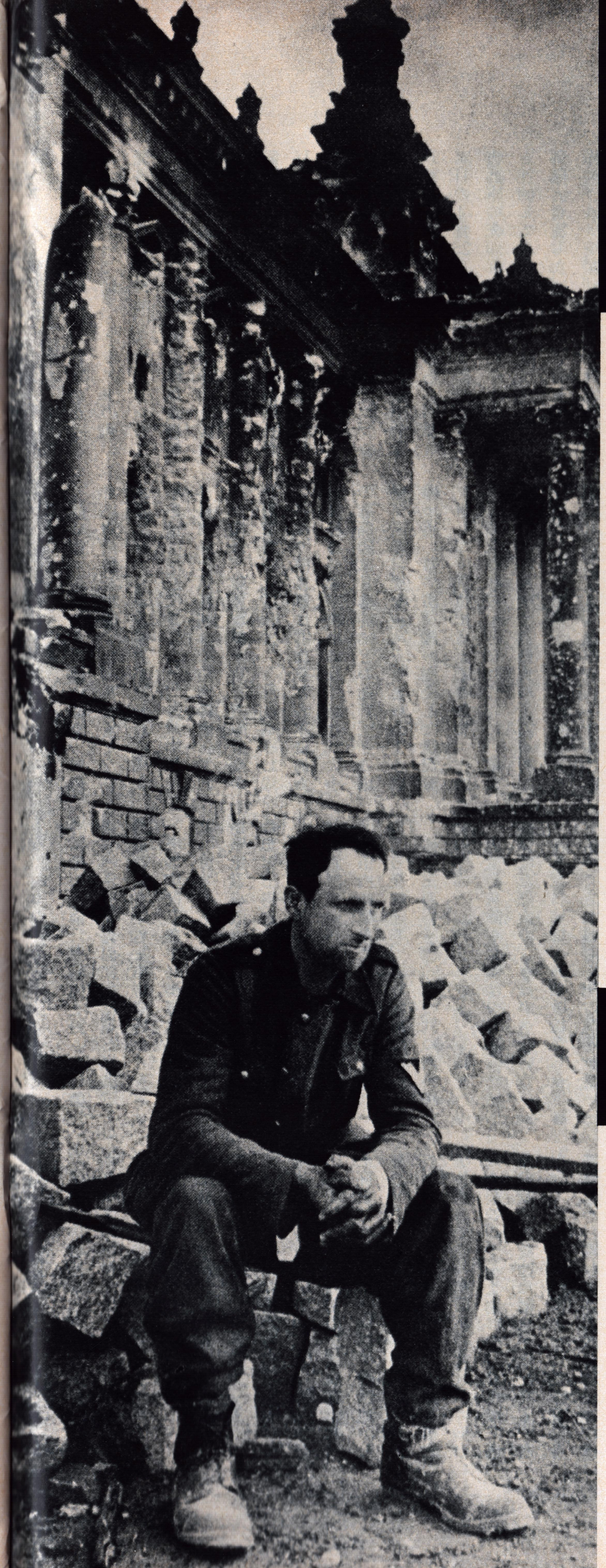
「国会議事堂に赤旗が上がりました。万歳(ウラー)、同志元帥！」

ベルリン占領の戦闘は文字通り生きるか死ぬかの戦いであった。祖国の自由を侵した者たちとの正義の戦いに終止符を打つために、ロシアの奥地から、シベリアとモスクワから、ウクライナ、ベロルシアから、そのほかソ連を構成するすべての共和国から、ソビエトの人々がここベルリンにやってきた。過去の戦闘で受けた傷口がまだ癒えず塞(ふさ)がっていない者が多かったが、負傷者は戦列から離れようとはしなかった。すべての者がただひたすらに前へ前へと進んだ。4年にわたった苦しい戦いがまるでウソのようだった。ベルリンに旗を掲げるという偉業を完遂するために、すべての者が生気にあふれた。

あの喜ばしい瞬間、どれだけの思いが脳裏を走り過ぎたことだろう！　わが軍が死闘して敵を首都に入れなかったあの苦しかったモスクワ防衛戦、廃虚のなかで戦って遂に屈しなかったスターリングラード、九〇〇日間の苦しい封鎖に耐え抜いた栄光のレニングラード、英雄的に戦ったセバストーポ



第三帝国の象徴落つ（1945年5月。ベルリン）



◀戦争は終わった。放心のドイツ兵（ベルリン）

リ、クールスク地域における輝かしい勝利、破壊された数千の村と町、この苛酷な4年間を雄々しく生き抜いてきたソビエト国民の、数百万数千万にのぼる犠牲……

そして、遂に、わが国民が偉大な苦難に耐えてきた究極の目的、ファシスト・ドイツの完全な壊滅と、われわれの正義の事業の勝利がやってきたのである。

ソ連の視点

危険な暴走を阻止するために

ノーボスチ通信政治評論員　V・コルツノフ

今や世界中が大量殺りく手段に満ちあふれ、対立する双方がすでに互いに相手を何回もほろぼす可能性を獲得しているにもかかわらず、軍拡競争はますます速いテンポで続行されている。これこそ現代の真に悲劇的なパラドクスだ。核破局につながらざるを得ないこうした不気味な事態の進展を阻止し、軍縮への効果的な道を見いだすことができるだろうか？　できるとすれば、どうやってか？　ジュネーブで始まったばかりの核軍備・宇宙軍備に関するソ米交渉では、ほかならぬこの問題がいま日程にのぼっている。

ごく常識的にみて、軍拡競争を逆戻りさせるには、手始めにせめて停止する必要があることは言うまでもあるまい。ソ連はそれを求めている。3月11日にゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長はこう述べた。「われわれは軍拡競争の継続ではなく停止を望んでいる。だから核兵器庫を凍結し、ミサイルの展開を停止することを提案している。われわれは宇宙であれ地上であれ、次から次へと新たな体系の兵器を開発することではなく、蓄積された軍備の実際の大幅削減を望んでいる」

われわれの見解では、核凍結は比較的実施しやすい。というのは、その場合、対立する双方が今すでにもっている兵力を量的にも質的にも全く再編成する必要がないからだ。しかも核凍結は、戦略的安定の最重要ファクターとなり、核軍備の削減、ひいては完全廃絶までにいたる現実的な道を開く可能性がある。

凍結構想は、世界世論の側からますます大きな支持を得ている。これに関する国連でのソ連提案は、一九八四年に一〇〇以上の国の賛成を得た。アルゼンチン、ギリシャ、インド、メキシコ、タンザニア、スウェーデンの政府は、先ごろ共同宣言の中で核兵器の一層の増強の停止を呼びかけた。この構想は、米国内でも多数の支持者をもっている。つい最近P・サイモン、M・ハットフィールド両議員が、ジュネーブ交渉開催中、新型戦略兵器システムの実験と展開のモラトリアムを実施するよう呼びかける決議案を上院に提出した。

しかしあらゆる点から見て明らかなとおり、現米政権はそうした道に進むつもりはない。レーガン大統領の発表した〝戦略戦力近代化計画〟は、すべての方面で実施されている。長年先まで見込んだこの計画は、新大陸間弾道ミサイルMXとミゼットマン、原子力潜水艦とトライデント・ミサイル・システム、新型戦略爆撃機B—1Bとステルス、空中、海上、地上配備の長距離巡航ミサイルの開発と展開を予定している。今やペンタゴンは、宇宙軍事化にも着手している。

いわゆる戦略防衛イニシアチブ（つまり〝スターウォーズ〟計画）は、公式には核兵器を〝不必要〟なものにする最も確実な手段として世論に伝えられているが、ワシントンは核凍結などきく耳すらもっていない。

約束を守っているかどうか検証することはできないから、核凍結は不可能だ、と言う向きがある。しかし、そうした理論に従えば、軍拡競争抑制についてどんな合意も、相応の査察措置を前提条件としているのだから、全く不可能ということになってしまう。だが、この分野ではすでにかつて達成された合意の順守経験があり、そのことは、十分効果的な査察の可能性があることを物語っている。軍事機器の一層の発展に伴い、それらの可能性がどうしても小さくなり、最終的には全くなくなってしまうかもしれないが、それはまた別問題だ。

また、核凍結が実現すれば、ソ連側の合意達成意欲が低下するだろうから、軍縮交渉への刺激が弱まる、というふうにも言われている。言い替えるなら、軍拡競争は、ソ連に圧力を加えて一方的に譲歩させるための〝強い切り札〟を獲得しようという米国の願望で正当化されている。しかし、このバカげた論拠もまた、核の時代のすべての歴史的経験によってくつがえされている。米国は再三、新型兵器の開発を対ソ威嚇に利用しようとしてきた。しかしそのたびにそれは交渉ではなく、一層の軍拡競争を刺激した。というのもそれによってソ連は、自分たちの安全のために同様の種類の兵器の開発を余儀なくされたからだ。

米国は凍結に応じることはできない、なぜならそれが、地上配備戦略ミサイルにおけるソ連の優位を固定化することになるからだ、とも言われている（戦略爆撃機と潜水艦搭載の弾頭の量の面での米国の優位については黙殺している）。この命題を解説してワインバーガー米国防長官は、六〇年代と七〇年代の米国の軍事的優位が〝平和維持のための〟出発点だ、と述べている。

筆者の私見では、ペンタゴンの長のこの告白が最も真相に近い。査察についてのわざとらしい懸念ではなく、軍事的優位へのしつような願望が、凍結構想に対するワシントンの否定的な態度の真の理由なのだ。しかしそれは、明らかに見通しのないアプローチだ。

そしてもしも米国が現実にソ連と共に核戦争の脅威をなくする道を探そうと望んでいるのなら、米国は出方を変えなければならない。力の政治の悪循環を断ち切り、破局への暴走をやめ、軍拡競争にブレーキをかけ、その上でさらに平等と同等安全の原則に厳密に従って核対立のレベルを引き下げる方向に進む必要がある。

科学万博ソ連館コーナー

世界の文明発生地の一つ

アルメニア高原の文化の伝統

本誌記者　ゲオルギー・ナグシャン　カメラ　V・アルチュノフ



▶ゲガルド僧院にあるハチカール（十字架を彫った石碑）

科学万博ソ連館の第4セクションのテーマは「人間は地上の最も大切な宝」。このセクションの展示コーナーの一つは、アルメニア高原に住みついた人間の旧石器時代から現代までの数千年にわたる物質文化を紹介している。

世界の文明発生地の一つであるアルメニア高原は、ソ連欧州部の南（現在のアルメニア共和国）、トルコ、イラン（一部）にまたがって位置しており、アルメニア高原のあちこちから、特にアラガツ山のふもとやラズダン川の谷間から石器時代つまり五〇万年以上も前に作られた原始的な道具が発見されている。アルメニア高原に住んでいた人々は世界で最初に金属を、特に青銅、後になって鉄を使い始めた住民集団の一つである。

アルメニア高原では紀元前9世紀の初め、トッシュパ（現在のトルコのバン）を首都とする強大な奴隷制国家ウラルトゥが形成された。この国家は現在のソ連の領域に生まれた最古の国家と見られており、この時代の興味深い文字の遺跡――大きな岩に彫られた楔形文字がバン湖やセバン湖、アルメニア共和国の首都エレバンの付近に残っている。エレバンの南東のはずれにあるアリンベルト丘の発掘作業で見つかった楔形文字の碑文の一つは、市の〝出生証明書〟になった。この碑文には、約二八〇〇年前、ウラルトゥ国王アルギシチがこの地に強大な要塞エレブニを築いたことが記されていた。この要塞がエレバンの起源である。

その他の考古学調査の結果、ウラルトゥ人は灌漑用運河や橋を作り、手工業に従事し、ブドウ、小麦を栽培し、ワインを作っていたことが分かった。

紀元前6世紀にウラルトゥ王国が崩壊したのち、アルメニア高原に住むアルメニア人のさまざまな部族を統一したアルメニア国家が生まれた。以来、自民族の独立を守るためのアルメニア人の頑強な闘いが延々と続くわけだが、それでも古代ギリシャの歴史家クセノフォンの証言では、アルメニアではかなり高い水準の農業が行われ、工芸作



▼銀器のとっ手（アルタシャト出土品）



▼アルメニア共和国科学アカデミー考古学研究所が古代都市アルタシャトで発掘した「アルタシャトのビーナス」



エチミアジンの近くのズバルトノツ寺院（7世紀）の遺跡



エレバンの東27kmのところにあるカルニ神殿（紀元前５世紀）



セバン湖畔の僧院



ケハルドの僧院の内部（12―13世紀）



物が作られ、灌漑農業が発達していた。

アルメニアは紀元前1世紀のティグラネス王の時代に最盛期に達し、経済の発展が文化の発展をうながした。この時代の建築文化財の中で特別の地位を占めているのが神殿のある要塞ガルニである。ここの発掘調査では大量の陶器、ガラス食器が発見された。そのうちの何点かはソ連館に展示してある。

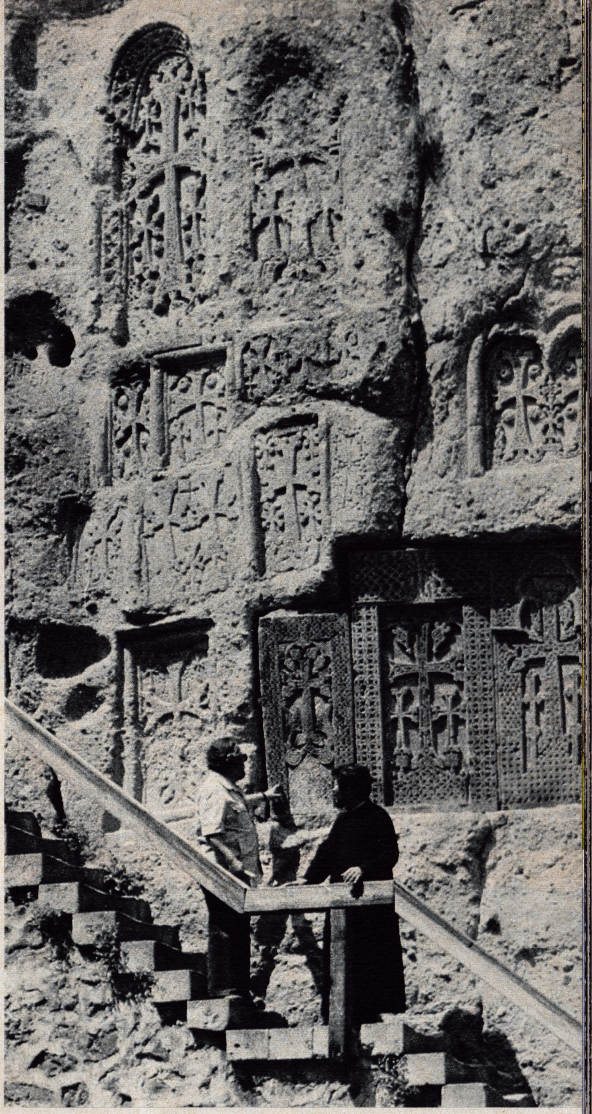
紀元後の最初の数世紀間にアルメニア民族の精神生活上重要な二つの歴史的出来事が起こった。一つは三〇一年にキリスト教が国教になったこと、もう一つは四〇五年に啓蒙的な学者メスロプ・マシトツがアルメニア語のアルファベットを考案したことである。このアルメニア文字は現在もまったく変更を加えずに使われているほど完全なものだった。この二つの出来事は、そのあとに続く国家の統一を守るための闘いの時期に、民族の独自性と文化を保持する上で決定的な役割を果たした。

5世紀から7世紀にかけては都市の生活が活気をおび、科学と文化が繁栄した。大思想家で数学者、天文学者、地理学者であったアナニヤ・シラカツィが生き、活躍したのはこの時代である。彼のつくった地球儀は、当時のアルメニア人の地球の構造に関するひじょうに進んだ知識を示しているが、

▲4世紀建立のゲガルド僧院



19世紀の男性の衣装と室内の装飾



ゲガルド僧院のハチカール



▶紀元前8—7世紀のウラルトゥ王国時代の石の手箱

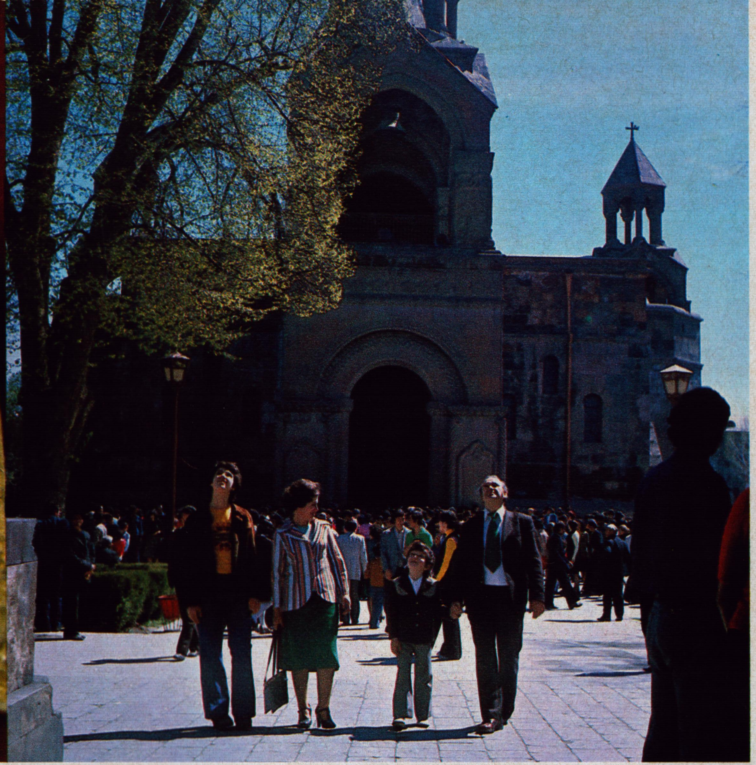
ライオン像を打ち出した金製の容器（紀元前1—2世紀頃のもの）

これもソ連館に展示されている。

中世初期のこの時期にはアルメニア芸術の古典的様式が形成され、これが後世の芸術家たちのインスピレーションの源泉になった。この時期にはまた、リプシメ寺院やズバルトノツ寺院のようなアルメニアの優れた建築物が、また7世紀の円屋根・廊堂風教会の中では特別の地位を占める独創的な設計のオドズン寺院が建てられた。ユニークな建築技術を物語るこのオドズン寺院の模型もソ連館で見ることができる。

アルメニアの石工たちは子孫にアフタマル寺院やゲガルド僧院の装飾、たくさんのハチカール（十字架を彫った石碑）のようなすばらしい中世の彫刻の手本を残した。木彫にもすばらしいものがある。今日に伝わる木彫の多くの傑作の中から、ソ連館には12世紀、13世紀作の祈禱の時に聖書を置く台が展示されている。これらの台には幾何学模様や、その時代の生活、民衆の信仰をしのばせる人や動物の姿が彫られている。

金属の芸術的加工（ルーツは紀元前三〇〇〇年紀―二〇〇〇年紀までさかのぼる）については、中世に栄えた都市アニやドゥビン（どちらもアルメニアの首都だったことがある）の発掘で出土した多くの金と銅の装飾品、生活



アルメニア教会の総本山エチミアジン大寺院は4世紀の建立。世界各国から多くのツーリストが訪れる。



エチミアジン大寺院の寺具博物館に展示されている、ローマの兵士がはりつけにされたキリストの肋骨を刺したといわれる槍。



ケチャリス僧院（10—13世紀建立）

用品、教会用具などから知ることができる。これらの品々（鋳物、金属板の打ち出し細工、彫刻）を作る技術は世代から世代へと伝えられ、今日まで続いている。この技術は細密画、彫像、陶器とも密接な関係にあった。

16世紀から17世紀にかけてアルメニアは独立を失い、二つに分断され、西アルメニアはトルコの支配下に、東アルメニアはイランの支配下に置かれた。このため、アルメニア文化は16世紀以降、主としてアルメニア高原以外のアルメニア人居留地で発展することになった。アルメニア語の最初の印刷本ですら、アルメニアから遠く離れたベネチアで刊行された（一五一二年）。

一八二七年、東アルメニアはロシアに統合された。この歴史的出来事はアルメニア民族を滅亡から救い、アルメニア民族の精神文化、物質文化のその後の発展に進歩的な役割を果たした。

アルメニア民族は何千年にもわたって民族文化を保存、発展させながら、じゅうたん製造技術、貴金属の加工、木彫、金属板の打ち出し細工などの優れた伝統を今日まで守ってきた。アルメニアの名工たちの作品は国際見本市で以前から高い評価を得ており、今回もその一部がソ連館に展示されている。ソ連館を訪れた方は、民衆芸術の古い伝統がアルメニアの芸術家たちによって現在も立派に生き続けていることを自分の目で確かめることができる。しかし現代の名人たちの手で仕上げられた出品物の中には、20世紀にしか作られないような作品もある。それは肉眼では見えないミクロ細工の作品で、倍率の高い拡大鏡で見なければ分からない。作者はエドゥアルド・カザリャン。科学万博のソ連館でその腕前を披露している。カザリャンの作品は世界の多くの国で名高く、例えば長さ1.5㎝のシマメノウのかけらにはめこんだ一万五〇〇〇個のいろいろな色の石でできた英国の地図は、英国人を大喜びさせ、英国の王立協会に贈られた。

エドゥアルド・カザリャンはバイオリン作りの名人としても知られている。彼の手になるバイオリン、ビオラ、チェロは、ソ連の多くの名演奏家に愛用されている。

つい最近、ドゥビン地区（エレバン市郊外）での発掘でガラスの水差しが発見されたが、水差しには10世紀のバイオリンが描かれていた。カザリャンはこの絵をヒントにしたバイオリンを作り、「ドゥビン」と名付けた。ソ連館を訪れた人は、このバイオリンのすばらしい音色を知ることになる——演奏は作者自らが行っている。



アガルツィンスキー僧院

ミハイル・ゴルバチョフと社会主義インター軍縮委との会談

3月22日、クレムリンでミハイル・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長と社会主義インタナショナル軍縮委員会との会談が行われた。会談には委員会の以下の委員が出席した。

カレビ・ソルサ（社会主義インタナショナル副議長、軍縮委員長）、ペンティ・ビャヤニャネン（社会主義インタナショナル事務局長）、ワルター・ハッカー（軍縮委員会書記、オーストリア）、ロビン・シアーズ（社会主義インタナショナル事務局次長、カナダ）、ジェニー・リトル（英労働党国際問題担当書記）、アンドレアス・フォン・ビュロフ（独社会民主党安全保障問題委員長）、ハインリヒ・ブーフビンダー（スイス社会民主党安全保障問題委員長）、館林千里（日本社会党中央執行委員）、フランソア・ゴードマン（仏社会党代表）、アントニオ・ガルシア・パガン（スペイン社会労働党代表、下院外交委員・防衛委員）、田中幸子（日本民社党国際局書記・外交委員）、ラウリ・カンガス（フィンランド社会民主党国際問題書記）、アラン・ロサス（フィンランド社会民主党軍縮問題専門家）、リッタ・コルホネン（スオメン・ソシアリデモクラチ紙編集員）。

会談にはボリス・ポノマリョフ・ソ連共産党中央委政治局員候補・同書記が同席した。

カレビ・ソルサはミハイル・ゴルバチョフのソ連共産党中央委書記長就任に祝辞を述べ、軍拡競争の制限と停止問題の解決をめざす委員会の活動を説明、モスクワでの会談終了後、委員会が米国政権の代表との会談のためにワシントンを訪問することを伝えた。社会主義インタナショナルに加盟する政党は世界情勢、とくに軍備のとどまることを知らぬ増大を憂慮している。軍縮委員会は、とくに宇宙空間の軍事化に反対している。

ソ連が米国と一緒に軍拡競争を制限するだけでなく、停止させるために全力を尽くすことへの期待が表明された。

カレビ・ソルサは、社会主義インタナショナルに加盟する社会主義および社会民主主義政党はこれに協力すると言明した。カレビ・ソルサは、軍拡競争制限問題がソ米両国だけでなく、全人類に関わっていることを指摘し、小国、中立国、非同盟諸国もこの事業に貢献する使命を担っており、そうすることができると述べた。ソ米ジュネーブ交渉の参加者に対して、核破局へところげ落ちるのを防ぐため全力を尽くしてもらいたいとの希望が表明された。一九八五年は軍拡競争の抑止を目的としたありとあらゆる措置を講じるべき決定的な年であると、カレビ・ソルサは強調した。最後に、カレビ・ソルサは、モスクワにおいて軍縮委員会に対して与えられたもてなしと有益な会談についてソ連共産党指導部に感謝の念を表明した。

ミハイル・ゴルバチョフは、ソ連共産党とソビエト国家の対外政策路線は揺るぎないものであり、ソ連共産党中央委3月（一九八五年）総会でこのことが確認されたことを強調した。ソ連は平和と進歩の方針に沿って一貫して進むであろう。

会談の過程で、世界にきわめて深刻な事態が生まれていることが指摘された。核戦争の脅威が増大している。軍拡競争は、もしそれをいま抑止しなければ、歯止めのきかぬプロセスが始まる質的に新たな段階に移行しかねない。さらに、国際信頼の破壊、あらゆる方向での対決の激化を狙う意図的な行動によって事態は複雑なものになっている。現代世界の現実が誰かに気に入らないというだけで、独立諸国の内政に対して武力による脅しや露骨な干渉に訴えている。

全世界の平和愛好世論は危険な軍拡競争に終止符を打ち、戦争の脅威を排除することを求めている。この点に関連して、始まったばかりのソ米ジュネーブ交渉に大きな期待がかけられている。

ソ米共同声明に盛り込まれたように、交渉の目的は宇宙での軍拡競争を防止し、地上での軍拡競争を停止させ、核軍備を制限・削減し、戦略的安定を強化することをめざす有効な合意の作成にあるが、このことは原則的な意義をもっている。双方の考えでは、究極的には交渉はあらゆる場所で完全な核兵器廃絶をもたらすものでなければならない。

ジュネーブ交渉の進展とその成果は、なによりもまず双方が交渉の対象と目的について達成された合意をそのすべての部分において無条件に厳守するかどうかにかかっている、とミハイル・ゴルバチョフは強調した。ソ連は前述の合意の実現のために全力を尽くすであろう。米国側の意向については、われわれはその実際の行動によって判断するであろう。双方が善意と道理にかなった妥協への用意を発揮し、最も重要なこと、平等と同等安全の原則を厳守することが必要だ。

われわれは、交渉が軍拡競争の一層の激化をごまかす隠れミノに変わることに断固反対である。ソ連が双方の核兵器庫を凍結し、ミサイルの一層の配備を停止することを提案している理由はここにある。とくに、われわれは、ソ連の報復措置の強化の同時停止のもとで米国製新型ミサイルの欧州配備を停止することは、ジュネーブで討議される問題の総体にわたる解決を根本的に促進するものと確信している。

現代のさまざまな社会・政治勢力の努力が核戦争の防止に向けられている。ソ連や他の社会主義共同体諸国が打ち出した大規模な平和愛好イニシアチブは、この目的に向けられている。これらのイニシアチブは世界共同体の見解を表す国連の諸決議と軌を一にしている。世界の多くの国々の世論と指導者たちはデタント政策への復帰、軍拡競争の停止、政治的対話と協力の発展をはっきりと支持している。現在多くの国において強力な社会・政治勢力となった反戦運動も、これを断固支持している。核時代にあって国家の安全は武力あるいは武力の威嚇によっては構築できないという理解が広く確立されている。国家の安全は万人が安全なときはじめて可能となる。すべてのことは、しかるべき努力のもとで情勢の転換と国際気候の健全化を達成できるとの確信を強めている。

われわれは社会主義インタナショナル軍縮委員会の活動を知っており、建設的な対話や交渉を促進しようとするその意欲を評価している、とミハイル・ゴルバチョフは述べた。社会主義インタナショナルの諸政党は、その重みや影響を考慮に入れて多くの点で国際情勢の健全化、軍拡競争の停止を促し、人類を核破局から救う事業への寄与を増やすことができよう。国際情勢は戦争の脅威に反対する闘争での労働運動、民主運動の積極的で有効な努力を切実に求めている。ソ連共産党は社会主義インタナショナルに加盟する政党を含めてすべての平和愛好社会勢力と積極的に協力する用意がある。これはわれわれの確固たる不変の方針であり、われわれは今後ともこの方針を首尾一貫実施していくであろう。

会談は友好的で建設的な精神のもとで行われた。

（プラウダ、一九八五年3月23日号）

新刊パンフ配布のお知らせ

次の4種類のパンフ（誌代無料）を配布します。郵送ご希望の方は、送料分の郵便切手を添えて、ソ連大使館広報部パンフ係へお申し込み下さい。

各冊とも1冊の送料は二〇〇円、4冊セットの場合の送料は三〇〇円です。

☆『ヤルタ・ポツダム両会談と国際安全保障』（ワジム・ネクラーソフ著、A5判一〇三頁、APN出版局）

☆『日々と生涯・レーニンの外伝』（エゴール・ヤーコブレフ著、新書判一六八頁、APN出版局）

☆『運命に逆らって』（イリヤ・ギトリツ著、新書判一三六頁、APN出版局――ソ連の身体障害者の生活と具体的な個人例の紹介）

☆『アジアの平和と安全――社会主義諸国の提案（資料集）』（ノーボスチ通信社編、B6判一〇五頁、アジア書房発行）。

なお、パンフによっては、品切れになるものもありますので、その節はご容赦下さい。

本誌編集部の質問に対するアブラシモフ新駐日ソ連大使の回答

Ｐ・Ａ・アブラシモフ新駐日ソ連大使は3月29日、日本国天皇陛下に信任状を提出した。アブラシモフ大使は本誌の質問に対し次のように答えた。



ピョートル・アンドレーエビチ・アブラシモフ
駐日ソ連特命全権大使

問い1　あなたが駐日ソ連大使として、とくに挙げておく必要があると考えておられる活動の主な課題は、どういう課題ですか？

答え　ソ連特命全権大使というポストは、その任に当たる者にとても大きな責任と複雑で大きな義務を課しています。国家間の関係という織物は非常に多くの糸からできていて、その糸の一本たりとも弱めたり、切ったりしてはなりません。だから大使の活動には二次的な問題はありませんし、またありえないのです。誰でもよく知っているように、人間関係が気まずくなることが時々あります。しかし国家間の善隣関係、真の友好関係をうち立て、しっかりうち固めることの方が、人間関係の場合よりも数倍むずかしく、まして社会・政治体制が違う国との関係の場合はなおさらむずかしいと言えます。そこで駐日ソ連大使としての私の課題も、ソ日両国の間に強固な相互信頼の関係、心からの好意のこもった関係のより一層の確立を助長し、あらゆる可能な分野でソ日間の接触と互恵的協力を伸ばす道を積極的に探し、見付けることだということになります。

　いまのわれわれの時代は物騒な時代で、核戦争の脅威がダモクレスの剣のように世界の頭上にぶら下がっています。ソ連国民はこの恐ろしい言葉である戦争とは、どういうものかをよく知っています。ファシスト略奪者と戦ったソ連国民の大祖国戦争の時期に私は、武器を手にして生きる権利と自由を守り抜いた何千万ソビエト人の隊列にいて、わが国民がなめた死と悲しみや非人間的な苦難をじかに見てきました。戦時中にわが国民は二〇〇〇万人の息子と娘を失ったのです。私は、ソビエト人の平和をめざす熱意、そして人類の幸せを守り、新戦争の脅威に反対して特別の力とエネルギーでたたかうことにやぶさかでないソビエト人の心構えが、日本で十分に理解され、然るべき反響を呼ぶことを願っています。ソ連は地球上の生命を守る自分の責任を自覚し、軍拡、いわゆる〝スターウォーズ〟を阻止し、核破局を防止するために全力を尽くしていますし、今後も全力を尽くすでしょう。われわれは、これらのけだかい目的を達成するために、日本のような権威のある大国をも含めた、地球上の平和を貴ぶすべての諸国民や国々と協同行動がとれればうれしいと思います。

問い2　この数年来日ソ貿易がめっきり減退しています。ソ連の取引相手国である日本は、これまでずっと保ってきた主導的地位を西側の他の資本主義諸国に明け渡し、いまは6、7位のところを低迷しています。その主な原因は何だと思いますか、また今後の見通しはどうですか？

答え　周知のように貿易は昔から諸国民と諸国家を近付けてきました。しかし相手側から一方的な経済的譲歩あるいは政治的譲歩さえかちとるために、貿易を脅迫や圧迫に使った例は、過去にもありましたし、現在もあります。大体こうした企ては失敗に終わり、二

国の関係を悪化させるのがおちで、とくにいわゆる〝制裁〟や〝禁輸措置〟をとった国の経済的利益に重大な損害をもたらしました。

「今日のソ連邦」誌の読者なら、何が問題になっているのか、よく分かっていると思います。一九七〇年代末から日本は、不幸にも外部から耳うちされて、ソ連に対し貿易・経済面の〝制裁〟を含むいわゆる〝制裁〟措置をとるようになりました。このためソ日関係の雰囲気は著しく悪化し、ソ日貿易も減退したのです。日本の取引相手に対するソ連の貿易公団の信頼が崩れたと言っても、重大な秘密をもらすことにはならないでしょう。その結果、そんな〝制裁〟がとられなければ日本の商社と結ぶことができたはずである非常に有利な多くの契約が、西欧の商社にまわりました。

　現在、日本の実業界の代表の口からも、われわれ両国間の貿易高が減った原因は日本の産業構造の再編成のためであり、ソ連からの供給も含めて、日本がもはや原料の供給をあまり必要としなくなった結果である、といった声をしばしば聞きます。日本が従来どおり少なからぬ燃料、木材、石炭、鉄鉱石その他を輸入しているのは周知のことであり、日本の産業再編成はもちろん、日本にとって空気や水が原料の代わりになるということを意味しているわけではありませんが、この問題についてはこれ以上踏み込まないことにしましょう。ソ連は世界の主要な経済大国の一つであり、一次産品のほかにも貿易するものを持っています。いくつかの例を挙げましょう。日本の一連の商社はイワノボ工場製の工作機械を購入し、高く評価しています。連続鋳造法、高炉蒸発冷却技術、コークス乾式消火法のソ連のライセンスが日本の企業に導入されています。つまり、われわれが言っているように、その気さえあれば、ソ日貿易・経済関係を現在の、率直のところ正常ではない状態から引き出す方途を見つけ出すことは十分に可能です。われわれは、日本の実業界の人々がソ連商品の〝発見〟において持ち前のねばり強さと積極性を発揮すること、互恵の貿易・経済関係と協力を根本的に拡大するような政治的雰囲気が作り出されることを期待しています。

問い3　日本の新聞ではしばしば、ソ連が日本と文化協定を結びたい意向であると書かれていますが、これについて具体的に……

答え　日本の古い文化、独自の文化、さらに現代の文化がわが国でどれだけ広く知られているかについては特に語る必要はないと思います。日本でもロシア文化、多民族ソビエト文化の成果に対する関心は著しいものがあります。われわれは両国間の文化交流が増えることに賛成です。なぜなら、それぞれの民族の文化遺産を知ることは、お互いが精神的に豊かになるのを促し、お互いをもっとよく理解し合えるようにすると考えているからです。

　われわれは、ソ日文化交流にもっと強固な、協定にもとづく、長期的な性格をつけ加えるべき時期はとっくにきていると考えます。それだからこそソ連は、ソ日政府間文化協力協定の締結に賛成しているのです。ついでながらソ連は、ほとんどすべての資本主義大国とそのような協定を結んでおり、これらの協定は文化の分野でこの二国間の交流の拡大においてその有効性を証明しました。われわれはいますぐにでも日本との文化協力協定を準備し、調印する用意があります。答えは日本側にかかっています。

問い4　日本での世論調査の結果から判断すると、日本の人々はソ連やその対外政策についてかなり曲解しているようです。この点についてのご意見は？

答え　率直に言うと、このような事態を深く遺憾に思っていますし、重大な懸念をもたないわけにはいきません。

　私が日本に赴任してから今日までのわずかな期間にさえ、それまでに耳にしていたことをじかに確信することができました。ソ連についての正しい、客観的な報道が日本の新聞やテレビに現われることはむずかしいし、とてもむずかしいことです。かりに何とかそんな報道が出ても、すぐにお返しとして〝バランス〟をとるために文字通り公然たる反ソのでっち上げ記事の波がおし寄せます。私は〝ソ連の脅威〟、〝ソ連の侵略性〟などといった、とっくに聞きあきて嫌気がさしてはいるが、事実上間断なく吹聴されているつくり話についてはもう言いません。こうしたつくり話の作者はだれ一人として、これらの、いわゆる脅威や〝侵略性〟の具体的な事実を一つも挙げていないし、また決して挙げることはできないでしょう。

　しかし注目すべきことですが、ソ連を悪意を込めて歪曲した、ゆがんだ鏡に映し、ソ連への不信、疑念を吹き込もうと全力を尽くしているにもかかわらず、最近ますます多くの人々が、自分たちは全くだまされているのだと確信するようになっており、ソ連についての真実を知ろうという熱望が高まっています。恐らく、そのための最良の方法の一つは、ソ連を訪問し、一般のソ連人がどのように暮らし、どのように当面する問題を解決し、平和維持のために闘っているかをじかに見ることでしょう。

問い5　あなたはソ日国交関係史には〝晴れの日〟もあれば〝雨の日〟もあったと別の機会に言われたが、あなたの意見では、〝雨の日〟が両国の関係を曇らさないようにするためには、どうしなければなりませんか？

答え　これに答えているのが、平和共存原則と善隣・互恵協力に基づいて、ソ日関係を発展させるというソ連の原則的な方針です。われわれは、数々の問題をでっち上げてソ日関係をわざと建設的な発展からそらし、両国の関係を悪化させることのないように願っていますし、両国関係がソ連および日本と第三国との関係しだいで揺れ動くことのないよう願っています。

　Ａ・Ａ・グロムイコ・ソ連共産党中央委政治局員・ソ連閣僚会議第一副議長・ソ連外相は朝日新聞の読者への新年メッセージの中で「われわれは、ソ日関係が友好的で、深く多面的なものになることを、変わらず支持している」

と強調しました。しかしそのためには相互主義が必要です。ことわざにあるように、希望と相互協力は成功の母です。ソ連はこの道の自分の部分を進む用意があります。ソ日善隣・互恵協力条約を結び、さらに日本に対し核兵器を使わぬことをソ連が保証し、日本側も非核の立場を厳しく一貫して守る義務を負う協定を結ぼうというわれわれの提案は、いまも効力をもっています。われわれは経済協力と文化交流に関する提案をはじめ、さまざまな提案をしています。

一言で言えば、両国関係の発展にとって手堅い潜在的可能性があります。それが実現することを期待します。

問い6　ソ連共産党中央委員として3月のソ連共産党中央委臨時総会の結果をコメントして下さい。

答え　ソ連共産党とソ連国民の固い団結がとてもひしひしと感じられ、現代世界におけるソビエト社会主義国家やソ連共産党のレーニン的対外政策の絶大な権威が、特に力強く発揮される日々がありますが、3月11日にK・U・チェルネンコ同志を追悼して開催されたソ連共産党中央委員会臨時総会の時、社会主義諸国の指導者、発展途上諸国や資本主義諸国、共産党と労働者党、解放運動のリーダーたちがモスクワに参集した時が、そういう日々でした。

全党、全ソ連国民は、ソ連共産党中央委員会総会がミハイル・セルゲーエビチ・ゴルバチョフ同志、すなわち自分の知識、豊かな経験、組織者としての才能を党の政策の実現のために捧げてきたし、捧げており、レーニンの大業と勤労人民の利益のために献身的に奉仕している党と国家のすぐれた活動家を、全会一致でソ連共産党中央委書記長に選出したという知らせを、熱い賛同の気持ちで迎えました。この決定はわが国や外国のいたる所で、創造と平和のレーニン的方針に対するもう一つの証拠として、また党の政策の継承性を示す証拠として受け入れられました。

総会でのソ連共産党中央委書記長の演説では、わがソビエト祖国がさらに豊かに、強大になるよう、ソ連国民の物資的・文化的生活水準がより速やかに向上するよう、社会主義の創造的可能性がより完全に開花するよう、国の社会・経済的発展を早め、ソ連社会のすべての生活面の水準を高めるという党の戦略路線が明らかにされました。

総会でM・S・ゴルバチョフ同志が強調したように、われわれの対外政策路線は明確で一貫しています。「われわれは平和と平和共存のレーニン的方針に断固従っていきます。ソ連はつねに善意には善意で、信頼には信頼でこたえるでしょう」。

総会は共産党とソ連国民に具体的で明確な目標を示しました。目標は誰にとっても身近で、分かりやすく、ソビエトの国の勤労者を新たな成果へと奮い立たせています。

※　※

ピョートル・アンドレーエビチ・アブラシモフは一九一二年生まれ。ベロルシア国立大学卒。歴史学博士。ドイツ語とポーランド語に堪能。特命全権大使の位をもつ。

戦前はベロルシアで国家機関の仕事に従事。戦争中は開戦以来第一線部隊で戦い、その後パルチザン運動に参加して終戦を迎えた。大佐。

戦後一九五七年までベロルシア共和国閣僚会議第一副議長、ベロルシア共産党中央委書記。

一九五七—六一年——ポーランド人民共和国駐在ソ連大使、一九七一—七三年——フランス駐在ソ連大使、一九七二—七五年——ソ連共産党中央委部長、一九六二—七一年と一九七五—八三年——ドイツ民主共和国駐在ソ連大使、一九八三—八五年——ソ連国家海外旅行委員会議長。一九八五年3月から駐日ソ連大使。

ドイツ民主共和国英雄。40のソ連の勲章・記章、五つの外国の勲章・記章をもつ。ジェラニ市（ポーランド）とベルリンの名誉市民。

夫人と二人の娘がいる。



ソ連の貿易と対日通商・経済関係の見通し

——ジュラブリョフ・ソ連貿易第一次官に聞く

去る3月、科学万博のソ連館開館式に出席のため来日したゲンナジー・キリロビチ・ジュラブリョフ・ソ連貿易第一次官（写真）は、ソ連の貿易の現状とソ日通商・経済関係の見通しについて本誌記者に次のように語った（聞き手——A・ラザレフ記者）。

まず、ソ連の貿易が着実に発展しているということから話を始めたい。わが国は現在、世界の一四三カ国と取引

しており、現行5ヵ年計画（一九八一—八五年）の最初の4年間でソ連の貿易額は48%増え、一九八四年には一三九七億ルーブルに達した。またこの4年間のわが国の貿易収支も黒字で、昨年のソ連の貿易黒字は九〇億ルーブルだった。

ソ連の貿易で主要な地位を占めているのは**社会主義諸国**で、ソ連の貿易総額に占めるその割合は57%余りになる。この4年間に対社会主義諸国の貿易総額は50%余り増えた。

周知の通り、社会主義諸国の国民経済は計画経済なので、5ヵ年だけでなく、10年から15年という長期の貿易関係も計画することができる。ソ連の社会主義貿易は計画的だからはっきり断言できるが、今年のソ連の対社会主義諸国貿易がさらに約10%余り増えることは確実である。

わが国が活発な貿易を行っている第2グループは、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの**発展途上諸国**である。これらの国のうちソ連と取引しているのは一〇三カ国で、一九八一—八四年の対発展途上諸国貿易は58%増え、昨年度の実績は一九〇億ルーブルに達した。わが国の貿易額に占める発展途上国の割合は約14%である。

わが国と発展途上諸国との関係の特徴は、通商・経済、科学技術協力の歴史が浅く、約20年前に始まったことである。わが国は発展途上諸国の一連の国々と10ヵ年の経済協力協定を結び、期限5年の貿易プログラムに調印してきた。ソ連とこうした協定を結んだ国は、インド、アフガニスタン、モロッコ、エチオピア、朝鮮民主主義人民共和国などである。ソ連は大工業施設を建設する発展途上国に大きな技術的援助を与えている。例を挙げると、エジプトのアスワン・ダムの建設、インドの二つの冶金コンビナート、アルジェリアの製鉄所の建設などである。この20年間にソ連の援助により建設された発展途上諸国の施設は約一〇〇〇にもなる。鉱業、鉄鋼業、機械工業、エネルギー産業、その他の国民経済の重要な分野でも同様の援助が行われている。

ソ連の貿易相手国の第3グループは**先進資本主義諸国**である。その貿易額は対社会主義諸国や発展途上諸国ほど急速には伸びておらず、一九八一—八四年の貿易の伸びは29%だった。この対先進資本主義諸国の貿易がソ連の貿易総額に占めるシェアは29%である。

ここで指摘しておかなければならないが、現在資本主義諸国のうちの若干の国々との貿易はうまくいっているが、その他の国々とはあまり順調にはいっていない。つまり昨年度のソ連の対先進資本主義諸国貿易の総額の伸びは平均6%であったが、対英貿易の伸びは22%、対ドイツ連邦共和国は7%、対イタリアは4%、対フランスは5%だった。対日貿易は2年連続で落ち込み、一九八三年は20%減、一九八四年は4%減だった。

先進資本主義諸国との貿易で、これほどいろいろな違いが見られる原因は沢山あるが、ここでは大きな原因を二つだけ挙げておきたい。

緊張緩和の時代にソ連は多くの資本主義国と経済、産業、科学技術進歩の分野の長期協定を結んだ。単刀直入に言うと、これらの協定を結ぶ際われわれは特別な特典も、第三国の犠牲による利益も求めなかった。われわれは一つのこと——互恵協力の発展のための揺るぎない協定的基盤づくりを目ざした。多くの西側の取引相手国はわれわれを正しく理解した。その結果ソ連は現在、25年間の貿易・経済および科学技術協力協定をフィンランド、ドイツ連邦共和国と、10年間の長期協定をフランス、イタリア、カナダ、ベルギー、ギリシャ、オランダと結んでいる。ところがこのような長期の協力協定は日本との間には結ばれていない。これは明らかにソ日貿易にはね返っている。

ソ連の対資本主義諸国貿易の伸びにむらがあるもう一つの重要な原因は、若干の貿易相手国の支配層がイデオロギー分野の対立を貿易・経済関係に持ち込んでいることである。一九八〇年代の初め、あれこれの国はさまざまな〝制裁〟や禁輸によってわが国を威嚇した。この対ソ差別方針に日本も同調した。現在までこれら差別的制限は公式には撤廃されていない。

M・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長は、3月14日の中曽根首相との会談で、日本側が人為的に作り出した両国間の障害や制限を撤廃する重要性を強調し、これらの障害や制限は貿易・経済関係面にも存在すると述べたうえで、ソ連は日本とさまざまな分野での互恵の交流を発展させることにやぶさかではなく、日本との関係を善隣の精神で構築したいと述べた。この発言も極めて重要だと思う。

われわれが共に努力すれば、ソ日貿易の否定的な縮小傾向は食い止められるに違いない。その幾つかの証拠は、まず昨年12月東京で5年ぶりに第9回ソ日・日ソ経済合同委員会が開かれ、さらに今年1月4年ぶりで政府間の第25回ソ日貿易年次協議が開かれたことである。これは両国の貿易・経済関係の改善への期待を高めた。

これら二つの会議を通じて、共同の努力によって実現可能な、多くの興味深いプロジェクトが審議された。そのうちの一つは、サハリン島陸棚の石油・天然ガス開発への日本企業の参加である。サハリン島陸棚におけるエネルギー資源の鉱床の探査にはソ連と日本の専門家が共同であたった。いま問題になっているのはこれらの鉱床の開発における協力の可能性である。

バイカル・アムール幹線鉄道の開通も両国の協力関係に好ましい将来性を開いている。バム鉄道はシベリア・極東の貴重な天然資源を入手しやすくした。その他にも大変興味をそそられるプロジェクトがある。

日本側が理解と関心を示すならば、ソ日両国の貿易・経済関係は前向きに変わろう。一九八〇年代の初め日本の対ソ貿易額は、ソ連の対先進資本主義諸国貿易相手国の中ではフィンランドに次ぐ第2位の地位を占めていた。先に挙げた原因により対ソ貿易における日本の地位は6、7位に落ちた。はっきり断言できるが、両国の経済力から見て、現在の貿易レベルはあまりにも低すぎる。だから両国の関係者は現状を修正する必要があろう。中曽根首相との会談でM・S・ゴルバチョフ・ソ連共産党中央委書記長が言った、「この面でわれわれは多くの具体的な措置を取る用意がある」という言葉をもう一度指摘しておきたい。

われわれは協力の発展に賛成だが、平等、互恵、相互の内政不干渉の条件がなければならない。これがソ連の基本政策である。なぜならば、貿易・経済関係は結局は地球上の平和と進歩を保証する物質的基盤であるからだ。

欧州諸国の解放



進駐したソビエト軍将兵を迎え、喜びにわくベオグラード市民



プラハに入ったソビエト軍戦車の上で歓呼の声をあげるチェコの若者たち

一九四四年春、ソビエト軍部隊は敵をソ連国境へ撃退したのち、プルート川を渡河し、ルーマニア領へ進出した。ルーマニア領進入についてソ連政府は4月2日特別声明を発表し、ソ連はルーマニア領土の一部の獲得またはルーマニアの現在の体制の変更を目的としておらず、ソビエト軍の攻撃はひとえに軍事的必要とヒトラー軍部隊の抵抗によるものである、と強調した。

ルーマニアの民衆は、不正義の戦争からのルーマニアの離脱を要求したが、アントネスク親ファシスト政府は、ソ連側の和平提案を拒否し、ナチス・ドイツに味方して戦争を続けた。一九四四年8月、ソビエト軍のヤスィ＝キシニョフ作戦が成功裏に行われた結果、ルーマニア国民が全国的な反ファシスト蜂起に立ち上がるのに好都合な条件がつくられ、8月23日から蜂起が始まった。ヒトラーは蜂起をおしつぶせと命じたが、ルーマニアの蜂起した民衆の雄々しい闘争とソビエト軍の断固たる行動が、ドイツ軍の蜂起つぶしを阻止した。8月30日には蜂起した人々の手で解放されたブカレストにソビエト軍部隊が進入し、またルーマニアの愛国者たちがソ連領で結成した第1ルーマニア義勇師団の部隊も、ソビエト軍とともにブカレストに姿を現した。

※　※　※

ブルガリアの場合はルーマニアよりももっと動きが激烈だった。ブルガリア軍部隊は対ソ戦にこそ参加しなかったが、政府は国民の伝統的なロシア好きに逆らって戦争中ずっとソ連を敵視する政策をとっていた。国内の激しい弾圧も、広範な地下抵抗とパルチザン行動の形をとった反ファッショ闘争をとめることはできなかった。一九四四年9月9日、ソビエト軍の第一線部隊がブルガリア領に進入した翌日から全国民的蜂起が始まり、祖国戦線政府が組織された。ソビエト軍部隊はブルガリア領土では戦闘行動を行わなかったが、ソビエト軍部隊の進入がブルガリア国民を不正義の戦争から離脱させるのに役立ったのは、いうまでもない。

※　※　※

一九四四年夏から一九四五年春までの約9カ月間にわたるポーランド国民の解放闘争は、凄絶かつ頑強であった。ポーランドではヒトラー軍の一七〇個師が重大な損害を被るか、完滅された。ポーランド領では六〇万人のソビエト将兵が戦死した。ソビエト軍部隊と肩を並べて、ソ連領で編成されたポーランド軍部隊が祖国の解放のために戦った。



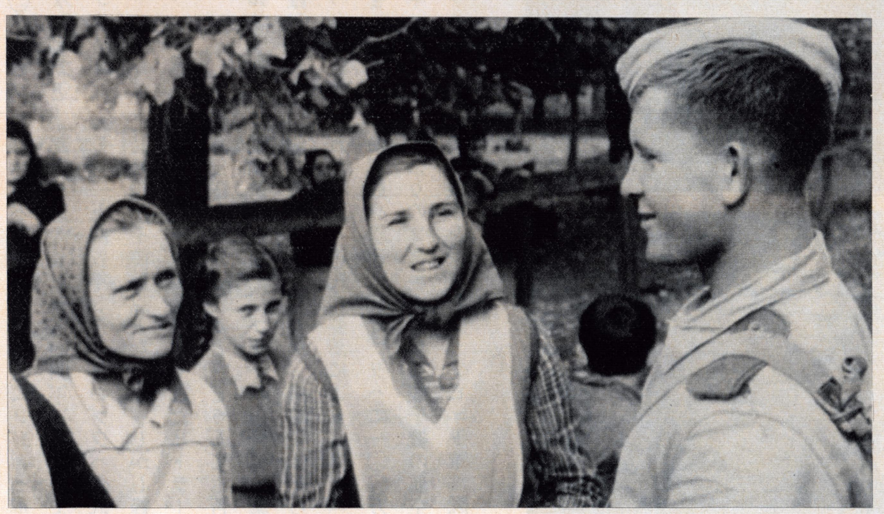
第1ウクライナ方面軍の将兵を歓迎するポーランドのクラクフ市民



1945年5月10日。プラハ市内に入るソビエト軍部隊



ソビエト軍部隊を歓迎するルーマニアのブカレスト市民



ソビエト兵と談笑するブルガリアの農婦

ソビエト軍はハンガリー領で敗敵を撃破しつつ、一九四四年12月にブダペストに迫った。ソビエト軍司令部は流血を回避し、市の貴重な建築文化財の破壊を防ぐために、ブダペストのドイツ軍守備隊に人道的な条件での降伏を要求したが、この申し入れは拒否され、激しい市街戦が展開された。一九四五年2月にブダペストは解放され、さらに4月初めドイツ軍はハンガリー領外に駆逐された。この解放戦で戦死したソビエト将兵は一四万人であった。

※　※　※

一九四五年4月9日、ウィーン攻防戦たけなわのころソビエト政府は、オーストリアの将来に関する声明を発表し、ソ連が、オーストリアの独立に関する一九四三年のソ米英3国のモスクワ宣言を忠実に守ること、ドイツ・ファシスト占領軍の統治体制の廃止と民主主義体制の回復を援助する意向をもっていることを確認した。オーストリア人から歓迎されたこの声明は、オーストリア領における戦闘の終結に大きな役割を果たした。4月13日ウィーンはヒトラー軍から解放された。

※　※　※

一九四四年9月、ソビエト軍はブルガリア・ユーゴスラビア国境に達した。4年間にわたって住民がドイツ・ファシスト占領軍と戦ってきたユーゴスラビアでは、そのころまでに人民権力機関——反ファシスト国民解放評議会と国民解放委員会の地盤が固まり、一九四四年2月から国民解放委員会のもとにソ連の軍事使節団が駐在した。ユーゴスラビア人民解放軍の兵力は四〇万人余りで、しだいに解放地区を拡大していったが、兵力、とくに物材・兵器装備はドイツ軍側が断然優勢だった。ユーゴスラビア国民は援助を求めていた。ソビエト軍司令部が特派した航空師団は、一九四四年5月から9月までの間だけで九二〇tの各種貨物（兵器、弾薬、被服、通信器材、医薬品）を、ユーゴスラビアの愛国者たちに空輸した。9月初めヨシプ・チトー・ユーゴスラビア人民解放軍最高総司令官はモスクワを訪れて、ユーゴスラビア領への赤軍の進入問題についてソ連側と合意した。10月20日ソビエト軍部隊とユーゴスラビア人民解放軍部隊は、激戦の末ベオグラードを解放した。戦闘にはブルガリアの将兵も参加した。こ

れらの戦闘に参加した二〇〇〇人のソビエト将兵にユーゴスラビアの勲章と記章が授与された。

※　※　※

一九四五年4－5月のベルリン作戦におけるソビエト軍の勝利は、チェコスロバキア駐在ドイツ・ファシスト軍の最後の軍集団の掃滅に好ましい条件をつくった。チェコスロバキアの解放戦は長くかつしぶとかった。この戦闘はスロバキアの東部地区にソビエト軍部隊が進入した一九四四年10月に始まり、一九四五年5月5日のプラハの武装蜂起がその頂点となった。しかし蜂起した人々が装備のすぐれたヒトラー軍部隊と戦うとなると、どうしても苦戦は避けがたく、プラハの市民には緊急の援助が必要だった。無線で伝えられたプラハ市民の要請により、ソビエト軍最高総司令部はプラハに一〇〇万人余りのソビエト将兵、数千機の航空機と戦車を派遣した。ソビエト軍部隊はチェコスロバキア北部境界線における頑強な抵抗を排除した後、5月9日朝（その前日ドイツが降伏した）強行軍の末プラハに近付き、同日プラハを完全に解放した。プラハの東部を包囲していたヒトラー軍の残存部隊は、5月10－11日投降した。

※　※　※

一九四四年10月22日、ソ独戦線最北部のペトサモ＝キルケネス作戦中、ソビエト軍は退却する敵を追ってノルウェー領に入った。ソビエト軍地上部隊は北方艦隊の艦艇とともに激戦の末キルケネス市を解放した。この作戦をきっかけにノルウェー全土がヒトラー軍の占領下から解放された。

第2次世界大戦の最終段階において、バルト海沿岸地方で孤立していたドイツ軍部隊の防御戦で重要な役割を果たしたのは、デンマークのボルンホルム島（一万二〇〇〇人のドイツ軍守備隊がいた）であった。同島の守備隊司令部が降伏提案を拒否した後、ソビエト海兵隊は敵の抵抗を制圧し、守備隊を武装解除した。ボルンホルムの管理はデンマークの総督の手に移された。

※　※　※

欧州諸国の解放戦に参加したソビエト軍将兵の総数は七〇〇万人で、そのうち一〇〇万人が戦死した……



ハンガリーの駅でハンガリー人の慰問を受ける

下　ブダペストの市民にパンを配給するソビエト兵





ソフィアで市民と交歓するソビエト兵



▶ソビエト兵に抱かれたノルウェーの幼児（1944年10月）



ソビエト軍将兵に歓迎の声を上げるオーストリアの住民（1945年5月8日）

生命は受けつがれる……

——レニングラードの封鎖を生きのびて

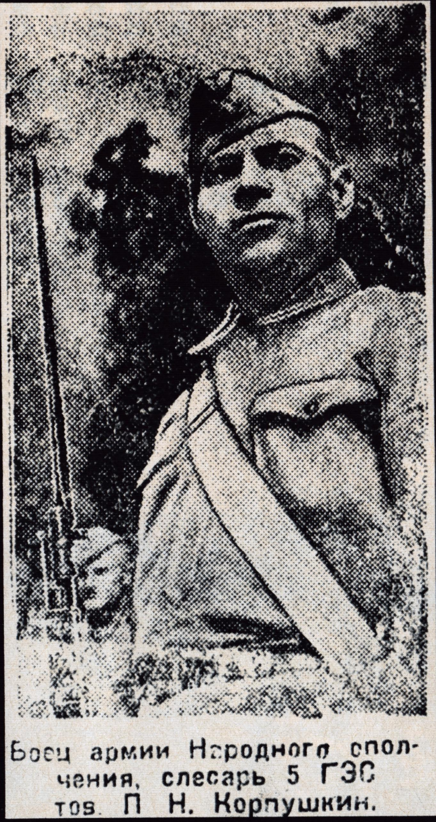
レニングラード駐在本誌記者 **アーラ・ベリャコワ**

カメラ **A・ワルフォロメーエフ**



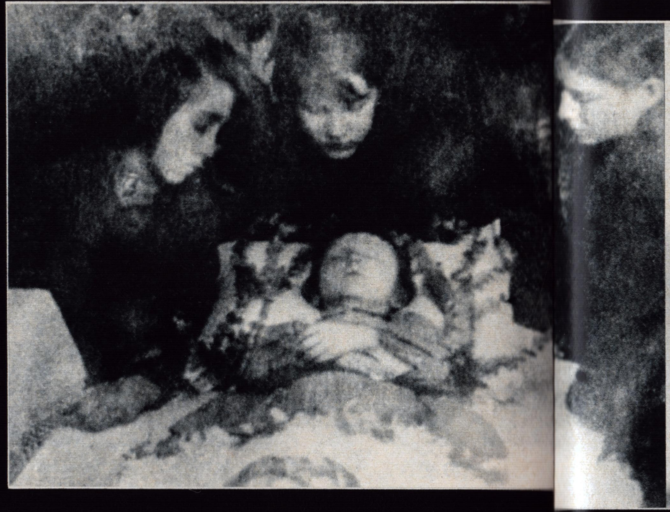
◀戦前に撮影されたカルプシキン一家の記念写真。父と母と3人の娘がいる幸福そのものの家庭だった。

1941年7月18日付けの軍の新聞に写真が掲載されたピョートル・カルプシキン。それから約1ヵ月後に戦死している。

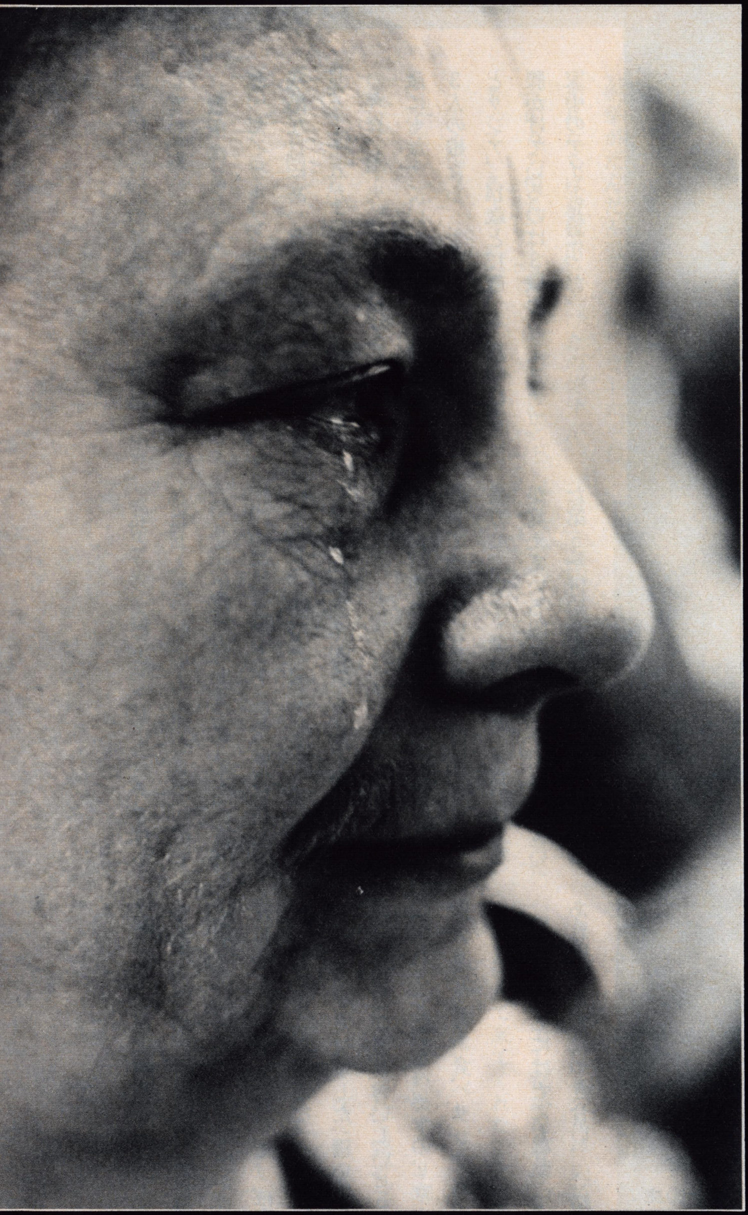




カルプシキン一家が保存していたレニングラード封鎖中のパン。現在は博物館に陳列されている。



▼1942年、封鎖中のレニングラードで末娘のレーロチカは死んだ。



◀娘の結婚式の日、花嫁の母の脳裏を走馬燈のように駆けめぐるのは過ぎ去った日々……

一九四二年秋、ドイツの各紙は、〝レニングラードを占領しよう、パリを占領した如く〟と書いた。

〝レニングラードを守る自然の障害物は何もない〟——当時のドイツの軍事教科書にはこう記されている。だが敵は誤りを犯した。レニングラードは市民たちの勇気、わがまちへの愛という克服できない障害物で守られていたのだ。レニングラード市民は、最初は爆弾と砲弾、次いで飢えと封鎖でファシストに苦しめられたが、まちを敵の手には渡さなかった。一九四一年秋からはドイツ軍はレニングラードを飢餓におとしいれることによって占領しようとした。市民は電燈も燃料も飲料水もパンもない中で生活した。レニングラードの英雄的な九〇〇日間の封鎖の日々は、ソビエト人の堅忍不抜の模範として戦史にのこっている。

娘を結婚させる時、母親は何を考えるだろう？　もちろん、幸せについてだろう。母は娘を見て、喜び、誇りに思う。娘の結婚は母親の命、母親の血の継承にほかならないのだから……

レニングラードっ子ワレンチナ・フェドシク＝カルプシキナは、娘の晴れの結婚式の時、人生のページを繰る

ように、自分の若かりし日々を思い出していた。

戦争はワレンチナから子供時代を奪った。カルプシキン一家は恐ろしい残酷な目にあった。一家のアルバムを見るとそれがよく分かる。戦前の最後の写真。中央にいるのが父親。まだ40歳にもなっていない。その隣には母と3人の娘たち。大きな方はワレンチナとリジア、14歳と13歳。父親のひざに腰かけているのは3歳のレーロチカ。家中のアイドルだった。

「私とリジアにとってレーロチカは生きたお人形でした──頰を真っ赤にした、丈夫で陽気なお人形でした。ネバ河岸の労働者のまちに私たちは住んでいました。住所表記も右岸、一八二番館。現在は甥が家族と一緒に住んでいます。

父は戦争になるまでは電気仕上げ工として働いていました。母は家を切り盛りしていました。家族の生活は、私が覚えている限りでは、父が働いていた第5熱併給発電所と結びついていたようです。母は厳しい人で、父も私たちも家の中で一番偉いのはお母さんだと思っていました。家の中がきちんと片付いているのが好きで、ぼんやり座っていることなどなく、私たちにも家の仕事をさせました。縫い物、洗濯。祝日にはとびきりおいしいピローグが焼かれました。キャベツのピローグや、肉入りピローグ、リンゴのピローグ……

父は私たちにはとても甘くて、暇があれば娘たちにつき合い、一緒に本を読み、学校の勉強も見てくれました。日曜日ごとに動物園や遊園地に連れて行ってもくれました。

突然すべてが崩壊しました。ラジオが戦争！だと知らせました。私たちはまだ何も分からなかったのですが、母は泣き出しました。

日曜日だったのに父はすぐに職場に出かけました。戦争が始まってから10日目に父は義勇軍の機関銃・砲兵大隊に志願しました。7月18日、軍の新聞〝レニングラードを守るために〟に父の写真が掲載されました。

この新聞を父は私たちに送ってよこしました。最後の手紙は一九四一年8月18日に届きました。それは私の一番大切な宝物としてとってあります。私たちはみんなこの手紙を暗記しています──〝私の愛しい者たちよ、みんなにキスを送る。君たちが孤児になってしまうのを恐れる。激戦の中、敵弾が私を倒さないよう、祈ってくれ。君たちのために生きねば、私のかわいい子どもたちよ。生きてくれ君たち、かけがえのない私の家族……〟

8月の末、ある戦闘で父は戦死し、ネバ河岸のわが家には手紙が来なくなりました。一九七七年の最期の時まで母は憂いと期待の目で郵便受けを見て



「お父さん、あなたの孫が巣立って行きますよ！　あなたの血はつづいていますよ！」──戦死した兵士の娘ワレンチナは今、娘を嫁がせようとしている。

いました。まだ奇跡に望みをつないでいたのです。戦争が終ってから私は妹と一緒に義勇軍部隊が戦った場所と同胞戦士の墓を見つけました。私たちの父もここに眠っているのかも知れない。ちょくちょく墓に行き、オベリスクに花を供えて来ます。

一九四一年、父を亡くした一家は封鎖下のレニングラードに残されました。母は働き出しました。手に職がなかったのですが、父が働いていた発電所の所長さんが家には3人の子どもがいることを知っていて、労働者食堂の掃除婦の職につかせてくれました。子ども3人が家に残り、ペチカをたき、ありあわせの材料でスープを作りました。砲撃がだんだん激しくなりました。最初私たちは避難所に逃げたのですが、そのうち慣れてしまい、家の中にとどまっているようになりました。

飢えがファシストの恐ろしい同盟者になりました。それは逃れることの出来ない敵でした。かわいそうなレーロチカは見るまに衰えていきました。もう歩き回ることも出来ず、布きれと毛布にくるまれて静かに寝ていました。

母は仕事をしていたのでパン二五〇g、私たちは一二五gの配給を受けていました。そのパンを母はいつも均等に分け、レーロチカは、〝私は少しでいいの、小さいんだから〟と言い、やせた指でテーブルからパンのかけらを拾い集めていました……

労働者食堂で調理用の大なべを洗うのも母の仕事でした。時が時でしたから、なべの中味はなめるようにきれいになっているのが普通でしたが、時にはカーシャ（おかゆ）の粒がおなべにへばりついていることがあり、そんな時母は、なべをすすいで、その水を私たちのために持ち帰ったのです。まだ、おかゆの粒がいくつか浮いていましたから。いつでしたか母が凍ったタマネギを持って来てくれたことがありました。戦争前に食べたリンゴよりも甘かったように思います……寒い冬でした。砲弾にさらされて窓ガラスは吹きとんでいました。枕で窓をふさいでおいたのですが、朝になるとやかんの水が凍ってしまうほどの厳しい寒さがつづきました。

冷たい吹雪の一九四二年2月28日を覚えています。窓の外は吹雪と風。



ワレンチナとリジアの孫たちはポベーダ（勝利）広場にあるレニングラード防衛者モニュメントの記念館をよく訪れる。

レーロチカはもう歩けなくなってしまい、衰弱しきって食物も受けつけなくなっていました。母はパンを切り、その上に砂糖をふりかけ、レーロチカに与えました。レーロチカは力をふりしぼってパンを食いちぎり、胃の強い痛みに涙を流しました。〝おなかが痛いよ、おなかが痛いよ〟──これが最後の言葉でした。その数分後レーロチカ



ワレンチナと妹のリジアは四つの言語で"平和"と書いたプラカードを持って反戦集会に参加した。

は息を引きとりました。

私たちは泣きながら妹が食べ残したパンを眺めました。"レーロチカの思い出にこのパンはとっておきましょうね"——母が言いました。今になって思うと、あの当時こういう行為をするにはどれほど強い精神力が必要だったことでしょう。飢え死にしそうになりながら、死者の形見にパンを残しておくなんて……」ワレンチナは話を終えた。

あの封鎖下の冬はたくさんの命を奪って行った。ピスカリョフの墓地だけでも砲火、飢え、病気で死んだ五〇万人以上のレニングラード市民が眠っている。

戦後、レニングラード市では、結婚式当日、花嫁花婿が感謝と追悼のシンボルとして戦死者の墓に花を供えるという習慣が生まれた。ワレンチナ・カルプシキナの娘イリーナとその夫アナトリーも、晴れの結婚式の日、英雄的なレニングラード防衛戦のモニュメントにやって来た。二人は彫刻コンポジション"ブロカーダ"(封鎖)の台に花を供えた。イリーナにとってこれはただ単にブロンズの厳かなモニュメントではない。家族の生々しい思い出なのだ。母親の両手に抱かれる死んだ女の子は小さなレーロチカの思い出だ。あの、レーロチカが食べ残したひときれのパンはカルプシキン家におよそ40年間も保存されていた。一九四二年2月28日に焼かれた封鎖下のパンは世界のどの博物館にもないユニークな展示品だ。イリーナはこのパンを母校の職業技術学校の博物館に寄贈するよう母に懇願した。この博物館は、自身も封鎖下のレニングラードで生きのびたユーリー・ニキーチン副校長と一緒に在校生が創設したものだ。博物館の陳列台には戦争中の苦難の時にすべてのレニングラード市民とともにレニングラードにとどまり、わがまちを死守した普通の労働者の一家、カルプシキン家に関する記録も保存されている。

勝利から40年が過ぎた。

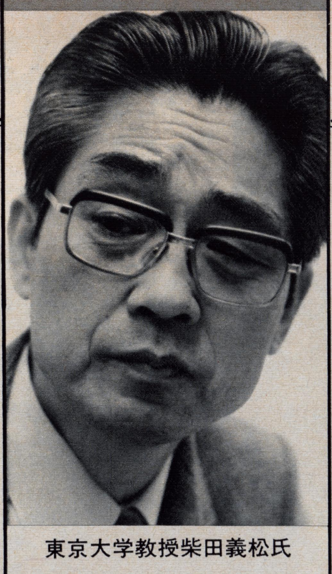
2人の姉妹、ワレンチナとリジアは以前と同じようにレニングラードに住んでいる。子どもたちは大きくなり、孫もいる。子どもたちを殺しながらファシストは未来に狙いを定めていた。果たして現在、核ミサイルは子どものゆりかごに照準を合わせてはいないだろうか? そのために昨年の9月のある雨の日、レニングラードの通りという通り、広場という広場で、戦争"ノー!"、ミサイル"ノー!"の叫びが聞こえたのではないのか。その中には戦争体験者のワレンチナとリジア、祖母と母親の口を通してしか戦争を知らないイリーナもいた。

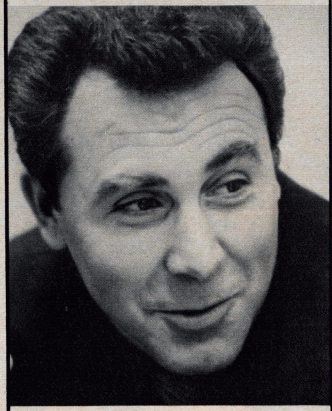
……レニングラードには新しい家々が建設された。ここには戦死した兵士カルプシキンの娘ワレンチナ、孫娘のイリーナが住んでいる。イリーナは祖父の顔を見たことはない。そのイリーナが結婚した。そのうち子どもが生まれるだろう。カルプシキン家の血は脈々と未来に続く。



レニングラード防衛の前線だったポベーダ広場に立つ彫刻コンポジション"封鎖"。新婚カップルは必ずここを訪れる。

ソ連の学校教育――伝統と改革 ②


東京大学教授柴田義松氏


本誌記者フェリクス・プラテ

（編集部から）　前号から始まったソ日共同取材「ソ連の学校教育――伝統と改革」の第2回目をお届けします。昨年の秋、編集部の依頼でソビエト教育学の著名な専門家、東京大学教育学部の柴田義松教授が訪ソし、ソ連の多くの専門家と会い、教育と学校改革の問題について話し合いました。柴田教授はモスクワのあと、フェリクス・プラテ本誌記者らと共にアルメニア、エストニア両共和国を訪れました。このシリーズは5回にわたって連載されます。編集部ではこの記事についての皆さんのご感想をお待ちしています。

ソ連の学校改革について

東京大学教授　柴田　義松

昨年の一月はじめ、ソ連共産党中央委員会は、むこう七年間、つまり次期五カ年計画終了時（一九九〇年）までに段階的に実施することを予定したかなり大規模の学校改革案を発表した。この改革案はただちに大衆討議に付され、三カ月ほどの間に実に一億二〇〇〇万人におよぶ人々が参加した集会で討議され、新聞雑誌でも大々的なキャンペーンや討論が展開された後、四月にソ連最高会議で正式決定がなされた。一億二〇〇〇万というのは、ソ連全人口の半数近くにおよび、そのうち七〇〇万人ほどが何らかの意見を述べたというのだから、この学校改革によせる国民の関心がいかに大きいかがわかる。

わが国でもちょうど同じ年に臨時教育審議会が発足し、教育改革が国民的課題となっている。最大の課題が中等教育段階にあることは両者に共通する点だが、改革の基本方向をはじめとして改革のすすめ方にはかなりの違いがありそうだ。こんどの取材旅行で気づいたそんな相違点や共通点に特に注目しながら、ソ連の学校教育が現在どのような問題をかかえ、どのように改革されようとしているかについて概略述べてみよう。

改革のソ連式すすめ方

まず、改革案の大衆討議をはじめとしてソ連における学校改革のすすめ方にはいくつかの特徴がある。一億二〇〇〇万の大衆動員というのは、みなが自発的な参加ではないとしても驚くべき数である。「学校と生活との結合」は、ソビエト教育の基本原則だということは前号でも述べたが、ソ連の学校教育は、教師の仕事ぶりから教育学者の研究活動にいたるまで、つねに一般大衆によって監視され、大衆と緊密に結びついてすべてがおこなわれている。「マスコミからずいぶんとたたかれましたよ」と、ソ連教育学アカデミー幹部会事務局長のラズモフスキー氏は、私たちに語った。教育学アカデミーは何をしているかというきびしい批判が、新聞や雑誌でたびたびおこなわれたことを述懐したのである。村や町の学校教師の活動が村人たちの話題になるのは当然のこととして、アカデミーの仕事ぶりまで大衆の監視や批判を受けるというのは、いかにもソビエト的なことだといえよう。

学校改革案の討議には、当然のことながら、学校の教師や教育学者たちも幅広く参加した。一例をあげると、ソ連邦教育省と教職員組合中央委員会共同の機関紙『教員新聞』（週三回発行）には、改革案について各界各層の個人および集団から五八一八通の意見文がよせられた。そこで四カ月にわたって特設欄が設けられ、一〇三三の論文と記事、七九の手紙が掲載されたが、意見をよせたのは、学校、幼稚園、校外教育施設の教師や校長、指導主事、教育大学等の教授、学者、芸術家、工場やコルホーズの労働者、両親などの多方面にわたっている。そして、そこには校長とか視学官の形式主義的な学校管理に対する率直な批判、教科書はどの教科についても二種類出して地区ごとに選択する制度をとるべきだという新しい提案、改革案の六歳児入学に断固反対するといった意見まで出ていて、学校の現状にどんな問題があり、ソ連の教師たちが何を考えているかがわかって、私などには大変興味深かった。こうした各方面からの意見や批判をもとにして、草案には大きな変更はなかったものの、約一〇〇件ほどの補正がおこなわれたという。

つぎにソ連の学校改革におけるもう一つの際立った特徴をあげるとすれば、事前の調査、研究、実験、試行など各種の準備作業が、わが国の場合などと比べるとはるかに綿密におこなわれている。改革草案が発表された後のことを右で述べたが、実はこの改革案自体、突然に大衆の前に現れたというものではない。私は、たまたまその前年の一九八三年九月にモスクワを訪れたとき、年来の知人であるモスクワ教育大学学長のロジオノフ氏から、大規模な教育改革の計画、準備が現在すすめられており、自分もその委員会の一つに参加しているということを知らされた。八三年六月のソ連共産党中央委総会で重要な決定がなされ、そのような準備がはじまったということを私はその時はじめて知ったのだが、ソ連教育省、教育学アカデミー等の関係者のあいだでは当時すでに各種委員会が組織されて、今回の改革の草案づくりが進行しており、そのことは新聞や雑誌等を注意深く読んでいれば、だれにもわかることだったのである。

また、こんどの学校改革の最大の眼目は、すべての青少年に中等普通教育とあわせて職業教育を完全に実施することにあると思われるが、このような改革の基本方向は、一九七七年末のソ連閣僚会議決定「普通教育学校の生徒の教授と訓育ならびに労働への準備の改善について」においてすでに口火は切られていたのであり、この方面での改革は現実にも着々と進行していたのである。労働教育・生産実習のための生産実習コンビナートとか企業付設の実習工場の設立がそれである。全国的にみると高学年生徒の約半数が現在すでにそのような施設で実習できるようになっているが、このような実習施設を完備し、労働教育の体制を確立することが、今回の改革で目指されているのである。

いま一つの例として六歳児入学についての永年にわたる実験研究をあげることができよう。七歳児入学から六歳児入学への切りかえを一九六八年から段階的に実行することが今回決められたのだが、この実験はソ連の各地で六〇年代後半からはじまっている。グルジア共和国についてみると、予備実験の後一九六九年度から大衆的規模の実験がはじめられ、千のクラスで二万五千人、全六歳児の四二％にあたる児童に対する実験教育が開始され、一九八一―八二教育年度までに二三七九学級で六歳児教育の実験的試行がおこなわれた。教育学アカデミー等の指導のもと、まず少数の学校で予備実験をおこない、その後実験校の数をしだいに増やして地区単位で先導的試行をおこなうというパターンは、六〇年代の初等教育改革の際にも見られ、ソ連では珍しくなくなっているが、教育学者、心理学者等の科学的実験に基づく専門的知見がこのような形で改革に活かされているということは注目に値する。ところが、さらに興味あることに、ソ連でも先進的な実験をおこなっている学者たちからすると、科学的実験と学校改革のテンポとの間にかなりのずれがあることに気がもめるようで、こんどの改革案討議のなかでも、たとえば教育学アカデミーのザンコフ氏たちによる初等教育改革に関する実験、あるいはエリコーニン、ダヴィドフ氏たちの教科教育改造の実験などが、いまだに十分活用されていないことに不満を表明する意見が出されている。

ソ連の学校は、とかく中央集権的で画一的な教育をおこなっているように見られ勝ちだが、このような面に目を向けると、意外に多様性をもち、さまざまの実験や先導的試行がかなり大規模に、かつ大胆におこなわれていることに驚かされる。もう一つの例をあげると、ソ連の教科書は国定制だから、各教科一種類の教科書しかないと見るのは早計である。前述の教育学アカデミー幹部会員ラズモフスキー氏によれば、氏は物理教育の専門家で、『学校の物理』の編集長を永年務めてきている人だが、物理教科書の場合、国定教科書のほかに実験的に使用中のものが五、六冊あり、それぞれ相当の部数が発行されている。これらは「参考書」とよばれて区別されているが、体裁はほとんど同じで、部数の多いものは市販され、各地の学校で使用されているのである。

学校改革の重点――労働教育の拡充

ソ連の学校改革の最重要課題が、中等教育の質的改善、とりわけ労働教育および職業指導の改善・充実にあるということは、すでに前にも指摘した。中等教育の再編に教育改革の主眼があるのは、今日、先進諸国に共通した現象である。第二次世界大戦後、科学・技術の急速な進歩、経済・産業構造の急激な改変にともなって、中等教育はどこの国でも目ざましく発展した。ソ連では一九七〇年代の後半にはいって、ほとんどすべての青年が第八学年修了

後、何らかのタイプの後期中等教育を受ける体制がととのい、一九七七年の新憲法においてすべての青年に普通中等義務教育を保障することが定められた。しかし、中等教育の場合は、ただ進学率が上昇すればいいというものではない。青年の能力、適性、進路等の多様化に対応して教育内容をどのように編成するかが重大な問題となる。わが国の場合に特に顕著だが、進学率のあまりに急激な上昇は、教育内容の充実・改善がそれに追いつかず、パンを求めて石を与えられるようなさまざまの困難や矛盾が生じかねない。

ソ連では特に六〇年代以降、中等教育の質的改善に大きな努力が払われてきたが、現代の科学や技術の進歩に合わせて普通教育の科学的理論的水準を高めることと、ソ連の学校に固有の労働教育を強化することとの調和を図ることは、実際上なかなか困難な課題であった。今回の労働教育や職業指導強化の基本方針は、前にも述べたように六〇年代初頭にフルシチョフ首相によっておこなわれた学校改革の再現でもある。この時の改革は、その拙速主義が批判され、数年にして後退してしまったのだが、その理念とか、労働教育・生産実習の時間を飛躍的に増大させ、普通教育の期間を一年延長させたことなど、こんどの改革と似た要素が多い。しかし、このときの失敗を二度くり返すことはないだろう。その点で特に注目されるのは、学校の労働教育に協力し援助することを企業に対し義務づけた「改革方針」の中の次の条文である。

「生徒の労働への準備や労働教育の組織化に積極的に参加することは、生産集団のもっとも重要な任務である。すべての学校が後見企業をもたねばならない。後見企業が学校工作室、数校共同の工作室、生産実習コンビナート、実習工場、実習作業所、実習生産班の常設野外宿泊所、労働と休息のキャンプを各企業の構成部門としてつくることを法的に定める。後見企業は、設備、機械、材料、補充製品、学校付属農園用地を分与し、生産活動を計画・組織し、生徒に労働報酬を支払う。また後見企業は、生徒に対する教授、生産労働の組織、訓育活動の実施のため技術的創造や農業試験活動、職業指導の発展のために、指導者として専門家、労働者、コルホーズ員を派遣する」

科学技術革命が進行し、生産現場での労働内容が急激に変化しつつある現在、学校の労働教育や職業指導を充実・改善するためには、なんといってもそれなりの物質的基盤の整備や指導者の確保がまず必要である。学校だけでそれをおこなうことは到底不可能であり、企業の積極的参加・協力が求められるが、ソ連ではそれを法的に義務づけることにしたのである。

これによって、生徒は低・中学年（一～七学年）では、学校のなかの工作室や農園で簡単な手の労働、紙、布、木、金属の加工技術、電気工学などを学ぶが、八学年からは生産実習コンビナートとか企業付設の実習工場に出かけて各種の専門技術を学ぶことになる。

私たちが見学したモスクワ市第一番生産実習センター（ここはコンビナートといわずに、センターと名づけられている）についていうと、私自身はなんとなくより素朴な機械工場のようなものを頭に描いて出かけたのだが、電子計算機（コンピューター）の最新技術を学ぶ実習場であった。コンピューターの原理や機構を教え、それを利用するプログラミングの知識や技能の修得を主な目的として一〇年前に設立されたもので、現在十二の学校から一二〇〇人の生徒が実習にきている。コンピューター操作のほか電子工学、電気工学、タイプライティングなど七つの職種が用意され、教師一六名、助手一〇名、そのうちエンジニアは企業からの派遣で、給料も企業が負担しているということであった。

教育学アカデミーの労働教育・職業指導研究所で聞いた話では、現在、このように企業の協力で設立された生産実習コンビナートで学ぶ生徒の数は大都市では九〇%に達する。現在はふつう九～十学年の生徒が、最初三、四カ月、数種の職種を経験した後、一年半にわたって一つの職業技術の教育を受ける。なかには技能検定試験を受けて、六等級のうち三等級までの技能資格を取得するものもいるという。

ここで注意を要するのは、このような専門的技術教育が、職業技術学校だけでなく、普通教育学校の生徒に対してもおこなわれようとしていることである。そこで一つの疑問が生じる。マルクスやレーニンの考えた「総合技術教育」は、一つの専門的技術を訓練する職業教育とは対立するものであり、早期の専門化にかれらは反対していたのではなかったかということである。普通教育の段階ではなるべく多方面にわたって現代生産の基礎となる一般的技術を教え、そのなかで生徒の能力・適性を見定めるとともに、広範囲にわたる職業に柔軟に適応できる能力を育てるというのが、総合技術教育の理念であるはずだ。労働教育・職業指導研究所の研究者たちの話では、総合技術教育と職業教育とを対立的にとらえていたのは、ソ連では五〇年代までのことで、六〇年代以降、現在のように社会的有用―生産労働との結合に力が入れられるようになったということだ。このような考え方の変更ないし発展は、私にとっては意外であり、ソ連の総合技術教育の実際をより深く研究することの必要を感じさせられた。

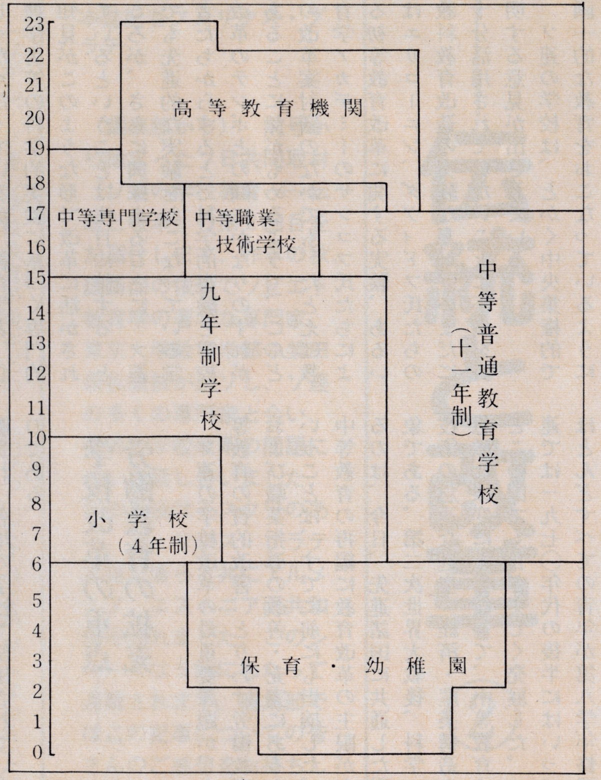
新教育制度では、九学年を終わったところで生徒は三つのタイプの学校に分かれ、中等普通教育学校（十、十一学年）、中等職業技術学校、中等専門学校のいずれかで中等普通教育と職業教育とをあわせ受けることになる。現在のところ三つのタイプの学校への進学は、ほぼ六・二・二の割合だが、改革案では特に中等職業技術学校の内容を改善し、入学生徒数を二倍に増やすという計画が立てられている。これは、わが国でも問題となりながら、なかなかうまくいかない高等学校の多様化に対応するものだが、はたしてこの計画通りに職業技術学校が発展していくものかどうか、普通教育学校における職業教育の成否とともに、その動向は大いに注目されるところである。

さて、このほかの改革方針について述べる余裕があまりなくなったが、特に二つの具体的方策に注目しておこう。

第一に、教授―訓育過程の質的向上のため、教育課程や教科書の全面改訂、コンピューターの利用など教材・教具の改善のほか、学級の生徒数を減らし、一～九学年では三〇名以下、十～十一学年では二五名以下とすることが定められた。これは、それぞれ現在よりも学級定員を十名減らすことを意味し、それだけ教員数を増やすことになるが、思いきった改善策といえよう。実験・実習および外国語の授業のときはこの学級がさらに半分に分けられる。わが国の中等学校との大きな相違点がまずここにあることに注意しておきたい。

第二に、教師の資質向上をはかるため教師教育の質ならびに教員待遇の改善のための方策がいくつか予定されている。すなわち、将来、教員はすべて高等教育修了者とするための条件づくりをはじめるとともに、教育大学の修業年限を四年から五年にあらためる。教師再教育の機会を原則として四、五年に一回設ける。教師の給料を平均三〇～三五%引きあげるのをはじめ、教師の労働や生活諸条件の改善をはかり、すぐれた教師の功績に対する精神的・物質的褒賞制度を拡大する。

このソ連の教員養成制度の実際については次回にくわしく紹介することにしよう。



ソビエトの新教育制度

現在の学校生活

本誌記者　フェリクス・プラテ

前号の二つの記事――（プラテ）記者の「過去への小旅行」と柴田教授の「ソビエト教育学との出会い」および本号の柴田教授の記事を読んで、読者の皆さんはすでにロシアで教育思想がどのように発達してきたか、ソ連の教育制度のあらまし、普通中等義務教育への移行の課題がどのように解決されたか、なぜ教育改革が必要だったのか、それはどのような意味を持つのか、についてのおよその概念を持たれたことと思う。

ここでは私は今日のソ連の学校について読者の皆さんにお話ししよう。

教育にかかる費用

ソ連ではあらゆる種類の教育は無料である。"あらゆる種類"と言う場合、われわれはふつう10年制普通中等学校、各種の全寮制学校、技能労働者を養成する職業技術学校、中等専門学校（テフニクムおよび中級の働き手を養成する学校）、ハイレベルの専門家を養成する総合大学、単科大学を指す。これらの学校はすべて無料で、そこで学ぶ学生・生徒も、その親も、教育費をどんな形ででも払う必要はない。

そのほか、職業技術学校と全寮制の特別学校では生徒に支給する各シーズンの衣服と履物、毎日の食事、部屋代をはじめ、すべてを国家が負担する。

中等学校の生徒には教科書も無償で提供される。すべての学生・生徒はスポーツ施設・用具、サークル活動に必要な設備を無料で利用することができる。

さらに、中等専門学校の生徒と大学生は成績がよければ毎月奨学金が支給され、しかもそれは国家に返済する必要はない。

これらすべてを合計すれば、国家は教育に対して膨大な費用を支出しており、その費用は年ごとに増えている。たとえば、戦前の一九四〇年には国家の歳出一七四億ルーブルのうち教育費

（50ページへ続く）

職業技術学校の町



上右　この町の新しい職業技術学校の一つ



上左　ベテラン指導員のコーチでパワーショベルの運転実習

リトワ共和国（バルト海沿岸）の工業都市カウナスの外れに変わった町がある。面積80haのこの町には職業技術学校が10校集まっていて、共和国の各地から来た約八〇〇〇人の若者たちが学んでいる。若者たちはこの町で専門技能を習得するとともに、中等教育修了証書をもらう。

職業技術学校には中等学校の8年生までの課程（不完全中等教育）を修了した15歳の生徒たちが入学してくる。生徒たちはここで3年間、ソ連のすべての教育施設と同じように無料で、実にさまざまな専門技能（旋盤工、仕上げ工、



陶工をめざす



裁断の授業

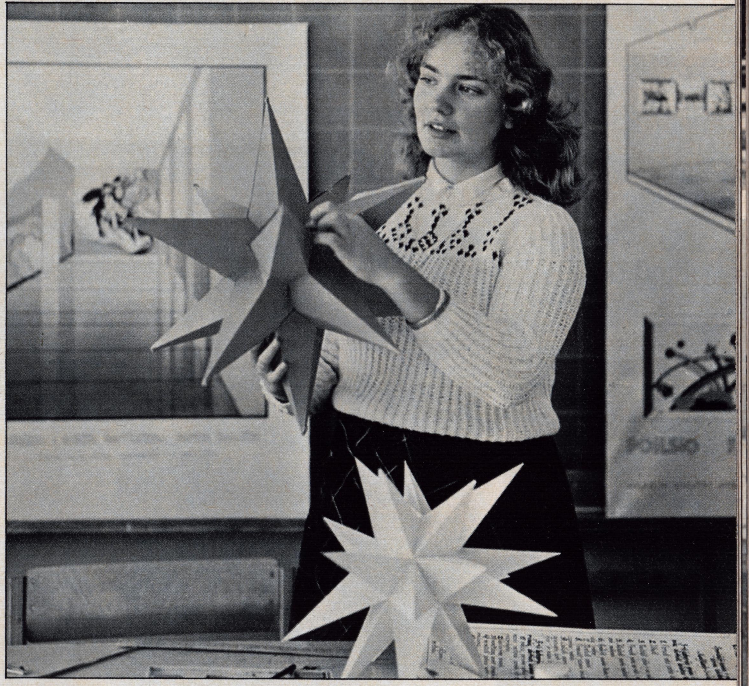


建設現場での実習▶

電気修理工、組立工、ひな型製作工、指物師、デザイナー、裁断師、宝石細工師、その他の職種）を身に付ける。ソ連全体では七五〇〇校以上の職業技術学校があり、生徒数は四〇〇万人、教えている専門技能は約一五〇〇種類に及ぶ。

　さて、カウナスに職業技術学校の町を作ろうという考えが生まれたのは偶然ではない。カウナスにはもともと職業技術学校が足りなかった。結局、それぞれの学校の建物を空いている土地にばらばらに建てるよりも、職業技術学校を集めた町を作った方が合理的だということになった。この方式は社会的、経済的に大きな効果を生んだ。この町には大きな寄宿舎が2棟（男子用と女子用）、大きなスポーツセンターと文化センターが一つずつ建てられた。この結果、これらの施設を各校ごとに作る必要はなくなったし、すべての職業技術学校の生徒たちが設備のよい寄宿舎に住み、スポーツをしたり、余暇を有意義に過ごせるようになった。

室内装飾を学ぶ生徒



作品の仕上がりを見る





陶芸クラスのデッサンの授業

▼まず機械の仕組みに慣れることが肝心



（45ページから）

は二〇億ルーブルだったが、一九六五年には一四〇億ルーブル、一九七五年には二六〇億ルーブル、一九八〇年には約三〇〇億ルーブルに達した（1ルーブルは現在約三〇〇円）。そのさい、これらの金額の中には師範学校と大学での教員養成のために国家が支払っている費用は含まれていないことを考慮する必要がある。

いくつかの数字を挙げよう。

一九八三―八四学年度のソ連全体の学習者数は一億六一〇〇万人で、そのうちの四四五〇万人が普通教育学校の生徒、四一〇〇万人がさまざまな職種の技能労働者を養成する職業技術学校の生徒、四五〇万人が中等専門学校の生徒、五三〇〇万人が大学生で、残りの四七七〇万人は企業、省庁、機関、コルホーズで新しい職業を身につけたり技能資格を高めたり、その他の勉強に取り組んだ。技能資格向上、新職種習得のこれらすべての形態も完全に無料である。

無料というのは学ぶ人にとってであって、国家にとってではない。

私と柴田教授がソ連教育省を訪れてキーラ・アガフォノワ学校総局次長と話をしたとき、彼女は次のような数字を引用した。

普通教育学校の生徒、職業技術学校（または中等専門学校）の生徒、大学生に対する国家の支出は、1人あたり年間それぞれ二〇〇、六〇〇、一〇〇〇ルーブルである。これに学生・生徒数を掛ければどのくらいになるか、読者の皆さんに計算していただきたい。

だが、以上述べてきたことのほかに、国民教育体系には就学前児童施設、すなわち保育所と幼稚園が含まれる（保育所は1―3歳児、幼稚園は3―7歳児）。学校とちがって保育所と幼稚園は義務ではなく、入所・入園はその地域の収容力と親の意思にかかっている。ソ連教育省の資料によれば、都市では子どもの約70％、農村では約40％、合計一六〇〇万人が保育所または幼稚園に通っている。これは言わば、必ずしもすべての親が、祖母や子守り、年長の兄弟姉妹よりも保育所や幼稚園の方がいいと考えているわけではないからであり、第二に、国家がいまのところまだ広大な国内全域にわたってすべての家族に十分なだけの就学前児童施設を保障できていないからである。保育所および幼稚園の収容員数の増加ぶりは目をみはるものがあるが（一九五九年のそれは三五〇万人分だったが、一九八四年は一三万二〇〇〇ヵ所、一六〇〇万人分）、現在でも希望者の一部は順番待ちの状態である。

原因は単純だ。わが国には営利目的の幼稚園や保育所がなく、親が費用の全額を負担しなければならないような就学前施設がないからである。わが国ではどの保育所や幼稚園も費用の4/5は国家が負担しており、それらは都市や個々の企業の資金で建設される。国家が負担する費用は児童1人あたり年間、保育所が六〇〇ルーブル以上、幼稚園が五〇〇ルーブル以上である。親が負担しなければならない費用がほとんど取るに足りない程度だから、当分の間これらの施設に子どもを入れたいという希望が収容能力を上回るのは当然だろう。この問題は主として、急速に発達しつつある新興都市や工業中心地で深刻である。だがそれも当面のことで、この問題は基本的には解決可能であり、一九九〇年までには解消するだろう。

就学前児童施設に話が及んだついでに述べておくと、ソ連では普通、保育所と幼稚園は朝から夕方まで、親が仕事をしている間ずっと子どもを預かる。親は朝7時から8時までの間に子どもを連れて行き、夕方5時すぎに連れ帰る。子どもたちは保育所や幼稚園で3回食事をとり、昼食後は昼寝をする。

夜の仕事についている人や方々へ出かけるのが仕事の人のために、5日間連続して子どもを預かる幼稚園と、普通の幼稚園に月曜日の朝から金曜日の夕方まで預かってもらう特別グループがある。

若い世代の教育のためにどれだけの費用がかかるかという話題を終えるにあたって、農村地域では国家からの支出のほかにコルホーズも少なからぬ資金を教育のために支出している（就学前児童施設や学校の建設、保母や教師の賃金その他）ことをつけ加えておこう。

学校生活のあらまし

ソ連では学年度は9月1日から始まる。普通学校を例にとれば、学年度は4つの学期に分かれる。1学期は9月1日から11月1日まで。そのあと1週間の秋休みがあり、さらに2日間の国祭日——11月7日と8日の革命記念日が続く。それから年末までが2学期。そのあと1月10日まで冬休みがあり、1月11日から3月の最後の週までが3学期。そのあと1週間の春休みがあって、6月までが4学期。8年生と10年生は6月に試験があるが、その他の学年の生徒は6月のうちから夏休みになる。夏休みは6月、7月、8月と3カ月つづく。

わが国の学校はすべて国立で、私立の学校はない。男女共学で、労働の授業と上級生になって教師が性について話をするとき以外は、すべての授業を男女が一緒に受ける。生徒は制服で通学しなければならない。男子はダークブルーのスーツに白または色もののワイシャツ、女子は大きなひだのあるダークブルーのスカートに同じ色と生地のチョッキである。

学校での授業はふつう朝の8時半に始まる。授業はそれぞれ45分間で、10分ずつの休憩時間がある。3時限のあとだけ20分の大休憩時間があり、この間に生徒は食堂で軽い食事をとる。

ソ連では7歳で学校に入る（一九八四年4月に採択された「普通教育学校と職業学校の改革の基本方向」は6歳就学に漸次移行することを定めている）。低学年（1年生から4年生まで）は1日4時限、たまに5時限の日があり、中学年（5年生から8年生まで）は4―6時限、高学年（9年生と10年生）は5―6時限で、週6日制。日曜日が休みである。低中学年ではふつう、日曜日に宿題は出ない。

成績は5段階評価だが、″1″はつかない。というのは、″2″がすでに落第点だからだ。教師は授業ごとに生徒を評価し、学期末と学年末に目標達成度の総合的な平均点をつける。

高学年も含めて、どの学年でも教師と生徒の関係は親密である。ふつう、教師は授業時間の一部を新しく学ぶことの説明に充て、残りの時間を問答に充てて、生徒がそれまでのテーマをどれだけマスターしたかを確認する。授業が講義の形をとるのはごくまれで、しかも高学年だけである。授業はすべて必修で、高学年でも選択科目はない。

教科書は主要科目に関しては全国一律である。わが国は多民族国家なので、授業は52の民族語で行われている。当然のことながら、一律の教科書はこれらの民族語に訳されている。それに加えて、それぞれの連邦構成共和国には、その共和国の教育省が承認した独自の教科書があり、これが自民族の言語、文学、歴史、地理についての知識を深めてくれる。

成績は二つの文書に記録される。教師はいわゆるクラス日誌を持っており、それぞれの教師は担当の科目について授業のテーマを書き込み、それぞれの生徒の姓に対して問答、観察、実験の評価を記入する。生徒も各自の日誌を持っており、そこに宿題を書き込み、教師もそこへ担当科目の評価、意見を書き込む。親は毎週末その日誌に署名し、子どもの成績に関心を持っていること、学校での子どもの様子をつかんでいることを確認する。

どの学校にもピオネール組織（9歳から14歳までの男女が加盟できる）とコムソモール組織（14歳から28歳までの男女が加盟できる）があり、該当する年齢の生徒の圧倒的多数を結集している。すべてのクラスに集団によって選ばれた長、クラス・ピオネール（コムソモール）組織の指導者がいる。クラス生活、成績、規律、集団行事のすべての問題はクラス総会で審議され、決定される。同様の問題も全校規模になると、選挙で選ばれた7年生から10年生までの代表で構成される生徒委員会が取り組む。

学校での子どもたちの教育に対する責任は、当然のことながら、主として教師たちにある。だがそれにもかかわらず、わが国では親たちの役割と学校生活への親たちの参加が軽視されたことはいちどもない。実際が示しているように、教育の効果は家庭、学校、社会の一丸となった努力と生徒たちに対する要求の一致に大きく左右されるからである。

学校には自由意思にもとづく、選挙で選ばれた父母委員会がある。親たちは学校を通じてサークル活動その他の課外活動に参加する。親たちはソ連にある職業について話し合ったり説明するために生徒たちと会合を持ち、高学年の生徒たちが進路を選択するさいの参考にする。親たちはしばしば、子どもたちのためにさまざまな見学旅行を組織するのを手伝う。見学旅行は文化・レクリエーション的なもの、博物館や展覧会見学、自然探索に限らず、何よりもまず生産現場、それぞれの工場、サービス分野、学術機関、コルホーズ、設計研究所などでの仕事の特徴を知るためのものである。

各クラスの担任（何らかの科目を担当する教師でもあり、学校の管理部からそのクラスに対して責任を負うことを委託されており、その責務に対する手当をもらっている）は年間にわたって定期的に父母総会を開催し、生徒に対して要求や希望があるときは、その生徒の親にきてもらうか、自分の方からその生徒の家へ出向く。自分の子どもの教育に参加することを回避したり、この義務（ソ連憲法第六六条——ソ連邦の市民は子どもの教育に配慮し、社会的有用労働ができるように子どもを養育し、社会主義社会の成員としてふさわしい人間に育てる義務を負う…）を遂行しない親に働きかけるために、学校がその生徒の父親なり母親なりが働く職場の労働集団の援助に頼る場合も少なくない。

学校や市町村の国民教育課の指導者はときどき、親のための特別講座を開き、そこで教育学のあれこれの状況を説明し、子どもたちの行状の年齢別による具体的な特徴その他に注意を向けさせる。

ついでながら、可能性に応じて親たちをいわゆる″学童保育″グループで子ども（自分の子どもだけでなく、同級生や仲間も）を社会的に教育する活動に参加させようという傾向もある。

放課後、校舎内で宿題をやらせたり遊びや休息を組織しようというこの構想は、いくつかの狙いを持っている。宿題をするのを教授法的、教育学的に手伝ってやることのほかに、サークル活動を活発にし、内容のある、子どもたちにとって面白い遊びや休息を組織するこのような形態は、教師とそれを援助する親たちが子どもたちの興味や傾向をよりよく知り、子どもたちとのさらに緊密な関係をつくり出し、有益な仕事に取り組むことを可能にする。それればかりでなく、親が職場から帰宅するまで、子どもたちは大人の保護下にある。これは働く親の多くが望んでいることでもある。

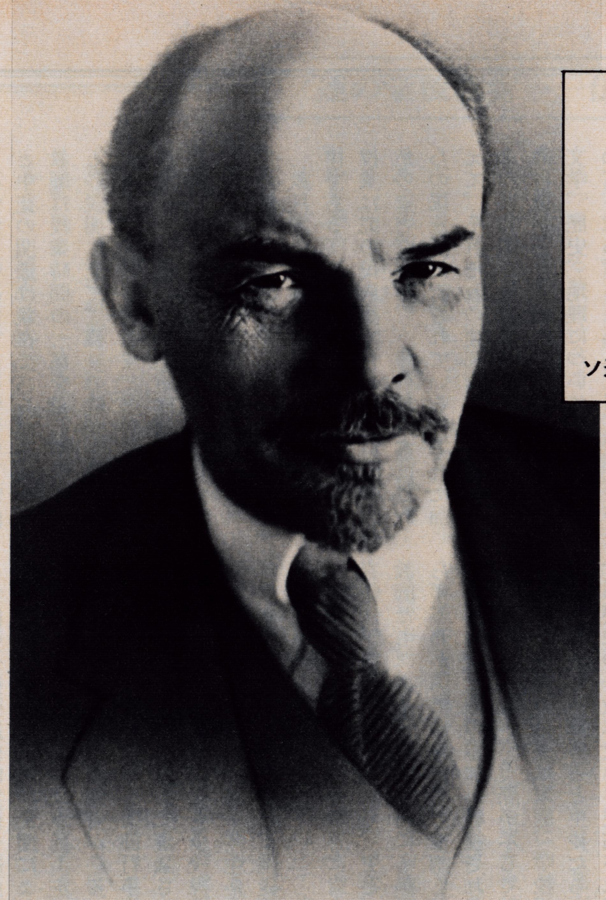
もちろん、すべての子どもがこのような保護をありがたいと感じているとはかぎらない。だが、工夫と熱意をもって子どもたちの勉強、遊び、休息の組織に取り組んでいる学校、子どもたちにとって家庭にいるのと同じような温かい雰囲気をつくり出そうと努力している学校では、学童保育は十分に目的を達成している。

お知らせ　次号は大祖国戦争勝利40周年特集号のため、このシリーズは休載します。

ソ連共産党第27回大会へ向けて

レーニン主義と現代（下）

ソ連共産党中央委員会付属
社会科学アカデミー教授　ワジム・ザグラジン



ウラジーミル・イリイチ・レーニン（1918年撮影）

なぜ歴史はレーニンの言ったとおりに発展しているのか？

なぜレーニンの思想力は力強く、納得の行くかたちで具現したのだろうか？　なぜ歴史はレーニンの言ったとおりに発展しているのか？

レーニン主義の敵は、この偉大な学説は一種の〝新しい宗教〟であり、レーニンはその〝予言者〟であり、彼の思想の流れを汲む者たちは一種の〝教会〟であると、繰り返し宣言してきた。しかし、もしそのとおりだったら、レーニン主義は現実のものになりはしなかったはずだ。恐らく世界はそれなりの発展を遂げただろうが、レーニンが発見し予想したような歩みはしなかったはずだ。

レーニン主義の力は、それが、現代の現実を深く研究し、現段階の人類史が提起した苦しい、切迫した問題に解答を与えた科学的な理論だという点にある。レーニンの思想は社会の発展の客観的な歩みと要請を正確に反映したものである。

英国の著名な物理学者ジョン・バナールはレーニンのことを次のように書いたが、まったくそのとおりだ。

「レーニンはその知力にあふれた考え方から見ても、視野の広さから見ても、当時の大学者のなかでも最高の学者だった。ほかの大学者が現実のどれか一面しか見ないところをレーニンはすべての面をちゃんと見ていた。レーニンは、現実をなにか動かないものではなくて、動いているものと見ていた。彼はこの動き方を決定する力を理解し、その力をコントロールすることを学びとったのである」

レーニン主義が科学的な裏付けをもち、円熟した方法論をもっていたからこそ、レーニンは社会が発展する進み方を予測できたのであった。そしてこの論文の前半（前号）で述べたレーニン主義の思想が具体化された姿は、偉大な革命の科学としてのレーニン主義の本当の価値を一番よく証拠立てるものなのである。

マルクス主義者、レーニン主義者がこの事実を指摘して、20世紀の歴史はレーニンの言ったとおりに発展していると言うと、彼らの思想敵はよく次のように反論する。どうも、君たちは、すべての出来事の歩みが運命的に避けがたいものであり、機会的にあらかじめ定められているという無制限な決定論の信奉者のようだと。またこうも言っている――こういう問題の出し方をすれば、マルクス・レーニン主義は社会の発展過程を弁証法的に取り扱うというその独自な方法を捨てることになると。こういったブルジョア思想の代弁者と多分に共通の考えをもっている右翼社会民主主義者も、右翼日和見主義者と声を合わせて、レーニン主義者は教条主義であり、すべての出来事をあらかじめつくった図式にはめこもうとしていると積極的に非難している。

けれども、そんな言い分はすべて事実と違う。レーニン主義が予言とか、どんな出来事にも通用する処方箋とかのかきあつめであったことは一度もない。マルクス・レーニン主義は、生きた、発展しつつある教義である。その一番大きな長所は、誰にもたよらず自主的に考えることを教えるところにあり、発生しつつあるすべての新しい状況を頭におき、しかも革命的な階級的諸原則をあくまでも堅持して、弾力性に富んだ政策を打ち出す道を示しているところにあるのだ。

マルクス・レーニン主義の創始者たちがまとめ上げた最も重要な科学的予測が歴史の歩みに裏付けられていることは、歴史的事実である。なるほど、先にあげた者以外の、西と東の、レーニン主義の敵と批判者は、マルクス主義の創始者たちの予測は必ずしもその全部が完全に事実で裏付けられたわけではないと言って、これにも反論している。たとえば、マルクスとエンゲルスは当初、社会主義革命が、最も発達した資本主義国で始まると予測したが、この予測は事実で裏付けられなかった。また、植民地は本国の革命のあとに解放されるというテーゼも、そのとおりにはならなかった。10月革命の勝利の直後欧州で社会主義革命が勝利するという期待も、やはりはずれた――こう反論するのである。

しかしながら、それはそのとおりではあるが、マルクスもエンゲルスもレーニンも、個々の国が発展するテンポとか、人類が資本主義から社会主義へ進む形態や時期といった問題に、決定的な意義を与えたことは一度もなかったという事実も、そのさい思い起こす必要がある。原則的な、根本的な性格をもっていたのは、社会主義への移行が歴史的に不可避であること、革命過程が国際的性格のものであること、革命の主な推進力、主導者が全世界の労働者階級であることなどについての三人の判断だった。マルクス・エンゲルス・レーニンは再三にわたって公然と自分の考えを修正したり、情勢の変化に応じて自分の結論をより正確にしたりして、そうしたやり方を後に続く者たちに教えた。

「そうだ、マルクスとエンゲルスは、革命の近さを定める点で、革命の勝利に希望をかける点で、多くの誤りをおかし、またしばしば誤りをおかした」

――こう書いたレーニンは一八四八年のドイツ革命と一八七一年のパリ・コムミューンをあげて、次のように強調した。「……しかし、全世界のプロレタリアートを、ちっぽけな、日常の、些末な任務の水準以上にたかめようとし、またたかめた革命思想の巨人たちの、このような誤りは、革命的虚栄のむなしさや、革命的闘争の無益さをうたい、さけび、かたっている官許自由主義の低俗な知恵よりも、千倍もけだかく、壮大で、歴史的に価値多く、真実である」（レーニン全集、大月書店版、第12巻、三八〇―三八一ページ）。

革命による人類の解放が避けられないという主な根本的予測が、現実によって見事に確認された限り、マルクス・レーニン主義の科学的正しさは、もっとも説得力のあるかたちで証明されたわけである。この学説は、ユートピアでも、思弁的なでっちあげでも、また善意の希望でもなくて、この学説の創始者たちが自ら言ったように、「起こりつつある階級闘争の実際の関係を、一般的なかたちで表現したものであり、われわれの眼前で行われている歴史的動きを表現したもの」なのである。

こういうわけで、レーニン主義の深遠な科学性こそ、現代の出来事の、真の思想的基礎にレーニン主義がなりえた第一の原因なのである。第一の原因ではあるが、原因はこのほかにもある。

このように、レーニン主義が現代の発展の基礎となったのは、レーニンとその後継者たる共産主義者がマルクス主義科学の総括的結論を大衆運動とうまく結びつけたからであった。共産主義者は理論的命題と予測を実際的な行動計画に変え、この行動計画に基づいて何百万という大衆を立ち上がらせ、運動に引き込むことに成功した。共産主義者にひきいられた労働者階級、勤労大衆の運動は、社会進歩の力強い前進力となった。この前進力が、社会進歩の道をひらき、帝国主義がその途上にしかけた障害物や邪魔物を打ちこわす力となったのであった。大衆の歴史的活動の過程でマルクス・レーニン主義諸党がレーニン主義の理論的結論を具体化したことも、世界の革命的変革が成功した大きな原因となった。歴史上初めて、社会進歩の要請に応える思想が、社会進歩の動きを速めるために、意識的に実践に生かされた。現代の歴史のテンポが速まったのは、このためにほかならない。

現代の人類の生活におけるレーニン主義の役割と地位の特徴は何かというと、それは、現代の真の思想的主導者になったところにある、と言わざるをえない。

もちろん、マルクス・レーニン主義の思想が、もう世界の大半の人々のものになっていると言えば、間違いであ

ろう。たとえ社会主義的な社会関係が支配している状況下でも、マルクス・レーニン主義の思想的宝庫に人民大衆をがっちり結びつけるには、少なからぬ時間がかかる。問題は、この場合、正確に言えば、この場合でさえ、勤労者に社会主義的意識を教え込むには長い時間がかかるということなのである。ブルジョア・イデオロギーが支配している非社会主義世界で、それをやりとげるのは、なおさらむずかしい。それでも、この地球に住んでいる大衆にマルクス・レーニン主義思想がしみこんでいく過程は速やかに、抑えられない勢いで進んでいくのである。

本質的に言えば、どんな社会層がこれを意識しているかどうかにかかわりなく、人類の現代の思想・政治生活のなかで主導的な地位を占める基本的スローガンはすべて、レーニン主義者たちが掲げたものにほかならない。

そのスローガンとは、第一に、核戦争に反対し、核戦争を社会生活全般からなくしてしまおうと呼びかけたスローガンである。この考えを最初に掲げ、最も精力的に主張したのはほかならぬ共産主義者＝レーニン主義者であった。

第二のスローガンは、社会体制の異なる国々の平和共存原則である。この原則も現代では、戦争の脅威に反対する大衆の闘争で本質的に根本となるスローガンとなった。だが、平和共存という思想そのものはレーニンが掲げたものなのであり、ソ連共産党によって根気づよく、明確な目的意識をもって主張されている。

さらに次は非植民地化のスローガンであり、現代の最も恥ずべき現象である、あらゆる形態の植民地主義の最終的根絶のスローガンである。このスローガンもレーニンによって日程に取り上げられたものだ。マルクス・レーニン主義者はこのスローガンを実現させるための最も断固とした闘士になっている。

最後は、生存する権利、働く権利をはじめとする現実的な人権を擁護するスローガンである。帝国主義の宣伝は、このスローガンがレーニン主義思想に矛盾するのではないかと言っている。

このような言い分は、反共の常習的なウソである。だが、共産主義者は、搾取する"権利"、ある国がほかの国を圧迫する"権利"に反対している。失業する"権利"、飢える"権利"、大衆を抑圧する"権利"に反対している。

誰よりも共産主義者は、すべての本当の人権を擁護してきたし、現在も擁護している。

※　※　※

昔の帆船はおおまかな目印をたよりに大海原を走り回った。そうした目印はあとになって幻と分かったことが珍しくなかった。現代の高速船には別のものが必要である。つまりありとあらゆる障害物を記入した精密な航路図や、星ばかりでなく人工衛星のシグナルをたよりにして航路を決める正確な機器をもたないといけない。

いまの人類もそうだ。人類が発達する歩みはぐんと速くなった。その途上で遭遇する障害はますます大きく、恐ろしいものになって行く。今日、社会の進歩という船が乗りきらなければならない時化は、昔とは比べものにならない。そして、人類は、現代の旅客機と同じで、精密な方位指示器と、はっきり示された目標がどうしても必要だ。

今日、実にさまざまな社会勢力が、これから進む道の目標と理想や、その理想へ進む可能な方向などの問題をますます取り組むようになっているのは、決して偶然ではない。人類は、潮に乗ってあてずっぽうに針路をとると、破滅に導かれるかもしれないことを理解しているので、人類自らの将来を知りたがるのである。

だが、人類にそうした目標を与えられるイデオロギーや政治勢力は一つしかない。マルクス・レーニン主義がそれであり、マルクス・レーニン主義の思想で武装された共産主義運動がそれだ。「われわれは将来のことを、将来にとってのレーニンの意義のことを考えねばならない。ところで、将来にとってのレーニンの意義なるものは、レーニンが企てた実験――社会主義の実験――が失敗したら、現代文明も過去の多くの文明が滅びたように滅びてしまうほどのものなのだ……もしも将来がレーニンとともにあるならば、われわれすべてにとってこんな、うれしいことはない……」

英国の大作家バーナード・ショウがこう書いたのはもう以前のことだ。そのときから流れた歳月の間に、レーニンの思想と事業は現代の象徴と旗印になり、世界が発展するために最も影響力の大きな要因となった。レーニン主義によって励まされたソビエト国民はかつてあの、ドイツ・ファシスト侵略者に対する大祖国戦争（一九四一―四五年）のとき、世界文明を救ったことがすでにある。

マルクス・エンゲルス・レーニンの学説の主たる力は過去だけでなく現在から将来にわたっている。今日、レーニン主義は、核の破局から人類を救い、社会主義の潜在力をさらに強化し、世界のすべての国民に平和と繁栄を確保できるすべての勢力をさらに強化するための闘いの強力な武器になっている。

USSR EXPO 85

科学万博ソ連館コーナー

津波をどう予報するか？

物理・数学博士、ソ連科学アカデミー応用物理学研究所研究員　エフィム・ペリノフスキー

地震、海底火山の爆発、大地滑り、隕石の海中落下、海上の気象条件の急激な変化――これらはみな、津波の原因になりうる。沖合で波高が時としてわずか数cm、波長が数百kmの波が、沿岸でみるみる盛りあがってアコーデオンのようにちぢみ、波高が数十mにまで成長し、巨大な力で海岸に襲いかかる。

津波の時間は10分から一〇〇分まで、波の数は10波にも及ぶことがあるし、伝播の速度は最高時速七二〇km、波高は40mに達する。ソ連の学者が過去の津波を分析した結果、太平洋では地震が10年に1度の割で波の高さが平均8m、場所によっては20～30mの津波を引き起こすことが分かった。4mから8mまでの波高の津波は3年に1度の割で、2mから4mまでのそれは毎年起こる。自然災害の中で津波は、死者数でほぼ5番目を占めている。

ソ連では沿海地方、カムチャツカ、サハリンが地震活動の盛んな地域にある。だからここでは津波は珍しくない。

ソ連の太平洋沿岸ではこの二五〇年間に津波が60回以上記録された。ソ連の極東沿岸を襲った最近の大津波は一九八三年5月26日に日本の沿岸で発生した。これは秋田沖一〇〇kmを震源地とする強い地震（日本海中部地震、マグニチュード7・7）によって引き起こされたものである。

現在ソ連の学者は、住民に対する迅速な津波警報システムの開発と津波から海岸を守る工学的方法の作成を目標に広範な研究を行っている。ソ連では特別の津波警報局が活動している。その活動システムはつくば科学万博ソ連館の第3コーナーで見ることができる。

破壊的な津波は多くの場合海底地震によって引き起こされる。津波の発生の恐れについては地震の強さと海岸からの距離によって判断できる。海底地震についての情報は、地震波によって秒速数kmの速度で伝えられる（津波の速さよりもはるかに速い）ので、津波の接近のおよそ20～60分前に沿岸センターに届く。これにより危険な場所から住民を避難させるのに必要な措置をとることができる。

ソ連の津波警報局、日本その他の国の警報組織、国際津波情報センター（ハワイ島）の間に緊密な実務的連絡が保たれており、適時に情報を交換できるようになっている。残念ながら地震の強さだけに基づく予測はあまり正確でなく、警報の約半分は的中しない。だからどの地震が津波を起こすかという危険度の基準を明らかにする努力が払われている。このために過去の津波に関する資料が分析され、津波を起こす地震と津波を起こさない地震の地震波の特徴の量的相違を発見する試みが行われている。津波予測問題の最も確実な解決は、海岸に津波が接近するずっと前に沖合で津波を記録することにある。現在までに世界ですでに4回沖合でこのような津波の記録が得られた。そのうち一九八〇年2月23日と一九八四年3月24日の根室半島沖の津波に関する二つの記録は、ソ連の研究者が特に開発した水中センサーで得られた。現在ソ連では、沖合での地震と津波の総合的な記録と分析を含む単一自動津波警報システムが開発中である。このシステムが導入（およそ一九九〇年頃）されれば、住民にタイムリーに津波警報を出す問題は一層確実に解決されるだろう。

迅速な予報と並んで、長期的な予測を持つことが非常に重要だ。技師たちは沿岸施設を建設する際、波高ばかりでなく、波の衝撃力と陸地の浸水レベルにも関心を向けるからである。このためソ連の学者たちは津波の危険度別にソ連の太平洋沿岸の地区割りを行っている。

そのためには海洋の地震地帯を明らかにし、津波を生む地震の頻度を調べ、海岸までの津波の動きを計算し、歴史的資料を分析することが必要だ。いまのところ一番正確で確実なのは津波警戒区域一覧図である。津波に関する事実資料を駆使したこの種の一覧図がカムチャツカ半島の沿岸と隣接諸島用に編さんずみである。現在われわれは全般的な予測だけでなく、局地的な予測もできるようになっている。これは最も重要な住民地点を津波の危険度別に地区割りする基礎になるだろう。

われわれは正確な予測と迅速な警報によって人々の安全を保障できるだろうと考えている。

ノーボスチ通信 特派員報告

APN

米国の戦域核導入に抗議するベルギー国民

O・ポリシューク記者（ブリュッセル）

3月中旬、ベルギー国内は不安と興奮で沸き立った。政府が国民の圧倒的大多数に挑戦し、米国の中距離核ミサイルの国内配備を決めたからである。

政府の決定に世論はすぐさま反応し、平和と発展をめざす全国行動委員会や反核行動フラマン委員会その他の諸団体の呼びかけで、全国からブリュッセルへ一五万人が集まって、政府の決定に抗議した。抗議行動には米英からも平和運動家が参加し、西独からも激励のメッセージが届いた。

ロジェ広場の急造の演壇には、多くの政党、労組、国会議員、社会団体などの代表が立って政府を糾弾した。

デモ行進に参加した多くの人々は袖に喪章をつけ、家々の窓には喪章を付けた国旗が掲げられた。ベルギー国民は3月15日を国の歴史の〝暗黒の日〟と呼んでいる。横断幕やプラカードは「ベルギーにも、欧州にも新核兵器はいらない！」、「ベルギーからミサイルを撤去せよ！」、「ベルギーに民族主権を！」と訴えていた。

ベルギーの平和運動家たちはあくまでも政府の反国民的決定の撤回と米ミサイルの撤去を求めて、さまざまな行動を組むことにしており、国会選挙前の10月20日の大衆デモは大きな意義を持つだろう。

こうしてベルギー国民は、国民の安全、欧州と世界の平和、核戦争の脅威の除去を確保しようと固く決意し、団結している。

解放されたサイダで

Y・ダニルイチェフ記者（ベイルート＝サイダ）

ベイルートから海岸沿いに曲がりくねった風光明美な道路を車で1時間ほど飛ばして、われわれソ連記者団はアバリ川へ近づいてきた。この川の対岸からサイダ市の郊外が始まる。レバノン軍の検問所の前は自動車の長い行列だ。にこにこ顔の兵隊が行けという手ぶりをした。私たちはアバリ川にかかった悲しくも名高い橋を渡った。この橋はついこの間まで、イスラエル軍が占領していたレバノン領の一部と他のレバノン領を分けていた。

「イスラエル軍がベイルート＝サイダ間の沿岸沿いの道路を完全に閉鎖してしまう前のことですが」と、こんどの旅行に付き添ってきたこの土地生まれのレバノン人が思い出話を始めた。「ここで行列に並んだことが再三ありましたよ。この橋のたもとで3昼夜も過ごしてから、やっと自分の家へ戻ったこともありました」

その、ついこの間までの様子をしのばせるものは、道ばたに転がっている「止まれ。国境はすぐそば」とヘブライ語とアラビア語とフランス語で書いた掲示板だけだ。かつての〝国境線〟に倒れているその掲示板は、南レバノンの土地を奪おうとしたイスラエルの計画が挫折したことをどうしても思い出させる。

「罪のない住民に対するイスラエル占領軍の犯罪的行為は」と、南レバノンにあるレバノン共産党組織の声明はいう。「彼らが敗北し、愛国的抵抗運動に立ち向かう力のない証明である。このような犯罪的行為はシオニスト侵略者に対するわが人民の不屈の闘志を高めさせ、その闘争に火をそそいで拡大させ、サイダに続いて全レバノン領を速やかに解放させる結果をもたらすであろう」

龍をつかまえる者

S・ボロベツ記者（ロンドン）

5分もあればディーラーとかプッシャーとか呼ばれる麻薬の売人が見つかるということは、英国の大都市の密になっている。映画館の入場料より少し高い5ポンドも出せば、親指の爪に乗るぐらいの分量の白い粉が買える。粉はキャンデーのように銀紙に包んである。その銀紙を開き、下からライターの火であぶると、ヘロインが焦げて白い煙があがる、そいつを胸いっぱいに吸いこむ。こういう喫み方を〝龍をつかまえる〟というが、病みつきにならないから、一番安全なヘロインの喫み方だという説が広がっている。

とんでもない話である。この喫み方でも、ほかの喫み方と変わりなく、麻薬のとりこになってしまう。貧困、飢え、こじき、泥棒を経験しながら麻薬の常習者となり、いつの間にかまじめな生活から離れてしまう者は、ティーンエージャーに多く、20―30歳の年齢ではもっと多い。

英国のヘロイン常習者は約四万という。この数字自体小さいものではないが、それでも麻薬常習者のほんの一部にすぎない。ヘロインは値段が比較的高いこと、喫むと早く死ぬという評判があることなどが歯止めになって、それほど流行していないだけの話だ。

当局はこの社会病を純政治的方法で治そうとしている。ヘロイン常習者の居住地区は警察がいつも街頭をパトロールし、少なからぬ売人と常習者をつかまえ、昨年は全国で二万人が逮捕されたが、英国の都市の貧民街の生活状況は少しも変わらない。たとえ少しの間でもすべてを忘れ、ほかのやり方では片づかない問題から逃避させてくれる白い粉で〝龍をつかまえる者〟は跡を絶たない。

ソ連の新聞記事から

（一九八五年3月後半）

党中央委政治局の定例会議

ソ連共産党中央委政治局は定例会議で、ソ連発電・電化省の一九八六―九〇年度火力発電所設備更新・改修計画を検討した。

この計画の実現は重要な社会的・経済的意義を持つだろう。計画の実現によって国民経済や都市・労働者集落の住民に対するエネルギー供給の安定度を高め、燃料をより経済的に消費し、動力産業従業員の労働・生活条件を改善することができよう。

普通教育学校と職業学校の改革の基本方向、コンピューター技術と自動化システムの開発・生産の発展、効果的利用の国家計画に基づき、政治局は、中等学校の生徒にコンピューターの知識を身に付けさせ、教育プロセスに電子計算機を広範に導入する措置を定めた。

ソ連共産党中央委員会とソ連閣僚会議に寄せられる勤労者の諸提案に関連して、政治局は、市民の医療サービスと社会保障のいっそうの改善、また、労働者・職員の集団的な園芸・野菜栽培の振興について対策を立てるように委任した。

M・S・ゴルバチョフ同志からラウル・カストロ・キューバ共産党中央委第二書記との会談について報告があり、承認された。政治局会議での意見の交換は、話し合われたソ連・キューバ関係のすべての問題での両共産党・両国の見解の一致、ソ連共産党・ソビエト国家と社会主義キューバとの変わることのない連帯を改めて確認した。

ソ連と中華人民共和国間の貿易・経済交流のいっそうの発展の諸問題が討議された。両国間の貿易高の増大はソ中関係改善の方向でのさらに一歩前進になることが指摘された。

ソ連共産党中央委政治局会議ではわが国の国内生活と、平和的対外政策路線実施の他の若干の問題が討議され、決定が採択された。

（プラウダ紙3月29日号）

ソ連科学アカデミーの特別会議

大祖国戦争でのソ連国民の勝利の世界史的意義と社会主義祖国防衛への科学者の積極的参加を記念し3月18日、ソ連科学アカデミー総会特別会議が開催された。

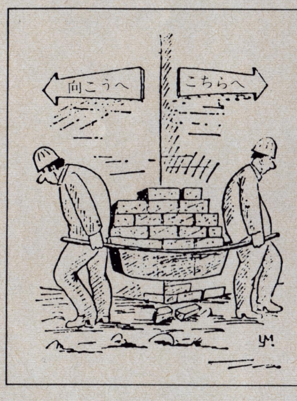
A・P・アレクサンドロフ・ソ連科学アカデミー総裁が開会の辞を述べた。その中で総裁は、ソビエトの科学者は国の防衛力の強化、軍隊に対する兵器器材の供給、新兵器の開発とその大量生産に大きく貢献し、ソ連の軍事力をファシスト・ドイツ軍より優位に立たせたと述べ、今日、ソビエト科学の発達水準は防衛力に直接反映しており、帝国主義勢力の軍事的優位を許すことはない、と強調した。

次いで、P・A・ジリン・ソ連国防省軍事史研究所長（ソ連科学アカデミー準会員）が講演した。

総会ではファシズムに対する勝利40周年に関連して世界の科学者への次のようなアピールが採択された――

人類の未来に対してわれわれ科学者は特別な責任を負っている。科学者は、原子力研究が新型の熱核兵器づくりにではなく、原子の平和的利用、エネルギー資源の増大に向けられ、宇宙技術が〝スターウォーズ〟にではなく、平和と進歩の事業に役立てられるよう積極的な働きかけを行う使命を持つ。ショービニズム、諸国民間の不信の扇動に断固反対し、国際協力の精神を育むことが全世界のすべての科学者の高まいな課題である。

（プラウダ紙3月19日号）



（A・ウミャロフ作、トルード紙3月27日号）

カフカズの新スキー場

大カフカズ山脈中央に位置する海抜二二〇〇mのグダウリ（グルジア共和国）は、町始まって以来の大勢の人出でにぎわった。初めて開かれたアルペンスキーの国際競技会にオーストリアとポーランドの選手、ソ連ナショナルチーム、グルジア・ナショナルチームが参加し、このにぎわいとなったもの。

グダウリにスキー場がお目見得したのはつい最近だが、早くも大変評判がいい。ここには国際的な基準から見ても理想的な地形のゲレンデ（面積五八〇ha）がある。冬季、好天に恵まれるグダウリのスキー場は、近い将来、大きな競技会の開催地になる可能性がある。

もう一つつけ加えると、世界中で山脈の南斜面にあるスキー場はここグダウリだけだ。

（イズベスチヤ紙3月17日号）

ラトビアの人気作曲家
ライモンド・パウルス

本誌記者 ゲンナジー・ゴロフコ カメラ A・マカロフ





右上3枚 作曲家ライモンド・パウルス



モスクワのコンサートホール〝ロシア〟で開かれたライモンド・パウルスの作品演奏会

パウルスが長年指導しているリガ少年合唱団



ホールの明かりがゆっくり消えて行く。静まり返った場内に古時計が人気メロディーのリズムを刻む。一九八四年12月、ソ連の作曲家ライモンド・パウルスの作品演奏会はこうして、モスクワ最大のコンサートホール〝ロシア〟で始まった。

ライモンド・パウルスは45歳。すでに30年にわたって創作活動にたずさわっている。舞台と映画のための音楽をそれぞれ20ずつ、いくつもの交響曲、室内楽、ミュージカル、オペレッタ、三〇〇以上の歌曲を手がけている。出したレコードの枚数では多分、この10年間、ジャズとポピュラー・ミュージックの分野でトップの座にある。

パウルスはバルト海沿岸のラトビア共和国の首都リガ近郊で労働者の家庭に生まれた。

一九五〇年代はソ連でジャズが大流行した時代で、音楽の才能ある若者パウルスもその洗礼を受けた。デューク・エリントン、グレン・ミラー、ジョージ・ガーシュインのレコードを聴きながら、パウルスはそのメロディーをピアノでなぞって、即興の演奏を試みた。間もなくパウルスはリガで、ジャズの名ピアニストとして有名になった。

リガ音楽院の作曲科を卒業したパウルスの創作活動は多方面にわたるが、最も積極的な実り多い分野は軽音楽である。パウルスは言う――「現代歌曲は新しい思想、感情、気分、形象を持つようになった。これは最も大衆的な芸術であり、こんにち特別の注目を必要としている。多くの歌は音楽的にいっそう深く、複雑になった。さらに、演奏と歌の普及の技術的手段が多くの点で変わった。現在、歌はますます複雑な音響機器を使って、ますますレコードのために作られるようになっている。この分野では一曲ごとに何らかの発明が必要だ」

だが、パウルスがこれらの新しい技術手段を作品に上手に取り入れているとはいえ、彼の創作の最も力強い側面は、自由な即興性、歌の器楽的基盤、叙情的なメロディーである。得意なピアノの響きが、つねにエレクトロニクスを凌駕している。



人気歌手アーラ・プガチョワと



パウルスはふつう自宅で作曲する。まずメロディーの輪郭をノートに描いて、それをしばらく放っておく。まるで忘れようとでもするかのように。これはまだ歌ではなく、アイデアにすぎない。しばらくたってから、もういちどそれに立ち戻って、こんどは聴衆の身になってそれを読み直す。それで気に入れば、いよいよ本格的な作業にかかるというわけである。

ソ連の有名な演奏家の多くが、ほかならぬパウルスの作品から演奏活動に入ったというのは興味深い。演奏家たちはしばしば、パウルスの作品によって国際的なコンクールで高い賞を受けている。すでに何年にもわたって、どの演奏家もシーズンの開幕には必ずといっていいほどこの作曲家の作品を取り上げているというのもうれしいことだ。

パウルスとソ連の人気歌手アーラ・プガチョワやワレリー・レオンチエフとの共演も非常に面白い。これは軽音楽ファンにとって思いがけない発見となった。

だが優れた歌は、単にすばらしい音楽、演奏家にとって選びやすい曲というだけではない。ライモンド・パウルスは歌詞にとてもうるさい。だからアンドレイ・ボズネセンスキー、ロベルト・ロジェストベンスキー、アンドレイ・デメンチエフといった興味深い詩人たちがこの作曲家と協力しているのは偶然ではない。

ライモンド・パウルスはラトビア・ラジオ・テレビ放送の音楽番組のチーフ・ディレクターであり、つねに各地で演奏会を開いており、名の通った軽音楽団や児童ボーカル集団を指導している。これで時間が足りるのかと不思議なくらいだ。

「私の生活は、すなわち仕事である」とパウルスは言う。「仕事は私にとっていちばん大切なものだ。だから舞台に出て、私の音楽を待っていてくれる人々に会えれば、それ以上何も望むことはない。これが私の仕事に対する最大の報酬なのだ」

コンサートホール〝ロシア〟で行われた演奏会の主人公は作曲家ライモンド・パウルスその人である。彼は演奏会の進行とともに、自分の才能のさまざまな面を、軽快に、自然に、縦横に披露する。彼は名ピアニストであり、指揮者であり、すばらしい伴奏者でもある。彼は演奏会にリズムと調子を与え、意のままに楽手、踊り手、歌手を舞台に引き入れ、進行を一瞬たりとも中断させない。ときには火のように燃え立つ、ときには悲しみに満ちたメロディーを縦糸に、さまざまな登場人物を横糸に、演奏会は美しい音楽の布地を織り成して行く。

▶人気ジャズバンド〝ディアパゾン〟と一緒にリハーサル



戦勝40周年記念

勝利の兵器

全ソ切手収集家協会会員
イーゴリ・ザハロフ













ソ連通信省は昨年中早くも、ことしの大祖国戦争の戦勝40周年を記念して「勝利の兵器」切手シリーズを発行した。このシリーズは戦争中に活躍したソ連の戦車、自走砲をテーマにしており、5種類あって、それぞれ額面は10コペイカである。

左の切手の一番上は、戦時中最もすぐれた中型戦車として名を馳せたT34。戦車はたえず改良され、戦場では敵の強力な戦車にも負けなかった。

次は一九四〇年から大量生産されたソ連の重戦車KV。開戦直前にモデルチェンジされ、一九四二年末までソ連の最も強力な戦車として活躍した。

3番目は一九四三年12月から実戦に登場した、85㎜半自動砲装備の重戦車IS1。その後この戦車は一二二㎜砲を装備し、IS2と命名された。距離二〇〇〇—二五〇〇mのどんな敵戦車をも撃滅できた。

4番目は大祖国戦争後半に前線に姿を現した中型自走砲SU一〇〇。戦車の砲よりも重くかつ強力な砲を備え、直接戦場で火力支援に当たった。SU一〇〇の重さ15㎏の破甲弾は距離一〇〇〇mから一六〇㎜の装甲を射ち抜くことができた。

一番下は重自走砲ISU一五二。この一五二㎜榴弾砲は約50㎏の砲弾で目標を撃破した。

どの切手の戦車、自走砲も記念碑の台座に載っている。それぞれの切手には祖国戦争勲章と「勝利の兵器」の文字が入ったリボンが描かれている。図案はG・コムレフ。印面寸法は55・5×26㎜、オフセット印刷。

＊　＊　＊

ことし初めソ連通信省は、モスクワで開かれる「大祖国戦争におけるソビエト国民の勝利40周年」全ソ切手展にちなみ、切手を印刷した記念封筒（見出しの左に紹介）を発行した。しかし戦勝40周年関係の主な記念切手、封筒はことしの4—5月に発行されることになり、いずれ本誌で紹介されよう。



“ジョギングが健康にいいのは人間だけじゃないぜ…”
（F・カバシキン、V・フリストフォロフ撮影）

短信アラカルト

モスクワ国際映画祭

今年の6月28日から7月12日までモスクワで開かれる第14回国際映画祭の主な目的は、映画人の国際協力を拡大、強化し、平和と進歩をめざす世界の映画人の団結を強めることにある。

これまでと同じく「映画芸術のヒューマニズムのために、諸国民間の平和と友好のために」をモットーに開かれる映画祭のプログラムは、劇映画のコンクール、児童映画の試写会など盛り沢山である。多くの国の有名映画人で構成される三つの国際審査員団が入賞作品を選ぶ。映画祭開催中はモスクワの映画館で各国の数百本のコンクール外作品が上映される。

前回一九八三年のモスクワ映画祭には一〇二カ国と六つの国際組織、各国組織が参加した。今年も多くの参加者が見込まれる。

モスクワに新美術館

近く完成するモスクワの国立ソ連美術館は、多民族ソビエト芸術の作品を収蔵、展示する最大の美術館になろう。すでに一部開館され、絵画、版画、彫刻などの作品が一連のホールに展示されている。ここには各連邦構成共和国の一万六〇〇〇点以上の美術品が永久保管される。

この美術館の展示ホールの面積は一万七〇〇〇平方m余りで、全部を見て回るには6㎞も歩かねばならない。美術品の大収蔵庫、美術家たちの文書記録を保管する大図書館、会議場もある。照明と温度は自動的に調節される。集中収じん装置があるので、広い館内も短時間で掃除できる。

カマ・トラクター工場の着工

このほど着工されたエラブガ市（タタール自治共和国）のカマ・トラクター工場は、年間三万台のタイヤ・トラクター、ディーゼル・エンジンや関連装置を製造する敷地面積一二七haの大工場になる。この工場で製作される一五〇馬力のトラクターMTZ一四二は、耕起・中耕・播種・収穫用などの各種の農具と組み合わせて労働生産性の高い農作業に利用されよう。

火炎越しの射撃

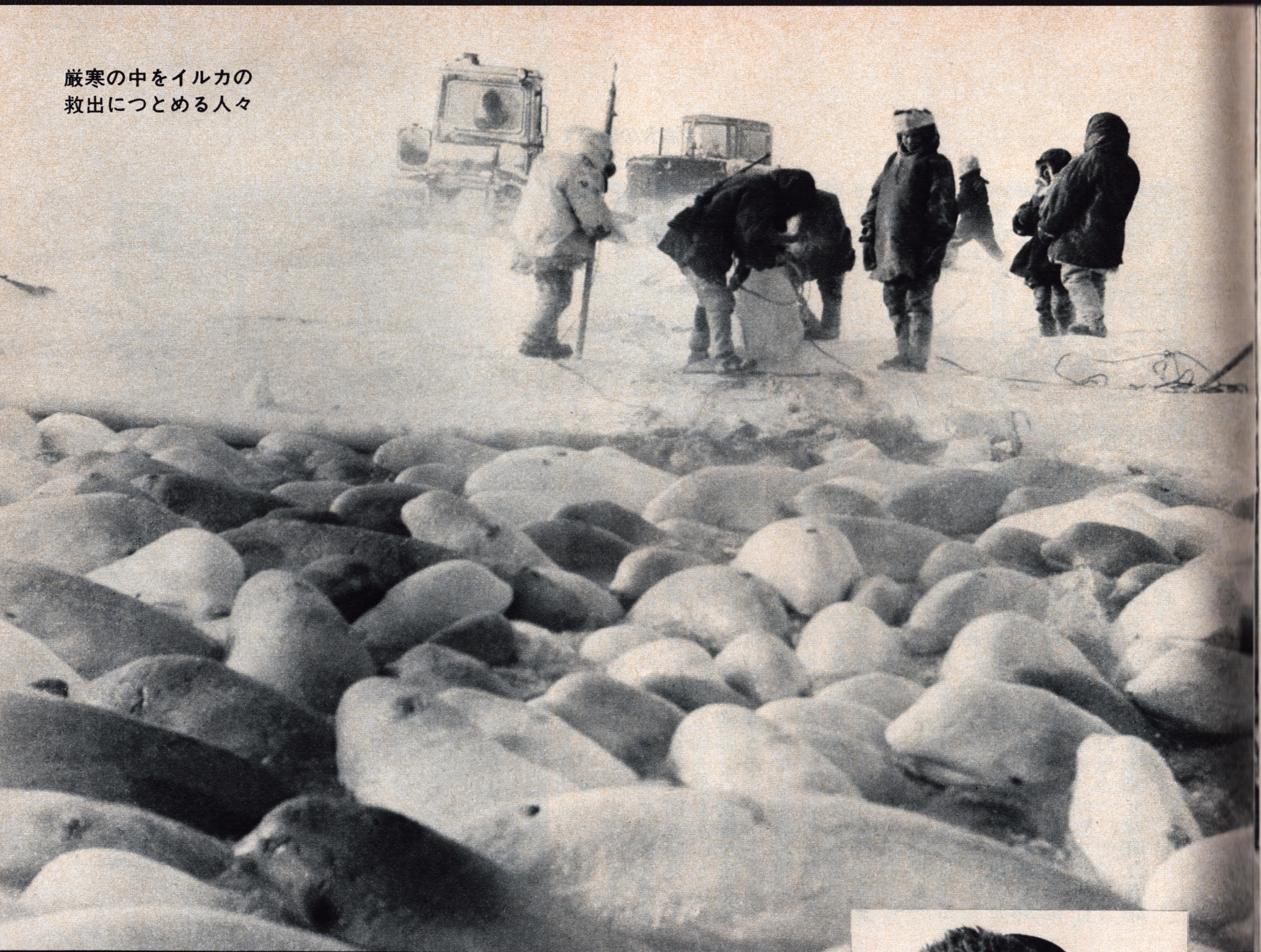
クラスノダル（ソ連欧州部の南）の陶磁器工場「チャイカ（カモメ）」の食器を連続して焼く窯炉の中の天井部のれんがの一つが幾分突き出たため、陶器を焼くのに必要な温度が保てず、不良品が出た。窯炉が停まれば損害は大きいとあって、工場の防災担当者で、名射撃手でもあるユーリー・コマノフは突き出たれんがを銃弾で砕き取ることにした。燃えさかる火炎越しに小口径のライフル銃を10発射ち込み、見事れんがの一片を正確に割り取り、割り取った跡の個所のデコボコまでなくした。

プーシキンが通ったカフェ

「文学カフェ」がレニングラードの新名所になっている。このカフェ（パブ）は、19世紀に同じ場所にあった店を復元したもの。以前のカフェは当時の首都の知識人たちに人気があり、ロシアの大詩人アレクサンドル・プーシキン（一七九九—一八三七）もたびたび通ったといわれる。

復元されたカフェの1、2階のホールのインテリアと調度は、プーシキンの頃の時代色を出しており、大燭台、壁燭架、ゴブラン織、家具は昔の見本に従ってレニングラードの職人たちが製作した。

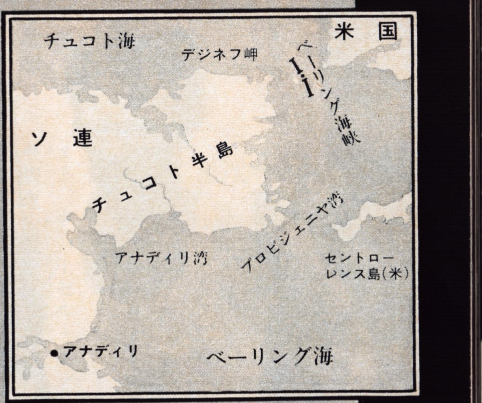
「文学カフェ」は文学、音楽関係の会合やパーティに使われており、メニューは19世紀初めのロシア料理とフランス料理、飲み物など。



厳寒の中をイルカの
救出につとめる人々



イルカ救出作戦実
施中のモスクワ号



ベーリング海の シロイルカ救出作戦

本誌記者 ユーリー・バラキレフ

シロルイカの大群が魚群を追うのに夢中になったあまり、氷群にとり巻かれて、ワナに落ちたようにどうにも動きがとれなくなった。ところはチュコト半島沿岸のプロビジェニヤ湾地区のセニャビナ海峡の浅い入江での出来事。観測の結果、体重1トン半のシロイルカ三〇〇〇頭あまりが氷のとりこになっていることが分かった。

このシロイルカを救おうとした地元の住民の折角の努力も水泡に帰した。イルカと氷のない水域との間を塞ぐ氷の壁は余りにも厚かったのだ。入江のごくわずかの開氷面には苦しみもがくイルカの頭が終始つき出ており、まさに危機的事態に直面していた。このままでは氷に閉ざされたまま、中のイルカが残らず死んでしまう恐れがあった。そこで地元の漁業監督局は船員たちに援助を求めた。こうしてプロビジェニヤ湾から砕氷船モスクワ号が現場へ急行した。

シロイルカ救出作戦は、こうした大型砕氷船でも手に余ることが分かった。氷が堅く結合しているうえに、入江が浅いので、イルカが広々した海へ出る道は簡単には開かなかった。

それでもやっとモスクワ号はセニャビナ海峡に突入できた。高い舷側から見下ろすと、息の詰まったイルカがわずかな開氷面で、氷の下の仲間と交替しあって息を継いでいるのが見えた。

わずかな開氷面に頭を出し
て救出を待つシロイルカ





救出作業の指揮をとったゲンナージー・パラモノフ・プロビジェニヤ地区漁業監督局長

イルカはもうすっかりグロッキーになっていて、周りのことには無関心で、食べ物をやっても反応しなかった。とりあえず自由に呼吸できるようにすることが先決だった。

そのためにはイルカを氷の中から脱出させねばならなかった。しかしモスクワ号に同乗してきた海洋哺乳動物の専門家たちでも、この臆病な動物がはたして砕氷船の後についてくるかどうか、確かなことは言えなかったし、この異常な救出作戦の最重要段階でどう行動すべきかを、誰も砕氷船の船長に教えることはできなかった。

「われわれは、まず船尾の方から氷の壁の外に出たあと、割れた開氷面から再度氷の中に入り、亀裂をつくってイルカが出てくるのを待つという戦法をとった。この運動を何度も繰り返すうちに、イルカはわれわれの意図を〝さとり〟、砕氷船の後についてきた。こうして1km、2km……という具合に氷の壁を脱け出していった」

モスクワ号が現場に到着した最初のころ、イルカは全く動きがにぶかったので、船員たちは氷の上に下りて、イルカの背をぴしゃぴしゃ叩いたりした。イルカはそのあと氷の中に開氷面ができると、姿を隠した。やがて自分の方から船に近付いてくるようになり、船の周りを八方から取り巻いた。子供のように喜び、飛びはね、流氷ごとに分散していった。しかしもう人は寄せつけず、人影が近付くと水中に隠れた。

それからある晩突然ものすごい寒気が襲った。一面氷柱だらけになった船は、イルカから離れずに、少しずつ動きながら氷を辛抱強く割っていった。夜が明けると、このキャラバンを前進させるねばり強い行動がまた再開され、そしてまたも思いがけない困難にぶつかる。イルカはもう氷の亀裂面での暮らしに慣れ、元気になり、いやいやながらも砕氷船の後についてくるようになった。再び砕氷船が次々に氷を割り、進路を広げてゆく。

モスクワ号はセニャビナ海峡で7昼夜奮闘した。厚さ2m－4mの2回目の結氷でできた6マイルの堅氷の壁を打ち破り、第1回目の結氷による厚さ1・5mの堅氷の5マイル氷域を通過し、氷のとりこになっていたシロイルカを見事に救出したのである。

はるかなチュコト半島でのイルカの救出作戦は、多くの国の注目を浴びた。ロンドンに本部のある国際環境保全団体「グリンピース」は、こんどの救出作戦が無事終わったと知ると、ソ連政府に感謝の電報を送った。ロイター通信は、救出作戦には五万五〇〇〇ドルかかったと見られると書き、いまや〝シロイルカ〟は〝金イルカ〟になったとコメントした。

日ソ交流協会第21回総会



日ソ交流協会の総会であいさつするスミルノフ・ソ連対文連・ソ日協会代表団長（写真提供＝日ソ交流協会）

3月16日、東京・千代田区の霞が関ビル東海倶楽部で、日ソ交流協会第21回総会が開かれた。

総会は吉田峰夫常任理事の司会で開会。来賓が紹介され、議長に山科正年、書記に青木　武両常任理事がそれぞれ選出された。

加藤琢治会長は大要つぎのようにあいさつした。

「わが日ソ交流協会は微力ながら絶えず日ソ親善のためにつくして、満20年を経過した。この間、複雑極まりない内外の政治関係にあって、日ソの諸関係が真に好転したかといえば、私は大いに疑問である。これはわが国政府が現時点で核戦争絶対反対、核兵器廃絶のために世界に向かって発言し、行動することを不鮮明にし、あいまいにしているからである。私はこのような基本的姿勢をはっきりさせること、平和憲法、非核三原則、世界平和を守ることが何よりも必要であり、唯一被爆国であるわれわれの当然の義務であると考える。たがいに誠意をこめて接し、政治形態のちがい、思想、信条を超えて相互信頼、相互理解に基礎をおく日ソ間の永久の善隣友好関係の確立を祈念したい」

来賓として総会に出席した駐日ソ連大使代理のフェジャイノフ参事官、ソ連対文連・ソ日協会代表団の団長スミルノフ・ソ日協会副会長もあいさつし、それぞれ日ソ交流協会の独自な活動を高く評価した。

議事に入って、昨年度の会務報告、収支決算報告、会計監査報告が承認され、今年度の予算案が可決された。

なお、総会に先立って日ソ交流協会とソ連対文連・ソ日協会（Y・I・スミルノフ、S・P・ハーリン両代表）の間で一九八五年度の文化協力計画が調印された。

役員選挙が行われ、会長に加藤琢治、副会長に佐藤　勇、伏見康治の各氏が再任され、岡本正己氏が新たに副会長に就任、理事長に中地　昭女史が再任、常任理事が選出された。

総会は斉藤進一常任理事の閉会の辞で終了した。

敦賀を訪問したナホトカ市代表団

K・デリバス



敦賀市内のレストラン「ヨーロッパ軒」の調理場を訪れたナホトカ市代表団一行（写真提供＝敦賀市）

さる3月15日から23日まで高木孝一敦賀市長の招きにより姉妹都市ナホトカの代表団（団長ビクトル・グネズジロフ市執行委員会副議長〔副市長〕）が敦賀を訪れ、両市の友好を固めた。両市が姉妹都市となったのは一九八二年であるが、敦賀港とウォストーチヌイ港との姉妹関係が結ばれたのはそれよりも古く、一九七七年である。

昨年5月敦賀からナホトカ市に贈られた日本庭園は、両市の友好のシンボルになっている。

姉妹都市協定調印後敦賀市当局の招待で敦賀を訪問したのは、こんどの代表団が初めてである。

代表団には腕のよい数人の調理人が加わっており、友好の会合のさい幾つかのロシア料理の作り方を披露した。

グネズジロフ団長は最近のナホトカの事情について「現在ナホトカは第3次マスタープラン（一九八四—二〇一〇年）を遂行中である。ウォストーチヌイ港の発展計画による64のバース全部が完成すれば、港は今の10倍以上、つまり年間五〇〇〇万tの貨物を扱うことになろう」と本誌記者に語った。

高木市長は姉妹都市の交流計画について「来年は学生数約四〇〇名の2年制女子短期大学を開設し、その中にロシア語学習グループをおく計画である。将来は学生にナホトカへ学習旅行をしてもらうことになろう」と友好強化の抱負を語った。

読者のページ

栃木県　岩上　るみ子

「今日のソ連邦」、毎号興味深く読ませて頂いております。まだ私は4冊しか読んでいませんが、私が今まで思っていた以上にソ連の人の人間味、暖かさを感じ、ますますソ連について知りたくなりました。今後とも、日ソの交流のためによいものを作り続けて下さい。1人でも多くの人がもっとソ連を知り、理解し、親しめるよう私も大いに希望します。それと読者の意見を載せるスペースがあったらすばらしいと思うのですが……。

兵庫県　本田　善彦

貴誌の定期購読を始めて、まだひと月余りの新米読者です。

私は普段からモスクワ放送を聞いたりして、ソ連邦の情報を興味深く集めています。そんな私にとりまして貴誌はかけがえのない情報源となりつつあります。さて、その貴誌にお願いが二つあります。

一、音楽情報（クラシック、ポピュラー、民族音楽など）を定期的に（できれば毎号）紹介する記事を希望します。

一、日本の、あるいは全世界の読者たちの意見を掲載する誌面を設けて下さい。他の人々の貴誌への感想や意見、大いに興味があります。

京都府　奥村　豊彦

私は「今日のソ連邦」を購読しはじめてからもう3年余りになります。

早速ですが、私は現在連珠五段で本年ソ連へ行く予定になっております。そこでお尋ねしたいのですが、本年9月にソチで催される芸術祭（期間中、連珠の国際大会が開かれます）の詳しい内容、及びソ連での連珠の現状、発展状況はどのようなものでしょうか。

既に「今日のソ連邦」でも一九八二年第13号で連珠の記事を見ることができましたが、今度も「今日のソ連邦」で取りあげていただければ幸いです。

宮城県　田村　由美子

去年より「今日のソ連邦」を愛読させていただいております。少し前に届きました第6号にフィギュアスケート選手の記事があり大変うれしく、興味深く拝見しました。東京で開かれました世界選手権ではソ連勢がペア、男子、アイスダンスと圧勝し、本当に期待どおり素晴らしいスケーティングを見せてくれました。ところで質問があるのですが、アイスダンスで見事優勝を果たされたアンドレイ・ブーキンさんに是非祝福のお便りをしたいのですが、宛先はどこにしたら良いのでしょう。英語ではダメですか？

☆編集部から

ソ連のスポーツ選手に手紙を出したいという同様のお手紙を、編集部ではたくさんいただいています。選手の住所は編集部でもわかりませんので、お手紙はソ連閣僚会議付属体育・スポーツ委員会内の各競技連盟気付で出してみて下さい。本人に届くはずです。住所は左記の通りです。なお、お手紙はロシア語か英語でお書き下さい。

ソ連体育・スポーツ委員会

The Physical Culture and Sport Committee under The USSR Council of Ministers

(8,Luzhnetskaya nab.,Moscow,USSR)

催し物のお知らせ

☆ソ連民族舞踊団（モイセーエフバレエ選抜チーム）の公演

筑波・科学万博ソ連館（4月13—20日）、筑波・科学万博催事場（4月22—28日）、東京銀座・博品館劇場（5月1—6日）、大阪毎日ホール（5月7日）、姫路市文化センター（5月8日）、静岡市民文化会館（5月9日）、西脇市民会館（5月10日）、福岡・郵便貯金会館ホール（5月11日）、水戸・茨城県民文化センター（5月13日）、相模原市民会館（5月14日）、新潟・新潟県民会館（5月16日）、柏崎市民会館（5月17日）、古河市公会堂（5月18日）、東京・新宿文化センター（5月19日）、大宮市民会館（5月20日）

▽お問い合わせは、エミー・インターナショナル（電話03・234・7207）、東京・銀座博品館劇場（電話03・571・1003）、各地労音事務所へ。

☆ソ連アニメーション映画祭

大阪市・大阪市立子ども文化センター

5月11日（土）、18日（土）午後2回上映

前売一般1,000円、小中学生800円、親子券1,500円。

▽お問い合わせは、主催者の日ソ協会大阪府連合会（電話06・763・0877）へ。

☆ベロルシア共和国民族アンサンブル“ハローシキ”公演

仙台・市民会館大ホール（5月28日）、桐生・市文化センター市民ホール（5月30日）、富岡・中央公民館ホール（5月31日）、前橋・群馬会館ホール（6月1日）、長野・長野県民文化会館（6月2日）、長野県池田町・総合体育館（6月4日）、松本・市民会館（6月5日）、東京・千代田公会堂（6月7日）

▽お問い合わせは、日ソ協会（電話03・429・8231）へ。

☆映画「鶴は翔んでゆく」（旧「戦争と貞操」第11回カンヌ国際映画祭グランプリ受賞）ロードショー

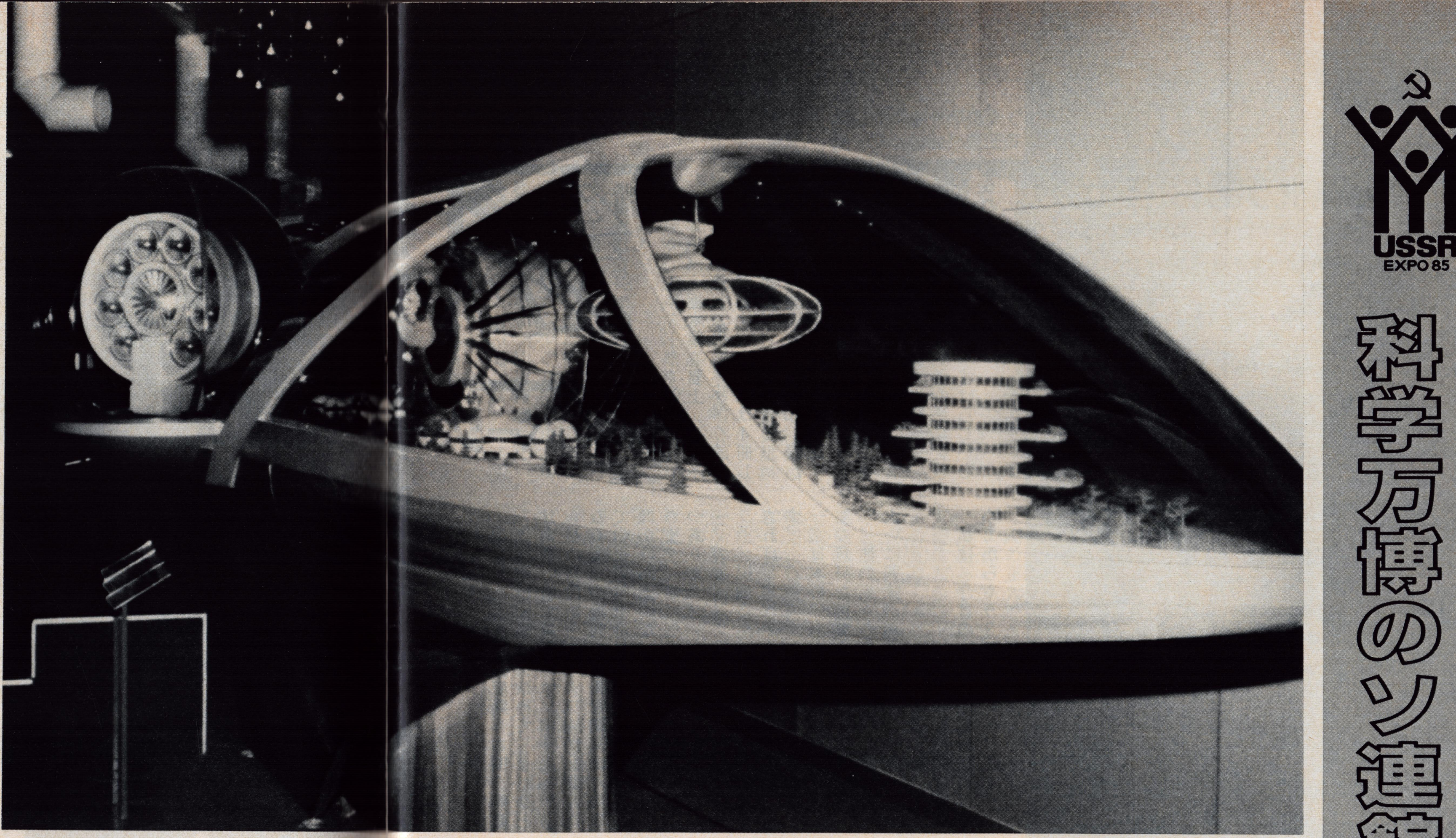
4月27日より、東京六本木・シネ・ヴィヴァン（電話03・403・6061）で。

特別観賞券1,200円（当日一般1,500円、学生1,300円）

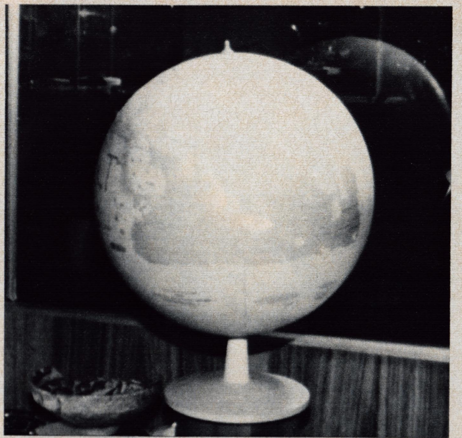
科学万博のソ連館をご紹介します！(2)

第3セクション「地球は全人類の家」（人間のための科学技術）

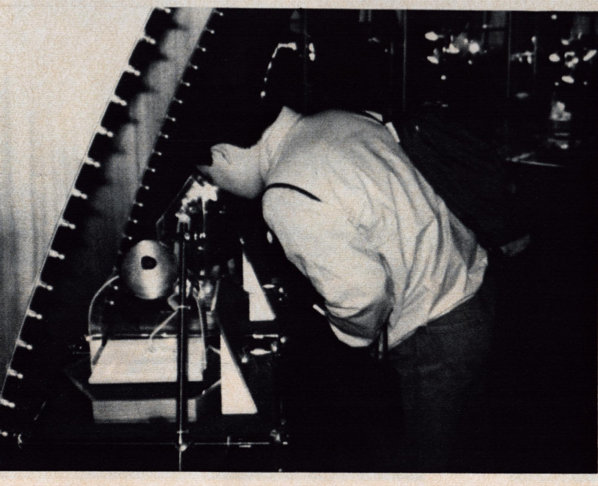
（7ページから続く）



炭素系素材がいたるところに使われる未来都市の模型



▶7世紀のアルメニアの学者シラカツィが作った地球儀の模型



エドゥアルド・カザリャンが作ったミクロ細工の作品は、拡大鏡で見なければ分からないほど小さい。

前途洋々の炭素系素材

「ソユズウグレロド」公団
医用特殊炭素系素材実験室長
Y・S・ロパト

炭素は地殻を構成する元素の中では、絶えず再生産され、循環している原料で希少な存在です。いまソ連の学者は炭素系素材を人間活動の事実上すべての分野で利用する可能性を研究しています。

炭素は食品工業ではこれに代わるものがないほど欠くべからざるものです。炭素化合物をベースとした合成食品は現代生活ではまったく現実的な事実になっていて、炭素化合物を使ってタン白質も脂肪も炭水化物も作ることができます。

現在分かっているように、コークス型炭素系素材は植物を水栽培するのにすばらしい人工土壌ですし、また炭素を粉末状にしたものは微生物、まず第一に酵母を培養する時の栄養源として使うことができます。酵母は、それを再生産することによって人間に栄養価の高いタン白質を供給できるただ一つの材料です。酵母に含まれているアミノ酸は人体が必要とするものをすべて満たすことができます。アミノ酸を多種含んでいるという点では牛肉も酵母にはとてもかないません。ですからソ連の学者は、炭素系素材を使った水耕栽培と、炭素を栄養源とする酵母の培養によって、人類の食料を確保するという課題を解決しようとしているわけです。

炭素はエネルギー産業にもなくてはならないものです。ご承知のとおり、黒鉛は炭素を強い火力で熱してできたものですが、原子力発電所の原子炉の必須材料です。運輸でも炭素は同じように必要欠くべからざるものです。比重が非常に低く強度が非常に大きな炭素系素材はいろいろな装置や機械を作るのに適していて、金属よりも優れた性能を持っています。実例を挙げると、炭素プラスチックは航空機のペイロードを70％も高めることができます。

炭素板は軽くて、電磁波のよい防護壁になり、簡単に温まりますから、未来の建築材料として有望です。これを使えば、建築家や建設関係者が今はまだ夢見るしかない非常に長い、スパン（はり間）のない橋をかけたり、堅固な構造物やドーム（丸天井）を作れるでしょう。これらの構造物の強度は鍛鋼製の構造物と同じですが、重量はアルミ製よりも軽くなります。炭素繊維を使った引っ張り荷重構造は、未来の都市の建物に思いもかけぬ形状をもたらすでしょう。

ソ連館には未来の都市の模型が展示してあり、それを見れば建築材料としての炭素系素材の大きな可能性が分かるはずです。炭素プラスチック製の飛行船で対流圏へ発電機を揚げ、高空の強い気流のエネルギーを利用するようにします。こうして得られた電力は炭素ケーブルで地上の住宅や産業施設に供給します。模型のなかの住宅の建物の右にも左にも農産物を水耕栽培する施設があります。模型の中央には、酵母を培養してタン白質を生産する施設があります。家屋も自動車もヨットもすべて炭素が主な材料になっています……。

炭素系素材を医学に利用する可能性については特に強調しておきたいと思います。炭素は容易に人間の体になじむので、人工骨、人工関節、人工組織、人工腱、人工靱帯など実にいろいろな代用物を作ったり、皮膚を育てたりするのに利用されます。特に炭素は、火傷（やけど）をした個所の皮膚でも、他の個所の皮膚の移植をせずに、非常に早く治して、新しい皮膚を再生させることができます。いまの医学では、全身の皮膚の30％以上を火傷した人の生命を救うことが事実上できません。炭素系素材で人間の体をマユのように包んでしまうと、全身の皮膚の70％を火傷した人でもその生命を救って全快させることができます。

将来は、人間の器官も炭素系素材から作れるようになるでしょう。人工腎臓、人工眼、人工内耳、人工気管、人工膝関節、人工骨盤、人工椎骨などです。炭素系素材は腐食しないし、人体内のいかなる環境のもとでも壊れないし、また拒絶反応を引き起こしません。未来は炭素系素材のものだという気がします。

低体温法による心臓手術

医学博士、血液循環病理学研究所（ノボシビルスク市）の小児外科医
E・E・リタソワ

心臓をのぞき見る、ましてや心臓内の何かを矯正するためには、心臓を血液循環から切り放さねばなりません。これは二つの方法で可能です。一つは心臓に人工の血液循環系をつなぐこと、もう一つは酸素の欠乏を防ぐ諸条件を生体内につくることです。



V・ポパルイキン作『ザクロの収穫』



T・ポロゴワ作『母子像』

　私たちは第2の方法を選び、低体温法を用いました。手術を受ける患者を深い麻酔状態下に置き、その体を氷で25―26度以下に冷却します。そうすると、生体の生命活動のプロセスは速度が数分の一になります。低体温法の場合、心臓の停止時間は90分に達するので、普通の外科医でさえ“乾いた心臓”に必要な手術を施すことができます。低体温法によって心臓移植を含む最も複雑な手術もできるようになっています。

　27年間に私たちの研究所では二万六〇〇〇人の先天性または後天性の心臓障害を持つ患者が手術を受けました。そのうち一万例の手術が低体温法の助けを借りて行われました。

骨は延ばせる

医学博士候補、クルガン整形外科学・外傷学実験・臨床研究所員
L・M・クフタレフ

　ソ連館の出品物にはレーニン賞受賞者のG・A・イリザロフ教授の発明品もあります。一九五一年にイリザロフ博士は手足の骨折や整形外科対象の疾患の治療法を革命的に改善することができる万能器械を開発しました。比較的わずかな数の多目的用途の部品で構成されるこの器械を用いて、大関節の疾患、結合しない骨折を含む手足の骨折の治療、骨の欠陥、先天性、後天性変形の矯正ができます。整形外科学・外傷学研究所の付属病院では六〇〇以上の独創的な治療法が開発されましたが、その大部分は世界の外科療法に類のないものです。

　研究の重要な方向は、手足の一部の欠損個所を復活させることで、これは整形外科学と外傷学に新しいページを開くものです。現在私たちは個々の骨や手足全体を60㎝まで延ばした経験を持っています。その場合、骨の延びは1昼夜に1㎜の速さで進みます。つまり、1カ月に手または足を3㎝延ばすことができます。イリザロフ法によって治療できるのは骨や関節だけではありません。脈管や柔らかい組織の欠陥部分を成形することができます。私たちは筋萎縮患者の手足の形状を成形し、その形状が健常な手足の形状と違わないようにすることができます。骨や関節の疾患を持つ患者に対するイリザロフ法による治療の効率は、疾患の種類にもよりますが、96―98％になります。骨や関節の多くの治療法は、特に子供の場合、外科手術をせずに施されます。世界のどんな国の医学者もこのような成果をまだ収めていません。

眼鏡よさようなら

医学博士候補、モスクワ眼科顕微手術研究所員
A・L・モスクビチョフ

　この10年間に眼科の手術には真の革命が起こりました。ソ連医学アカデミー準会員のS・N・フョードロフ教授が所長をしているモスクワ眼科顕微手術研究所では、白濁した水晶体を極めて精密なプラスチック製レンズ――人工水晶体に取り替える、白内障の外科手術が開発されました。この手術を受けた事実上すべての患者が積極的な生活に、以前の仕事に復帰しています。

　現代の世界では、近視は極めて大衆的な現象になりました。中等教育学校の高学年の生徒と大学生の$\frac{1}{3}$は近視のためやむなく眼鏡をかけています。当然ながらこれは職業の選択に一定の制限を加えます。ですから私たちは近視の外科的矯正術はフョードロフ教授のもう一つの大きな業績だと考えています。この治療法の開発は教授と研究所を世界的に有名にしました。

　眼科顕微手術研究所で開発された、角膜に放射状に刻み目を入れる手術は、2D（ジオプトリー）から10Dまでの近視を矯正することができ、手術例の91％が普通の視力を回復するというすばらしい成果を収めています（本誌この7号に関連記事）。

第4セクション
「人間は地上の最も大切な宝」

アルメニア共和国商工会議所職員
G・M・ナグジャン

　人類の文明発生地の一つであるアルメニア高原の歴史と文化を紹介する記事が「今日のソ連邦」のこの号に載るということですので（16ページ参照）、ここでは特に面白い二つの展示物に限ってご紹介しましょう。

　ソ連館のこのコーナーでは、7世紀の有名なアルメニアの学者アナニヤ・シラカツィの理論をもとに作られた地球儀が目にとまることでしょう。彼はヨーロッパの学者たちよりはるか以前に、地球が球状であるという理論を自分の学術研究の基礎にすえ、全地球の経緯度を計算し、当時の古代世界に知られていた地球の部分の地理を書き込みました。

　もう一つの展示品は、ソ連で人気の高いミクロ細工師エドゥアルド・カザリャン（60歳）の作品です。彼はアルメニア交響楽団のコンサートマスターであり、有名なバイオリン奏者です。しかし余暇にはミクロ細工にいそしむという多才な人です。

　彼のミクロ彫刻作品は美しさと表現力の点で他の追随を許さない見事なもので、顕微鏡でしか見ることができません。人間の髪の毛や米粒は彼にとっては単なる素材です。カザリャンはこれまでソ連の内外に知られた約三五〇点のミクロ細工を作りました。また彼は世界で初めて“動く”ミクロ細工を作りました。一九七五年夏、モスクワ技術博物館でカザリャンの作った極小



▶ウラル産くじゃく石の食器

右下　第4セクションにはソ連各地の民芸品が展示されている。



ソ連館の印象を感想帳に書く入場者





5月半ばまで映画・コンサートホールで連日行われるファッションショーは人気が高い。



ソ連館の売店コーナーではソ連の民芸品、食品、書籍、切手、レコード、ビデオカセットなどが買える。

テレビが公開されましたが、四つのチャンネルを受信するそのテレビは、人間の髪の毛の中にうめ込まれていました。

ミクロ細工作りは一種の趣味と言えますが、非常に実用的な性格も持っています。カザリャンはソ連の眼科医たち、特に眼科医のS・フョードロフ教授の注文で顕微手術用の極小の手術用具を作っています。針の先にダイヤモンド、鋼玉、サファイヤをはめこんだメスは目の組織を傷つけないので、患者は手術の15分後には家に帰れます。カザリャンが作った脳の血管縫合用の手術用具も同じように非常に小さなものです。

ソ連館には、彼の作った4点のミクロ細工――バイオリンの名器ストラディバリウスとガルネリウスの縮小コピー（木彫）、バレリーナの彫像、宝石の粉で作った花束、イチジクの種の半分を舞台に輪舞を踊る娘たちが展示されています。

カザリャンが日本で展示するためにわざわざこの筑波に持ってきた作品があります。長さ8㎜の人の髪の毛に、サクラの花に埋まる富士山を背景に85両の列車を彫刻したものです。各車両にはロシア語と日本語とほかの言語で「平和」という言葉が書かれています。カザリャンはこのミクロ細工を日本国民へのプレゼントにするつもりです。

人間と芸術

東方諸民族芸術博物館
（モスクワ）極東部長
N・A・カネフスカヤ

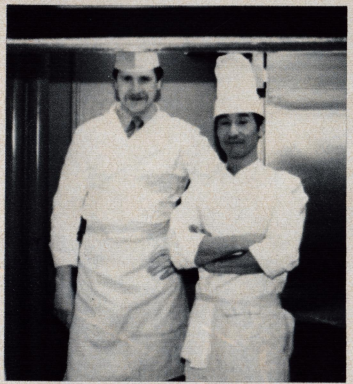
このセクションには最近10年間に制作された20点の絵と14点の彫刻が展示されています。しかしほかにもかなりの数の予備の作品を持ってきており、6カ月の万博開催期間中に何度か作品の入れ替えができるでしょう。これらの作品はトレチャコフ美術館、東方諸民族芸術博物館のコレクションや作者本人から借りてきたものです。私たちがこの科学万博に出展する絵や彫刻を選ぶさいに心がけたことは、さまざまな世代の美術家の作品を日本の方に見てもらおうということでした。大家のものもあれば、若手の人の作品もあります。

特に興味深いと思うのは、古い世代の人ですがタジク共和国の功労美術家V・ボバルイキンの作品です。彼の作品『ザクロの収穫』の強烈な色彩は、人々の目を奪います。

それに劣らず人目をひくのは〝幻想派〟の作家で、18世紀から19世紀の巨匠たちの画法を踏襲するN・フョードロワの作品でしょう。彼女の作品は描写をできるだけ正確なものに近付けるために、実に丹念に描かれています。私は多くの日本のお客さんがフョードロワの『夏』という絵を実に興味深そうに鑑賞し、絵の中の草花を日本の自然と比較しているのに気がつきました。



レストラン〝ロシア〟ではバラエティーに富んだロシア料理のメニューを用意した。



レストラン〝ロシア〟で働く日ソ両国のコックさん。

モスクワの自然愛好クラブの作品が展示されている「自然と創造」のスタンドは、きっと日本の工芸愛好家の心を奪うことでしょう。木の節、切り株、こぶ、松かさ、曲がった根っこなどが、これらの作品の材料です。

このセクションの貴石とその製品のコレクションはなかなか興味深いものです。宝石のまばゆい輝きや宝石細工師の見事な技術によって、青金石やめのう、チャロイート貴石、軟玉、人造エメラルドを用いた花びん、指輪、ブレスレット、ネックレスが真のすばらしい美術品になっています。

その隣にはホフロマ塗りの木製食器、ゴロデツ塗りの製品（いずれもロシア連邦共和国ゴーリキー州）、パレフの細密画（イワノボ州）、アルハンゲリスク（ロシア欧州部の北）やマガダン（極東地方）のセイウチの骨細工、グジェリの陶器（モスクワ州）、ボログダ（ロシア欧州部の北）の手編みレース、ボゴロツクの木製玩具（モスクワ州）、ダゲスタン自治共和国（ロシア連邦共和国北カフカズ）クバチ村の金属打ち出し細工など、伝統的なロシアの民芸品や手工芸品が展示されています。ソ連館では出来上がった民芸品だけでなく、その製作の過程もじかに見ることができます。民芸作家がお客さんの目の前でマトリョーシカ（入れ子人形）やジョストボ（モスクワ州）の盆の絵付けをし、ガラスを吹いてさまざまな人形を作ります。

おいしく召し上がれ！

ソ連館レストラン「ロシア」のシェフ
Y・D・マルチュク

私はモスクワっ子で、モスクワにある日本食レストラン「さくら」でコックとして働いています。ですからロシア料理の作り方だけでなく、日本料理の味も多少知っています。これがつくば万博のコックの候補に選ばれた理由だと思います。

一三〇人を収容できるわがレストラン「ロシア」では伝統的なロシア料理を賞味していただきます。主なメニューはモスクワ風ボルシチ、ペリメニスープ、コーカサス風シャシリーク、若鶏のタバカ、ビーフストロガノフ、日本でもおなじみのピロシキ、ロシア風紅茶などです。ワイン、ウオツカ、コニャックもいろいろ取り揃えてあります。どうぞ、レストラン「ロシア」へお越し下さい。



ソ連女子体操の新しいリーダー、
オリガ・モステパノワ（16歳）

スポーツ

ソ連女子体操の新リーダー
オリガ・モステパノワ

本誌記者 ビタリー・メリク＝カラモフ
カメラ V・ウン＝ダ＝シン

モスクワの中学生オリガ・モステパノワ（16歳、身長一五三㎝、体重39㎏）が世界の体操ファンに知られるようになったのは一九八三年のブダペスト世界選手権のときだった。ここで彼女は団体優勝、個人総合2位、個人種目別平均台で金メダルの成績を収めた。翌八四年の「友好84」国際スポーツ大会（体操競技はチェコスロバキアのオロモーツで開催）では団体優勝、個人総合優勝、種目別跳馬、平均台、ゆかで金メダルの成績をあげ、しかも4日間に16回演技して、そのうちの12回は満点の10点だった。このようなことは大きな国際競技会でいままでなかった。

本誌記者ビタリー・メリク＝カラモフがオリガ・モステパノワにインタビューした。



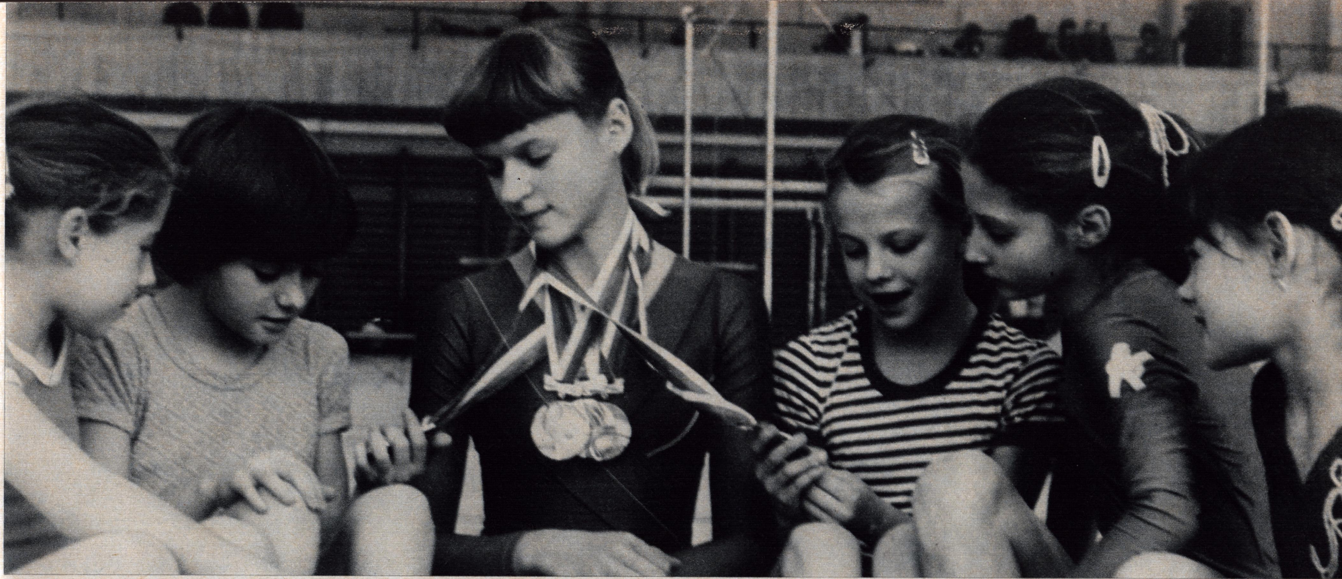
◀練習中のオリガ・モステパノワとコーチのウラジーミル・アクショーノフ

「体操を始めたきっかけは？」

「体操は大勢の子どもが集まって、とても楽しいゲームをするんだよ、とママが言ったのです。そのとき私はまだ6歳になったばかりで、この年齢ではそんな楽しそうな話を断るわけがありません。3カ月後、私と一緒にモスクワのスポーツ協会〝ディナモ〟の体操学校に入った32人の少女のうち、残ったのはわずか半数でした。その中でい



◀妹タチヤナとコリーのラージと



までも続いているのは二人だけです。私は親が体操をやらせたことを恨んではいません。あのころは宙返りをしたり走ったりすることが大好きだったのですから。トランポリンで跳ねるのも気に入りました。いまでは体操なしの生活なんて考えられません」

オリガの両親も体操に熱中していた。娘がチャンピオンになるかどうかなどということは考えてもいなかったが、父親のワシリー・モステパノフはオリガがまだ3歳のときに一緒に体操の練習を始めた。彼女は毎日父親と一緒に懸垂したり、腕立て伏せをしたり、脚前挙支持の練習をしたりした。最初の1年目に有名な専門家ウラジーミル・アクショーノフがオリガに目をつけた。当時アクショーノフはオリンピック・チャンピオンのエリビラ・サージ（ミュンヘン五輪とモントリオール五輪で団体優勝）を指導していたが、サージは一九七六年のモントリオール五輪を最後に引退することになっていた。そこでアクショーノフは代わりの教え子を探していたのである。彼は5人の少女を採用した。その中に7歳のオリガがいた。

「体操をやめようと思ったことは？」

「一度だけあります。9歳のとき。私たちは新しい住居に移ったのです。それまでは体操学校のすぐ隣にいたのが、こんどはバスに乗って、次に地下鉄に乗って、片道1時間以上もかかるようになってしまいました。行きは一人でしたが、帰りはパパと一緒でした。パパは鉄道技師ですが、夜は中等専門学校で教えていたのです。でも、私のせいで教えるのをやめなければなりませんでした。私はとても疲れてしまって、そのたびに体操をやめようと決意しました。パパも、やりたくないのなら、やらなくていいんだよ、と言ってくれました。そのくせ毎朝、私が目を覚ますと、きょうは練習に行くのかい、と聞くのです。すると私はなぜかいつも、行く、と答えてしまうのでした」

アクショーノフの回想によれば、小さいオリガは外見的には特別な印象を与えなかった。長い手、大きな頭。当時だれが、この子が美しい娘になると考えただろうか？　ただ一つ目立ったのは、足を〝バレエのように〟高く上げることだった。オリガが足を上げると、彼女のプロポーションはたちまち変わり、さながら小さなプリンセスになってしまうのだった。

9歳で試合に出るようになったオリガは、信じられないほどのまじめさで皆を驚かせた。彼女が固くなるのは試合のときだけで、普通の子はみんなそうだ、とアクショーノフは口を酸っぱくして弁明した。彼女はトランポリンで跳ねるのが好きで、それを使って空中でどんな宙返りもできる。空中での平衡感覚がすばらしく、地面に対する自分の状態を正確にコントロールできるので、コーチは彼女のためにユニークなコンポジションを作ってやることができた。

「7歳のときに一九八四年に向けてプログラムの準備を始めたというのは本当ですか？」

「私は、体操選手はどんなに出場回数の多い選手でも、一つのプログラムしか準備していないと思っています。それを適当に変えたり、できるだけ複雑にしたりはしますが、基本にあるのは、小さいとき身につけた技です。13歳のとき私は段違い平行棒で〝デルチェフ・サルト〟をマスターし、その後これに〝トカチョフ飛び越し〟を加えたのですが、そのあと世界選手権までの1年間に身長が10㎝も伸び、体重も増えてしまって、この連続技は断念しなければなりませんでした。一九八八年までにはそれを復活できるかもしれません。その代わり、跳馬はすべてが順調でした。私は〝塚原跳び〟から始め、これにひねりを加え、さらにそれにフリックフラックをつけ加えました。ひねりはすでに1回半に達しています。〝友好84〟国際スポーツ大会の前には2回ひねりもできるようになっていましたが、リスクを冒さず、それはやりませんでした」

これらのエレメントは超難度の技に属し、これができるのはオリガ・モステパノワだけである。だが彼女は決して冒険はせず、十分にこなしていない技はやらない。彼女は体操にはリスクが避けられないことは知っているが、ウルトラCのコンビネーションに取りかかる前に、それを注意深く研究、熟考して、基礎を何百回となく練習する。

「学校の勉強はどうですか？　体操のほかに好きなものは？」

「私は学校で1日の$\frac{1}{3}$を過ごしています。成績はまあまあです。特に優れてはいませんが、落第すれすれでもありません。歴史ものを読むのが好きで、家にいるのがいちばん楽しいです。妹のターニャにせがまれて、両親がコリーの小犬を買ってくれました。妹はスポーツをやっていませんが、代わりに音楽を習っています。犬と遊ぶのはとても面白い。私は子どものときからアイスホッケーを見るのが好きで、パパがテレビで観戦するときはいつも一緒に見ます。だからスポーツの中ではアイスホッケーがいちばん好きです」

「競技会は好き？」

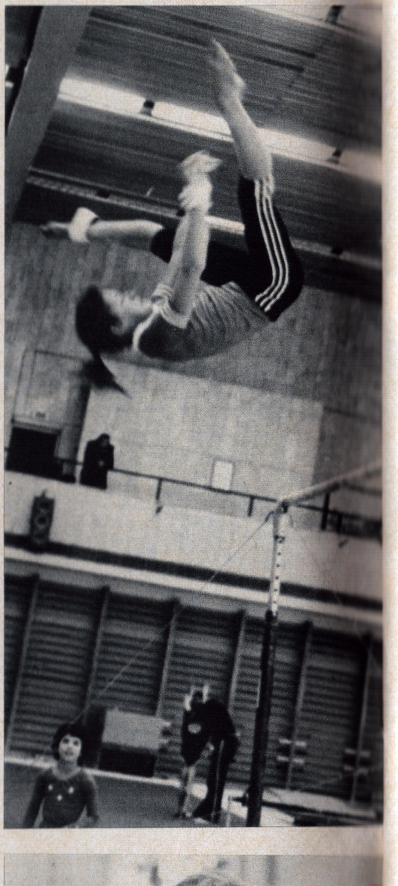
「ライバルがいるときだけ。昨年のソ連カップには強敵が出場しなかったので、がっかりでした。あとでコーチにお目玉をもらいました。きみの時代がきたのだ、うかうかしていてそれを逃してしまったのでは何にもならない、いちばん責任の重い時期に相手不足を嘆くために8年間練習してきたんじゃないのだ、と言われました」

※　※　※

専門家たちの意見によれば、オリガ・モステパノワはまれに見る天与の体操選手だということだ。競技会のレベルが高ければ高いほどいい技を見せる。彼女は驚くほど動作の調整に優れており、複雑な技を遂行する技術を独自に表現する稀有の能力を持っている。コーチと同様にオリガも、コンビネーションに有機的に組み込まれた超難度の技がプログラムになければ、現代の体操ではとてもトップクラスに立てないと考えている。だからモステパノワはどの種目のプログラムにもウルトラCのエレメントを入れている。たとえば〝オリガ・モステパノワの連続技〟と呼ばれている平均台の演技は有名だ。これは台の上で逆立ち1回半ひねりをやって、そのあと、以前はゆかでしか行われていなかったコルピンスキー後転とびが続くというものである。いまのところこの技はオリガ・モステパノワにしかできない……

上　スポーツ協会〝ディナモ〟の後輩たちに囲まれて



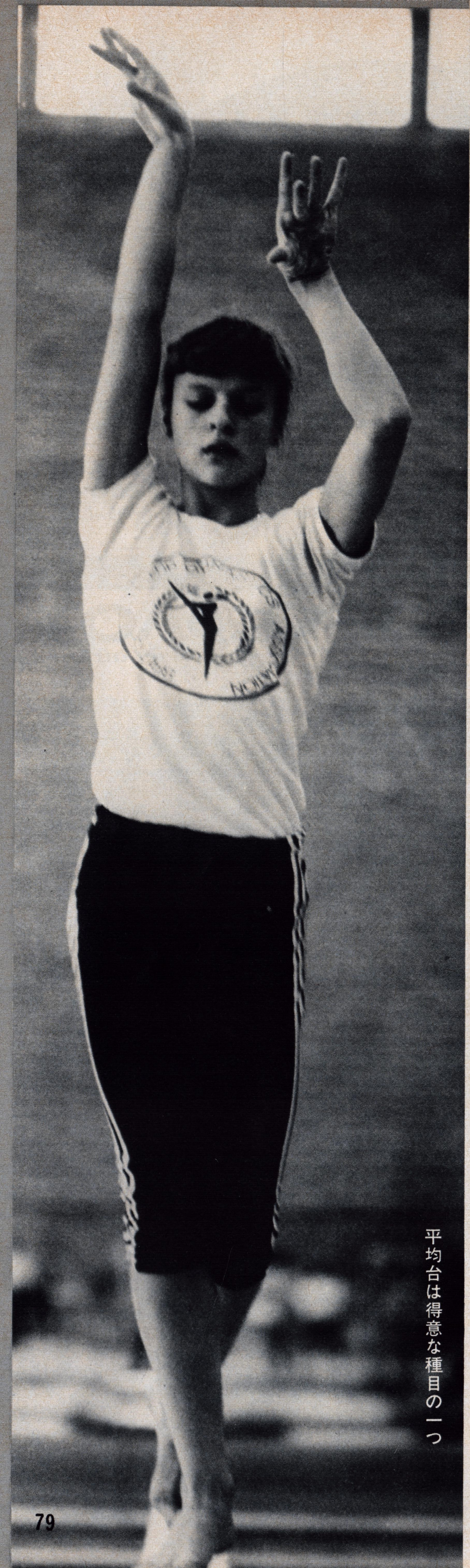




左上　練習前のウォーミングアップ

左中　高度の技もたゆまぬ練習から

左下　学校の化学の実験



平均台は得意な種目の一つ

Intourist
ソ連政府観光局

白　夜



エルミタージュから白夜のネバ川を見おろす

〝北のベニス〟・レニングラード。この街を物語るのは、ネバ川と数多くの運河、橋、青銅の騎士像、エルミタージュ美術館、そして白夜。詩情あふれる幻想の世界は人々の想像力をかきたて、横町の小路さえドラマを生み出した。プーシキン、ドストエフスキー……魅せられた人の数は尽きない。

6月21日から29日までの芸術祭「白夜」は北の都の祭典である。

世界青年学生祭記念クイズ

〝モスクワ青年祭へ向けて〟

——1等賞は8日間のソ連旅行にご招待

XII・MOCKBA・1985

USSR АПН АГЕНТСТВО ПЕЧАТИ НОВОСТИ MOSCOW

Intourist ИНТУРИСТ USSR Company for Foreign Travel

АЭРОФЛОТ Soviet airlines

ことしの夏、モスクワで行われる第12回世界青年学生祭を記念するクイズに参加しませんか？　これは本誌が主催する今年2回目のクイズです（恒例の愛読者クイズ〝あなたはソ連をご存じですか？〟はすでに締め切りました）。

今回のクイズ〝モスクワ青年祭へ向けて〟の応募資格には制限は一切ありません。どなたでも参加できますが、クイズのテーマからして、まず本誌の若い定期読者に応募をお勧めします。

このクイズは次の団体の共催です。

ノーボスチ通信社（APN）——ソ連の社会団体が設立した報道機関。本誌の記事と写真もここが提供している。

第12回世界青年学生祭**ソ連準備委員会**。

インツーリスト——世界一六二カ国から旅行者を受け入れ、七〇〇以上の外国の旅行会社、運輸会社と協力している全ソ旅行公社。

アエロフロート——世界最大のソ連の航空会社。年間輸送旅客数は一億人以上、航空路の総延長は一〇〇万kmを超える。

クイズはソ連の生活や歴史、ソ日関係に多少なりとも関心のある方ならどなたでも答えられます。

愛読者クイズ〝モスクワ青年祭へ向けて〟の問題は次の6問です。

第1問　第1回世界青年祭はどこで、いつ行われましたか（年月日）？　モスクワでかつて世界青年学生祭が開かれたのはいつですか（年月日）？　これまでの世界青年学生祭の標語の中で最も多く使われたことばは？

第2問　14歳から28歳までの四二〇〇万の青年男女を結集しているソ連最大の青年団体の名称は？

第3問　「今日のソ連邦」誌の創刊号が発刊されたのは何年何月でしょう？

第4問　一九五八年、ソ連に青年ツーリストの国際交流を専門に行うツーリストビューローが設立されました。現在は世界88カ国五五〇の青年・学生・労組・ツーリスト団体と協力し合っています。このツーリストビューローの名称は？

第5問　モスクワ＝東京間に直通空路が開設されたのは何年何月でしょうか？

第6問　ソ日間にはモスクワ＝東京間の定期空路のほかに、どんな都市間に定期直通空路があるでしょうか？　この便の開設は何年何月ですか？

正解者には次の賞が贈られます。

1等（1名）　一九八五年秋に8日間のソ連旅行へご招待。

2等（2名）
3等（5名）
奨励賞（8名）
——ロシアの民芸品、レコードアルバム、写真集その他。

回答の締め切りは一九八五年6月1日（当日消印有効）。回答はハガキで、お一人一通にかぎります。問題の番号と答えのみお書き下さい。

ハガキには必ず氏名（ふりがな）、年齢、性別、職業、住所（郵便番号も）、電話番号をお書き下さい。

あて先は〒141東京都品川区東五反田3－9－13　ソ連大使館広報部「今日のソ連邦」クイズ係。

結果の発表は、本誌一九八五年14号（7月15日号）の予定です。

今日のソ連邦
一九八五年5月1日号
昭和五十四年六月二日第三種郵便物認可　発行人　加藤宣幸
編集・ソ連大使館広報部（郵便番号141・東京都品川区東五反田3—9—13・電話03・447・3536）
印刷・発行所（株）新時代社（郵便番号101・東京都千代田区神田神保町1-4・電話03・293・4381）
定価　一五〇円
（購読料は会費に含まれる）

